

地域連携推進機構年報

第5号

2018年3月

園田学園女子大学
園田学園女子大学短期大学部



シンポジウム「経験値教育と女性活躍」2018.02.10

原田規梭子氏（東洋学園大学学長）・稲村和美氏（尼崎市市長）・川島明子氏（本学学長）野呂千鶴子氏（本学教授）



つながりプロジェクト最終報告会 2018.01.20

吉田ほなみ（人間看護学科4年次生）の発表



政策提言発表会 2018.02.13



COC+シンポジウム「地域歴史遺産としての「営みの記憶」—災害復興の現場から—」
大江篤氏（本学）・俵木悟氏（成城大学）・松下正和氏（神戸大学）・上梶英之氏（国文学研究資料館）

巻頭言

本学は、開学以来、建学の精神「捨我精進」に基づき、「経験値教育により他者と支え合う人間の育成」を掲げています。その間、30年以上の生涯学習の歴史を誇り「地域と共に歩む大学」として、地域に開かれた大学づくりを推進しています。

平成25年度から推進している文部科学省の地(知)の拠点整備事業「〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム」は、最終年度の5年目を迎えました。

この間、尼崎市や尼崎商工会議所、尼崎市社会福祉協議会の提携先や多くのNPO、自治会などの市民団体の方々と連携し、「健康づくり」「学校教育」「生涯学習」「子ども・子育て支援」の領域で、「町の相談室」において地域のニーズを発掘し、地域と共に地域課題の解決に取り組む教育、研究のプログラム開発を推進してきました。さらに、課題の解決のための体制構築、そして学生と地域の人々が協働して地域で学び、地域に学びさらに地域へ学びの還元を行う、循環型の経験値教育の具現化に取り組みました。

平成28年度から、大学2年次生全員が、地域をフィールドにして、学部学科を横断して取り組む「つながりプロジェクト」というPBL型の必修科目を開講しました。この科目で、学生は地域で学ぶことにより、学部、学科の枠を超えた学生間のつながりができるとともに、受け入れ先の地域の方々の中で新たなつながりも生まれ、学生を核に地域が活性化されることをめざして生き生きと活動しています。

教職員や協働していただいている地域の方々のご尽力により、学生は地域での学びを通して、安心して、失敗と成功体験を繰り返し経験し、確実に経験値教育を実践しており、〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラムの具現化が進展してきています。改めて地域とのつながりの大切さと教育改革の確かな手ごたえを感じています。

本事業は平成27年度からは、「地(知)の拠点大学による地方創生事業」として発展し、地域社会のニーズに合った人材養成のための教育改革に取り組んでいます。本事業の推進により、主体的に、多面的に課題に向き合える女性を育成し、地域創生の一翼を担う取り組みを推進してまいります。

今後も、地(知)の拠点整備事業の経験を踏まえ、地域課題解決への貢献という本学の開学以来の使命を息の長い取り組みとして、継続してまいりたいと考えております。

本報告書は、平成29年度に実施しました「地(知)の拠点整備事業」の活動をまとめたものです。学内外の皆様にご高覧いただき、変わらぬご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成30年3月

園田学園女子大学

園田学園女子大学短期大学部

学長 川島 明子

目次

巻頭言	1
目次	2
地域研究報告	3
専門職教育と経験値教育：人間看護学科	4
活動報告 No.1 2020 年度に向けた 1 人一台のタブレット端末導入の尼崎市モデル高校版の作成	14
活動報告 No.2 地域に向けた手洗い指導の拠点の構築 継続した取り組み	15
活動報告 No.3 地域資源を活用したモデル構築のための基礎的研究 —歴史文化遺産としての民俗文化財の発掘—	17
活動報告 No.4 災害伝承を活用した地域防災教育プログラム構築に関する研究	19
活動報告 No.5 「健康意識の高い町・尼崎の土台づくりと食育の定着について」	21
活動報告 No.6 庄下川の河川環境を利用した児童生徒のための親水プログラムの構築実施	23
活動報告 No.7 尼崎市に住む高齢者のための運動交流プロジェクト実践と普及	25
活動報告 No.8 学生を主体とした、地域学校への情報教育応援活動	28
活動報告 No.9 「生活」をテーマに、地域に根差した生涯学習プログラムの開発 生活の知恵再発見（食生活、衣生活編）	30
活動報告 No.10 尼っ子のスポーツ振興プロジェクト	32
平成 29 年度〈まちづくり解剖学尼崎〉	35
学生活動	37
学生地域連携推進委員会	38
2017 年度学生地域連携推進委員会定例会議議事録集成	39
つながり交流祭	45
学生発表	46
フォーラム	51
地域歴史遺産としての「営みの記憶」 —災害復興の現場から—	52
平成 29 年度神戸大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学 3 大学合同報告会プラットフォーム報告	53
『〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム』の成果と課題	54
経験値教育と女性活躍	61
地域志向科目	87
つながりプロジェクト	88
優秀卒業論文 要旨	111
彙報	115
地域連携推進機構 平成 29 年度統括会議（地域連携推進機構運営委員会）記録	116
第一回外部評価委員会	119
第二回外部評価委員会	139
平成 29 年度地域連携推進機構関連事業	149

地域とともに歩む	156

地域研究報告



「まちづくり解剖学」 2017.07.27



地域志向教育研究最終発表会 2018.02.10

専門職教育と経験値教育：人間看護学科

人間健康学部人間看護学科 野呂千鶴子

1 はじめに

—ヒューマンケア実現に向けた人材養成
人間看護学科は、2006年度に開設され、昨年度10周年記念行事を挙行了しました。本学に人間看護学科が開設された目的は、以下のとおり記されています。

少子高齢化の進展、医療技術の進歩、疾病構造の変化等、看護を取り巻く社会状況は大きな転換期を迎え、人びとの価値観やニーズはますます多様化、複雑化し、より充実した生のあり方を模索しています。このような背景のもと、保健・医療・福祉の活動領域では、在宅医療の充実や疾病予防の促進が緊急課題であり、地域社会との共生という視点で、それぞれの分野の専門家と連携し、地域で活躍できる看護専門職が求められています。

そこで私たちのめざす人間看護学科は、このような社会環境の変化と時代のニーズに応えるために、人間の誕生から死に至るまでのライフサイクルにおける人びとの健康と自己実現の支援を使命としています。人の「いのち」、「生活」、「人生」と主体的に向き合い、他の専門家や関係諸機関との連携を図りながら協働・共創し、さまざまな分野で「地域との共生に根ざしたヒューマンケア」を実現できる看護職の育成を目指しています。さらに、看護学の教育・研究・実践を通して、地域・社会との「共生と共創」を目指しながら人びとが安心して健康な生活を送ることができるよう地域ケアのネットワーク構築の発展に寄与することを目的としています。

開設以来本学科では、本学の「捨我精進」の精神に則り、「ヒューマンケアの実現」のため看護師・保健師・助産師の養成に加え養護教諭Ⅰ種養成も行ってきました。卒業生は、2018年3月に卒業した9期生を含み約730人が看護職者として巣立っていきました。彼女たちは、看護師・助産師・保健師そして養護教諭として、本学での学びを基盤に兵庫県内はもとより近畿圏を中心に活躍を続けています。特に初期の卒業生は、中堅期に入り、実習施設では後輩である在校生の実習指導を担当するようになってきました。

さて、2017年4月に迎えた入学生は12期生となり、「SONODAの看護教育」はこれまでの創設10年の歩みを基盤にした次への飛躍の時期を迎えています。本学科では看護師コースに加え、保健師・助産師・養護教諭Ⅰ種の3つの選択コースを特徴あるカリキュラムとして設定しており、平成27年度入学生から3年次の領域実習を終えた3月に、自分の適性や進路を考えたいうえで保健師コース、助産師コースの選考試験が受験できるようになっています。

それでは、ここで資格教育の変遷について、少し振り返りをしておきましょう。

(1) 保健師看護師統合カリキュラム

開設から2012年度入学生までは、保健師看護師統合カリキュラムで教育を展開してきました。このカリキュラムでは、看護師・保健師の国家試験受験資格を全員に付与するとともに、助産師課程を選択制で設置しました。3年次後期に選抜一次試験を行い、4年次前期に選抜二次試験を行い、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の必要単位を満たすべく、授業・演習・実習を展開してきました。これらとともに、養護教諭Ⅰ種免許に関する必要単位を修得した学生には、卒業時にその免許を付与していました。

さらにこのカリキュラムでは、本学科の特徴ある取組みの一つである「まちな保健室実習」を低学年次に設定し、看護の対象をすべての健康段階にある人々とし、ヘルスプロモーションの理念の理解を促し、対象のニーズに応じた健康教育の実施も含めた実習を展開してきました。

(2) 看護師教育をメインに置きながら、保健師・助産師・養護教諭Ⅰ種コースを併設

2013年度からのカリキュラムでは、大学卒業要件を満たす学生全員に看護師国家試験資格を付与しています。あわせて、保健師・助産師の国家試験受験資格を取得するための選択コース、養護教諭Ⅰ種免許を取得するための選択コースの3選択コー

スを設置しています。

選択制の保健師課程では、2 年次後期（2015 年度入学生からは 3 年次後期）に選抜試験を実施し、合格者は、保健師課程に進みます。保健師課程では、保健師国家試験受験資格を得るために保健師助産師看護師学校養成所指定規則に定められた単位を修得するため、授業・演習・実習を履修します。必要な単位を修得した学生に保健師国家試験受験資格を付与しています。また選択制の助産師課程では、従来どおり 3 年次後期に選抜一次試験を実施し、授業・演習を履修したうえでさらに 4 年次前期に選抜二次試験を実施しています。その後助産学実習に臨み、必要な単位を修得した学生に助産師国家試験受験資格を付与しています。

養護教諭 I 種免許取得に関しても選択制とし、必要単位を修得した学生には、卒業時に免許を付与しています。



(公衆衛生看護学・地域看護学演習、助産学演習 風景)

2. 人間看護学科の教育理念

人間看護学科では、以下のとおり「教育目的」を掲げ、それに基づき「教育目標」を設定しています。

(1) 教育目的

豊かな人間性の形成により、生命の尊厳と人権の尊重を基調とした倫理観を培い、

看護専門職として高度な知識と技術を有し、地域や国際社会の人びとの健康と自己実現に向けたヒューマンケアの実現に貢献できる人材の育成をめざします。

(2) 教育目標

- ① 生命の尊厳、人権の尊重を基調とした、人間の総合的理解と社会への洞察力を有し、常に自己の資質向上に努め、社会的使命を遂行することができる豊かな人間性を育みます。
- ② 対象となる人間を「からだ」、「こころ」、「社会」という側面から総合的に理解し、人びとの喜び、苦しみを分かち合い、「ヒューマンケア」の観点から直面する様々な課題や状況に向き合うことのできる人間力を育みます。
- ③ 治療から予防へ、病院から地域・在宅へ、医療技術の高度化、看護ニーズの多様化に対応し、主体的に、柔軟かつ総合的に援助することのできる専門的知識と技術を有した基礎実践力を育みます。
- ④ 看護の実践者・教育者・研究者として将来的に自立し、保健・医療・福祉の総合的な視野から関係分野の職種と協働し、全体をコーディネートできる連携力を育みます。
- ⑤ グローバルな視野に立ち、貧困、災害、感染症など、保健医療の専門家が必要とされる地域援助や保健活動を理解し、国際平和の実現に向けて貢献しようとする姿勢を育みます。

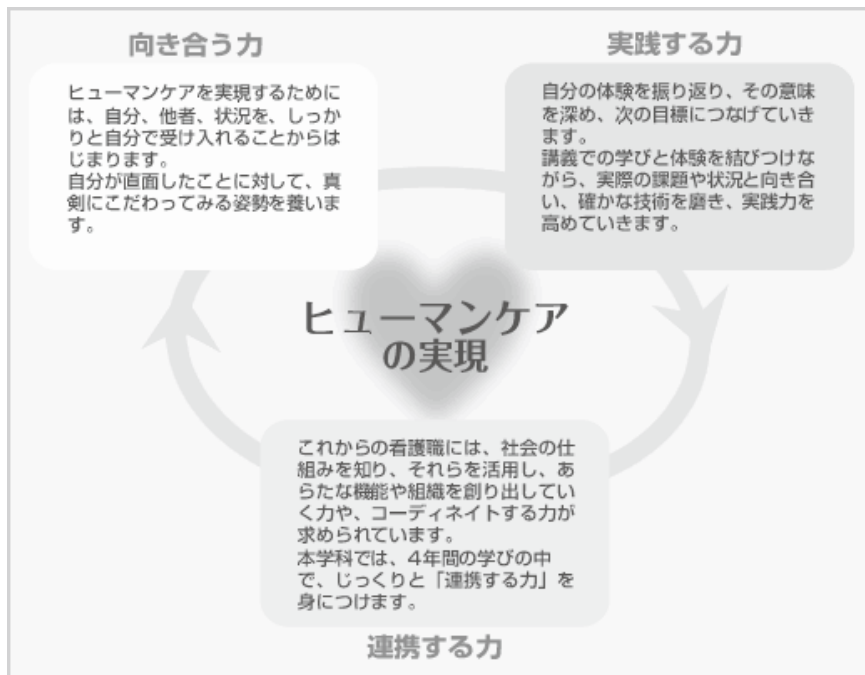
3. 学位授与の方針（ディプロマポリシー）

人間看護学科では、卒業要件を満たし、以下の能力を修得した学生に卒業を認定するとともに学位「学士（看護学）」を授与します。

- (1) 看護の対象となる人々を「からだ」「こころ」「社会」という側面から理解し、直面している様々な課題や状況に真摯に向き合う力
- (2) 生命の尊厳と人権の尊重を基調とした倫理観を身につけ、看護専門職業人として社会的使命を認識したうえで、必要とされる基礎的な知識と技術を修得し実践する力
- (3) 保健・医療・福祉の連携と一体化が

求められていることを実感し、地域社会や国際社会の人々を取り巻く状況を理解したうえで、社会資源の活用および組織や集団の一員として連携す

る力
 (4) 地域社会や国際社会の人々の健康と自己実現に向けたヒューマンケアの実現に向けて自ら行動する力



4. カリキュラムの概要

ディプロマポリシーに従い、保健師助産師看護師学校養成所指定規則に則った看護教育の展開と、「SONODA」の経験値教育の実現をめざして、特徴あるカリキュラムを構成しています。

(1) カリキュラムポリシー

本学科で育成したい看護職像は、「向き合う力」「実践する力」「連携する力」の三つの力を兼ね備え、ヒューマンケアが実現できるという姿です。看護学は、地域社会で暮らす人々の「いのち」「生活」「人生」の質の向上を目指した看護の理論と実践を探究する学問であり、本学科ではこの看護学の基礎を、次の方針に基づいて体系的に教授しています。

- (1) 看護の対象となる人々の「いのち」「生活」「人生」の質の向上をめざしたヒューマンケアを実現するための基盤となる知識・技能を修得するための専門支持科目を展開します。
- (2) 地域社会で暮らす人々および健康を害して医療を受けている人々への看護について、専門支持科目での学びを基盤にした専門科目の知識・技能について授業・演習で深め、それに基づいて実習を行うといった段階的循環的進行により展開します。
- (3) 学修の中で自ら見出した課題について、培った知識・技能に基づく看護実践力を統合し課題解決に向けて努力する力を養うために経験値統合領域の科目を展開します。

(2) カリキュラムの特徴

以下のように、段階的循環的教育を特徴としたカリキュラムを設定しています。

① カリキュラムの段階的な構成

人間看護学科では、ヒューマンケアの実現を目指し、カリキュラムを4つの段

階で構成しています。

第1段階：地域で生活する人と社会に向き合い、自己に向き合います。

大学共通科目及び人間健康学部共通科目から、論理的・倫理的思考、社会の変動に対応できる基礎的能力を養います。また、専門支持科目、専門科目から看護の基本となる生活する人間についての知識と技術を身につけ、地域で生活する人と社会について探求します。さらに、人間的・倫理的にかかわりができる感性を磨くため、自分自身について探求します。

第2段階：看護に向き合い、看護の対象となる人に向き合います。

看護の基盤となる人間・健康・環境・看護実践に関する専門支持科目、専門科目を学び、地域連携のあり方を知り、人と人との関係性をつくる力を身につけ、実践をとおして看護に向き合い、看護の対象となる人について探求します。

第3段階：看護の対象となる人とその家族、状況に向き合います。

看護の基盤となる人間・健康・環境・看護実践に関する専門支持科目、専門科目を学び、地域連携の機能を熟知し、その一部を駆使し、人と人との関係性をつくる力、判断する力、意思決定する力、行為する力を身につけ、看護の対象となる人と家族、その状況に向き合い、さまざまな健康現象に対する看護実践に結びつく方策について探求します。

第4段階：看護の対象となる組織及び集団に向き合い、地域や国際社会の保健・医療・福祉の課題に向き合います。

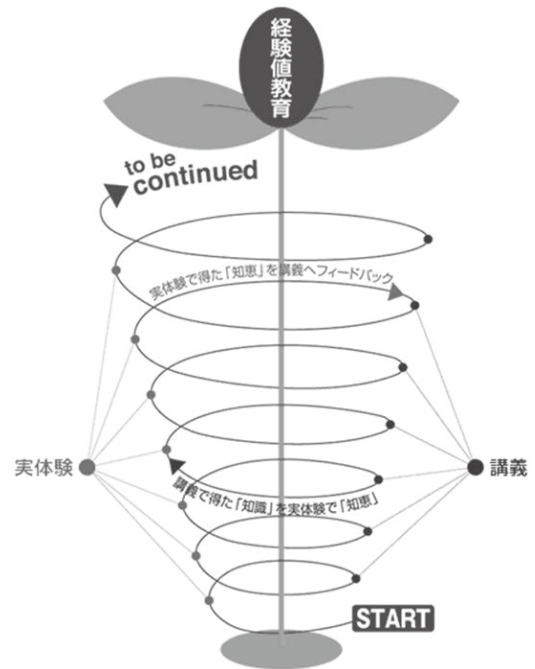
知識・技術・実体験を統合させながら学際的な視点を持ち、実践をとおして看護の対象となる組織及び集団に向き合い、さらに看護専門領域が提供する専門性を発展させる科目や社会のニーズに対応した科目を学び、実践研究に参加し、地域や国際社会の保健・医療・福祉の課題について探求します。

② カリキュラムの循環的な構成

人間看護学科では、専門支持科目から専門分野へ積み上げていく教育システムだけではなく、それぞれの領域で得た知識と技術、そして実体験をリフレクションしながら、各領域を常に関連づけながら進めていきます。

③ 人間看護学科科目の構成

A：専門支持科目



「からだと向き合う領域」「こころと向き合う領域」「社会と向き合う領域」の3つの領域で構成され、看護学を学ぶ上で対象となる人間について探求します。

【からだと向き合う領域】

看護の基礎となる生活を営む人間の「からだ」について探求し、人体の構造、機能、代謝とその異常、また、病気と治療、回復に関する基礎知識を学びます。

【こころと向き合う領域】

看護の基礎となる生活を営む人間の「こころ」について探求し、看護学の基盤でもある人間と人間との関係構築のための基礎能力を深めていきます。

【社会と向き合う領域】

看護の基礎となる生活する人間を取り巻く「社会」について探求し、保健医療福祉制度や諸統計についての知識を学びます。



(感染演習 (山本恭子先生担当) 風景)



(講義受講風景)

B：専門分野Ⅰ・専門分野Ⅱ・統合分野・保健師課程・助産師課程

「看護基礎学領域」、「看護実践学領域」、「統合領域」、「助産学領域（助産師課程）」、「地域連携支援看護学領域（看護師課程および保健師課程）」、「養護領域（養護教諭）」で構成し、学びの段階が進むにしたがって、看護学の統合を図り、専門性を発展できるように構成しています。

【専門分野Ⅰ：看護基礎学領域】

看護学の基礎となる理論・看護の歴史、及び他の専門職との協働の中での看護の自立・自律のあり方、これからの社会を見据えた看護の役割とその提供システムについて学びます。さらに、1年次より地域を志向し、そこで生活する人びととその社会の健康について探求します。

【専門分野Ⅱ：看護実践学領域】

生涯にわたる人間の成長・発達を基盤とし、個人や家族を対象として、その人の「いのち」、「生活」、「人生」の質の向上を図るための知識と技術を習得します。この領域は、「育成看護学」、「成熟看護学」、「精神看護学」、「老熟看護学」で構成しています。

【統合分野：統合領域】

看護を必要とする場にスムーズに適応できるように、これまでに学習した内容の知識と技術を全て統合します。そして、チーム医療における多職種間の協働のあり方を探求し、在宅看護、看護マネジメント、医療安全や危機管理、災害看護等について学び、看護の専門性を追求します。また、国際的な視野での考え方や研究的態度と姿勢を身につけていきます。

【助産学領域】

助産師課程の科目で構成されています。周産期における妊婦・産婦・褥婦および新生児とその家族を対象とし、助産学特有の診断のプロセスを学び、助産ケアおよび援助技術を習得します。さらに、個別のケア・診断技術・分娩介助技術を実践します。また、助産に関連した地域における保健・医療・福祉の連携について学びます。

【地域連携支援看護学領域】

看護師課程および保健師課程の科目で構成されています。地域で生活する人びととその人が属するコミュニティを対象とし、看護を取り巻く関係機関とその機関への働きかけや連携のあり方、地域で生活する人びとおよび組織の行動特性、生涯にわたる健康支援のあり方を予防の視点を持って探求し、その中でヘルスプロモーションについても深めていきます。保健施策の立案・実践・評価といったPDCAサイクルについて学び、保健師に求められるコンピテンシーについても理解を深めます。

【養護領域（教職課程）】

教職課程の科目（人間健康学部共通科目、養護に関する科目および教職に関する科目）で構成されています。学校教育および児童生徒の心身の健康問題や健康保持に関わる養護教諭の役割について学びます。



(グループ演習・技術演習 風景)

5. 実習について

(1) 実習のねらい

一人ひとりの実経験と知識の統合を図りながら習熟のプロセスが歩めるよう、1段階から4段階で構成し、下記に示す看護実践能力について、順序性を持って確実に身につけることを目指していきます。

- ①自己、人、家族、組織・集団に向き合う力
- ②ウェルネス社会の現状を把握する力
- ③地域で生活する人びとの健康状態や生活状況を把握する力
- ④看護の対象となる人がもつセルフケア能力を判断する力
- ⑤看護を展開させ、創造する力
- ⑥地域と連携し、協働する力
- ⑦倫理的実践を遂行する力
- ⑧経験値を高め、看護を発展させていく力

(2) 実習の段階的な構成

健康レベルの高い、身近な人びとの生活から、徐々に健康レベルの低い人びとの生活へと認識の幅を広げていけるよう

(3) 実習科目の構成

実習の段階	実習科目
第1段階 【社会・健康生活と向き合う】	まちの保健室実習
第2段階 【クライアント・看護と向き合う】	ファースト基礎実習 ステップアップ実習
第3段階 【クライアントと家族・その状況に向き合う】	育成看護学実習（母性） 育成看護学実習（小児） 成熟看護学実習 精神看護学実習 老熟看護学実習
第4段階 【組織・集団と向き合う】	育成連携支援実習 地域看護学実習 在宅看護学実習 経験値統合実習
選択科目	助産学実習 公衆衛生看護学実習 養護実習

にしています。

第1段階では、地域で生活する人びとと社会に向き合い、人びとの生活や健康意識、ウェルネス社会の実際を知り、広い視野から各自の健康観や生活観を深めます。

第2段階では、病を体験している人に向き合い、病む人とその人の生活の場である療養環境に向き合い、基本的な看護援助を通して看護についての理解を深めます。

第3段階では、さまざまな発達段階と健康レベルにある人びととその状況に向き合い、一人ひとりにあった具体的な看護援助を実践できる基礎的な能力の習得を目指します。

第4段階では、地域における看護の実際を体験し、新たな地域連携の創生について考察します。さらに、特定領域における研究的実践活動を通して看護実践の向上を目指します。



(臨地実習 風景)

(4) 実習展開図

	第1学期									2学期					
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
2年次	まちの保健室実習									まちの保健室実習					
	ファースト基礎実習						ステップアップ実習								
3年次										【領域別実習】 育成看護学実習(母性), 育成看護学実習(小児), 成熟看護学実習, 精神看護学実習, 老熟看護学実習					
										【領域別実習】 育成連携支援実習, 地域看護学実習, 在宅看護学実習					
4年次										経験値統合実習					
	公衆衛生看護学実習(選択)														
							助産学実習(選択)								
	養護実習(選択)														
	:第1段階			:第2段階			:第3段階			:第4段階			:選択科目		

6. 人間看護学科における特徴ある教育展開

(1) まちの保健室実習

本学キャンパスで実施している「まちの保健室」は、兵庫県看護協会の取り組みであり、本学科教員と県看護協会の看護師がスタッフとして協働し運営しているものです。「まちの保健室」は、毎週水曜日午後（まちの保健室実習のない時期は、不定休あり）に身体計測、血圧測定、健康相談を実施し、希望者には骨密度測定、動脈硬化度測定、兵庫県健康増進プログラムによる体力測定を実施しています。また、教員が交替で「健康ミニ講話」をしています。近隣の住民の方やシルバー講座受講者を中心に、毎回20人程度の来室者があります。

この「まちの保健室」の場を実習施設として2年次に実施している実習が「まちの保健室実習」です。この実習は、実習の第1段階に位置づけられ、【社会・健康と向き合う】ことを実習の到達目標にしています。

① 実習目的

まちの保健室に来室する人々ー地域で暮らす比較的健康的レベルが高い人々の健康観や生活習慣を理解し、健康の保持・増進のために活動する看護職の役割を理解します。

また、職能団体が主催・運営する健康相談事業である「まちの保健室」の機能を知り、地域の健康づくりを推進するヘルスプロモーションの中での「まちの保健室」の役割・意義について理解します。

② 実習目標

- ◇ 「まちの保健室」に来室する人々と関わり、生活実態を把握しながら、対象者の健康観や生活習慣に見られる健康課題を理解します。
- ◇ 「まちの保健室」に来室する人々の健康状態を観察し、健康課題への対処方法を理解します。
- ◇ 「まちの保健室」に来室する人々のセルフケア能力向上に向けた健康教育について理解します。
- ◇ 「まちの保健室」の運営に関わる資源を把握し、効果的な運営のための連携および協働について理解します。
- ◇ 地域で暮らす人々の健康課題に応じた「まちの保健室」の機能について理解し、ヘルスプロモーションにおける「まちの保健室」の役割・意義について理解します。

③ 実習形態

7人程度でグループを作り、「まちの保健室」開催日を実習日として7週にわたり実

習を行っています。

- ✧ オリエンテーション
- ✧ 学習課題の明確化と実習計画立案、尼崎市の地域特性の理解
- ✧ 臨地1日目:対象者の生活実態、健康観、生活習慣について把握し、対象者を理解
- ✧ リフレクションをし、身体測定・血圧測定の演習を実施
- ✧ 臨地2日目:「まちの保健室」スタッフとして、身体測定・血圧測定を責任を持って行い、ボランティア看護師と協働して運営
- ✧ 臨地3日目:臨地1日目、2日目で得た来室者の健康観や生活習慣に関する情報を踏まえた上で、意図的コミュニケーションを用い、さらに対象者を理解。次のグループに来室者の状況や学生としての関わりについて引継ぐ

④ 実習成果

提出物(実習計画書、実習記録、カンファレンス記録、自己評価表、実習レポート)と、実習終了時面談等により総合的にルーブリック評価を取り入れて行っています。

この実習は、対象である住民とじっくり話し合い、日々の生活の様子や保健行動の実態について把握していく中で、学生はコミュニケーション能力を高めていっています。また、身体計測や血圧測定などの看護の具体的な援助技術を習得する場にもなっています。

これらに加えて、2年次という看護教育の初期段階において、対象者を生活者の視点で捉えることや住民それぞれが持つ健康観について具体的に理解しながら、自分の健康観を培う実習になっています。また、看護協会という職能団体との協働についても学び、予防の視点を持って、地域の様々な社会資源と協働・連携しながら看護職者として人々の生活を支援することについて考える機会になっていると考えています。この経験は、その後の講義や演習、さらには第2～第4段階のクライアント・家族、集団や組織と向き合う実習へとステップアップする基盤となっています。



(まちの保健室 開室風景)

(2) クローズアップナーシング

クローズアップナーシングは、4年次前期開講の選択科目です。同時期に、保健師課程、助産師課程、養護教諭1種課程の学生は、講義・演習・実習があるため、この科目の履修者は看護師課程の学生になります。看護の専門性を深めることをテーマし、授業も到達目標を下記のように設定しています。

① クローズアップナーシングⅠ

看護実践の質を向上させるために、向き合う力、実践する力、連携する力を活用して考えることができる。ヒューマンケアの実現に貢献し、看護サービスの質の向上への自覚を持ち努めることができる。看護の基礎となる領域について、さらに深め、実践に繋げることを目標とする。

② クローズアップナーシングⅡ

- ✧ 看護実践の質を向上させる方法について、向き合う力、実践する力、連携する力を活用して考えることができる。
- ✧ ヒューマンケアの実現に貢献し、看護サービスの質の向上への自覚を持ち続けることができる。
- ✧ 高度化、複雑化する医療の場における今日的な課題について説明ができる。

上記に示したように、「クローズアップナーシングⅠ」と「クローズアップナーシングⅡ」に分け、Ⅰを4コース、Ⅱを4コース準備し、履修希望学生がコース選択し、学生配置をおこなっています。

【クローズアップナーシングⅠ 4コース】

- ✧ 生活習慣病看護学コース
- ✧ 感染制御看護学コース
- ✧ 生活援助看護学コース
- ✧ 治療援助看護学コース

【クローズアップナーシングⅡ 6コース】

- ◇ 育成（小児）看護学コース
- ◇ 成熟看護学コース
- ◇ 老熟看護学コース
- ◇ 在宅看護学コース

(3) 経験値統合実習・研究

経験値統合実習・研究は、すべての専門看護学分野の領域実習を終えた後に、4年次に履修する統合科目です。本学科において学び積み上げてきた看護基礎教育の集大成となる科目で、まさに4年間の「経験値教育」の成果が表れる科目です。

学生は、実習における看護実践経験から芽生えた研究疑問（リサーチクエスション）から「看護研究」で学んだ研究プロセスを積みながら研究計画書を作成します。それに基づき、「経験値統合実習」を実施します。実習前の調整では、教員とともに実習施設に自らの研究計画を説明し、理解を得たうえで実習を行うという経験も積みます。

その後、実習で得たことを研究データとして、分析を行い、研究論文として完成させ、経験値統合研究発表会において、学会における口頭発表にスタイルで成果報告を経験します。

以下に4年次の一年間を通じて行うこの科目の詳細を述べます。

A 経験値統合実習

- ① 目的：これまでの看護実践経験から芽生えた問題意識を研究的な過程に乗せて、自らの課題を追究し、深めることを目的とする。
- ② 概要：
学生は自分の関心のある領域を、専門支持科目（感染）、看護基礎学（基礎）、成熟看護学（成人）、精神看護学、育成看護学（小児）、育成看護学（母性）、育成看護学（助産）、老熟看護学（老年）、在宅看護学、地域看護学から選択する。
それぞれの領域において、これまでに学んだ知識、技術、態度を統合しながら対象となる協力者に対して看護実践を展開する。
- ③ 単位：2単位
- ④ 実習方法
◇ 各領域において、指導教員の助言を受けながら、臨地の指導者と実習日

程や内容などの調整を行う。

- ◇ 実習開始時には、経験値統合実習計画書（様式1）を用いて臨地の指導者と調整を行う。実習後は実習内容を経験値統合実習記録（様式2）にまとめて、翌朝、担当教員に提出する。（ただし、実習記録用紙は各領域の特殊性に応じたものを使用することもある。）
- ◇ 経験値統合実習の看護実践を行うに際しては、施設や対象となる協力者に実習の概要説明と協力依頼の文書をもとに、十分な説明を行い、承諾が得られた場合には同意書にサインをもらう。必要に応じて、家族の承諾も得て、同様にサインをもらう。適宜、教員および臨地の指導者の助言・指導を受けながら実践する。
- ◇ 実習終了後は、経験値統合研究において、実習内容を研究的視点よりまとめて発表する。

⑤ 評価

以下の視点で評価する。

- ◇ 対象理解及び自己理解が十分にできているか
- ◇ 看護計画が適切に立案でき、実施、評価ができたか
- ◇ 事前学習がしっかり行えており、実習態度がよいか

B 経験値統合研究

- ① 目的
「看護研究」での学びをもとに、これまでに習得した知識を活用し、経験値統合実習での実践を研究プロセスに沿って分析し、論文（事例研究・事例検討を含む）を作成する。そのなかで、将来にわたって看護研究に関心を深めることができるように研究的態度と姿勢を習得する。
- ② 概要
経験値統合実習での実践を、主体的に問題意識をもちながら追究する。研究への取り組み、研究計画書の作成、論文（報告書）作成までのプロセスを体得する。この体験を通して研究的視点の必要性や達成感を経験するとともに、他者との討論を通して看護に対する視野を広げること、自分の看護観を明らかにしていく。

③ 指導場所

実習計画や研究計画、および資料整理のための指導は、原則として各教員の研究室で行う。

④ 評価

経験値統合研究ルーブリックに基づいて評価する。

⑤ 論文（報告書）の発表・投稿

記録物の提出及び評価が終了後、自己の論文（報告書）を発表・投稿する意思がある場合は、本学の生命倫理委員会の審査を受けることができる。その場合は、担当教員と相談して決定する。



(経験値統合研究発表会 風景)

7. おわりに

本学科の看護基礎教育について、述べてきました。本学科が開設された平成18年当時に比べると、我が国の少子高齢化は急速に進展してきています。高齢化率は、27%を超え4人に1人以上が高齢者という時代に突入し、高齢化率30%も目前と言われています。中でも75歳以上の後期高齢者が増加し、100歳超えの高齢者も以前に比べると多くなってきました。このような状況下において、介護保険法が改正され、地域包括ケアシステムの充実、認知症対策の必要性が重要視されているところです。

また、ワークライフバランスが重視される

中、晩婚化晩産化が進み、少子化がますます進展しています。こうした中で、育児不安を持つ母親や虐待事例の報告も増加し続けています。

これらの背景には、健康格差や経済格差といった現代が格差社会と言われる所以の課題が潜んでおり、看護職者の行う活動においても、これらをしっかり意識し実践していくことが求められています。

本学科の行う看護基礎教育においては、本稿で述べてきた教育理念・方針に基づき、ルーブリック評価を取り入れる等、成果検証に基づく教育のあり方を模索し続けているところです。2017年に出された「看護教育モデルコア・カリキュラム」に基づくカリキュラムの見直しにも取り組んでいます。常に時代のニーズを捉え、さらには将来予測も踏まえたうえで、戦略的に自らの専門実践能力が発揮できる看護師・保健師・助産師養成を今後も行っていきたいと考えています。



(けやきアベニュー)



2020 年度に向けた 1 人一台のタブレット端末導入の尼崎市モデル高校版の作成

研究代表：堀田博史

研究協力者：小田桐良一，尼崎市立教育総合センター・民谷洋二，東江 潤
尼崎市立尼崎双星高等学校・猪飼涼介，関西学院大学・時任隼平，京都外国語大学・野口 聡

1. はじめに

現在，文部科学省や総務省は，平成 32 年までの一人一台のタブレット端末の ICT 環境整備に向けた様々な事業を進めています。尼崎市の各小学校には，平成 27 年度にコンピュータ室にタブレット端末 40 台を導入されていますが，尼崎市内の 2 校の高等学校中学校では，タブレット端末はもとより，ICT 環境の整備が未着手となっています。

本研究では，尼崎市立教育総合センター等と協働して，市内の高等学校 1 校をモデル校に設定，タブレット端末等の機器類のほかに大型モニタを導入して，2020 年度の 1 人一台のタブレット端末導入に向けた足がかりとなるように実践を行い，普及を目指したリーフレットの作成を目標としました。

2. タブレット端末活用実践

作成したリーフレット（図 1）には，授業と部活動での以下の 7 つの実践を掲載しました。

総合的な学習の時間 - 1 年生

各ゼミの研究テーマ（文学・科学・社会・など）に基づき，図書室の書籍と画像や最新のデータなどはタブレット端末で調べたインターネットからの情報とを整理し組み合わせ，ポスターセッション形式の発表資料を作る。

家庭基礎 - 2 年生

プリント学習での「コンビニで昼食を買う際に，必要な栄養素を栄養バランスの良い献立を考える」結果をタブレット端末で撮影した後，プロジェクターに投影し発表を行う。

体育（柔道） - 2 年生

柔道の前回り受け身ができるようになるために，タブレット端末で動画撮影を行い，グループで集まって閲覧を繰り返しことで自分達の動きを客観的に観察し，相違点の修正を行う。

国語表現 - 3 年生

「1泊2日のお勧めの旅行プラン」を伝える活動を通して，図書館の書籍とタブレット端末とを同時に用いて調べ学習をし，作成したフリップを用いて効果的なプレゼンテーションを行う。

社会と情報 - 3 年生

グループで情報社会の「光」か「影」に関するCM制作をする際，タブレット端末 1 台で写真や動画の撮影と動画編集を行う。

昨年度はデジタルカメラとパソコンを活用して制作を行ったが，タブレット端末を活用することでデータの移動等の作業時間を短縮することができた。

日本史 B - 3 年生

日本史の試験範囲の内容についてまとめる際に，タブレット端末を情報収集のツールとして使用するだけでなく，発表資料の作成にも活用し，大型ディスプレイに映し発表も行う。

硬式野球部 - 1・2 年生

タブレット端末でスイングのフォームを動画撮影し，スロー再生やコマ送りでイメージ通りのフォームになっているかの確認・修正することを行った。



図 1 作成したリーフレット（表紙）

地域に向けた手洗い指導の拠点の構築 継続した取り組み

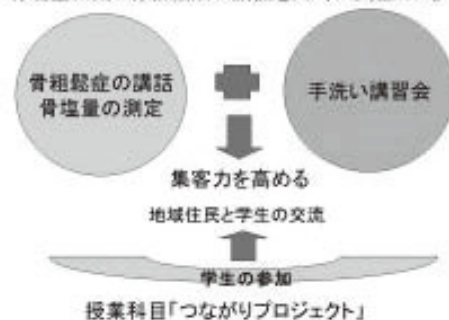
研究代表：山本恭子

共同研究員：田淵正樹、高橋順美

【はじめに】インフルエンザやノロウイルス感染症は毎年流行し、人々の生活に大きな影響を与えている。これらの感染症では、ほとんどの患者が家庭で療養することから、大流行を防ぐためには地域における感染対策が必要である。そこで、本研究では3年前より公民館において手洗い講習会を開催し、有効な講習会のあり方について検討している。

【方法】尼崎市内の全公民館（6 公民館）に感染予防のための手洗い講習会の開催を依頼した。より多くの参加を促すために、骨塩量の測定と骨粗鬆症の講話を同時に開催した。また、「つながりプロジェクト」の一環として行い、手洗い講習は、講義を通して手洗いの除菌効果や方法、および指導方法について理解を深め、事前に模擬講習会を行い準備を整えた学生により施行した。

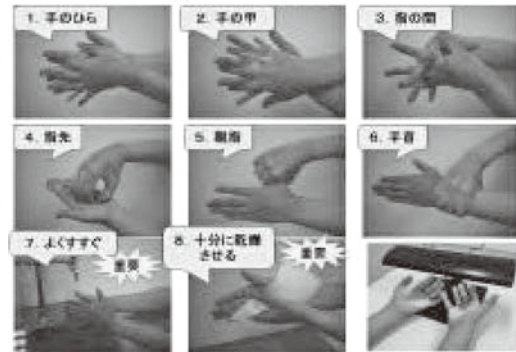
より多くの参加を促すために、
骨塩量測定と骨粗鬆症の講話を同時に開催した。



手洗い講習会：インフルエンザ、ノロウイルス感染症の概要と対策について説明し、感染対策に向けての手洗いの重要性を理解した上で、蛍光ローションを使用した手洗い効果の検証実験を行い、ポスターを使用して有効な手洗い方法

を説明した。

効果的な手洗い方法



手洗いに関する意識調査：講習会終了後、アンケートにより行った。

また、今年度は、一部の公民館と大学の学園祭においてブース形式で手洗い講習を行った。

【結果】参加状況：尼崎市の6つの公民館全ての公民館に協力いただき、中央公民館 17 名、立花公民館 20 名、武庫公民館 19 名、大庄公民館 12 名、園田公民館 26 名、小田公民館 18 名、けやき祭（大学）27 名、合計 139 名の参加であり、昨年の 97 名を超えた。年齢は 60 才代から 80 才代が多く、70 才代が半数であった。

手洗い講習会の効果：手洗い講習会前、感染症を防ぐために手洗いが重要だと思っていたか、の問いに対して思っていたが 72.6%、なんとなく思っていたが 21.18%であったが、講習会受講後は思うが 95.8%となり、ほとんどの人が確実に認識するようになった。以前に感染予防のための手洗い方法を習ったことがない人が約 7 割、今回のような手洗い方法をあまり知らなかった人、知らなかった人を合わせると約 3 割であり、昨年とほぼ同じであった。

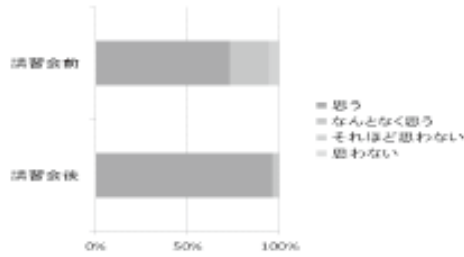


図1. 「インフルエンザなどの感染症を防ぐために手洗いが重要だと思うか？」

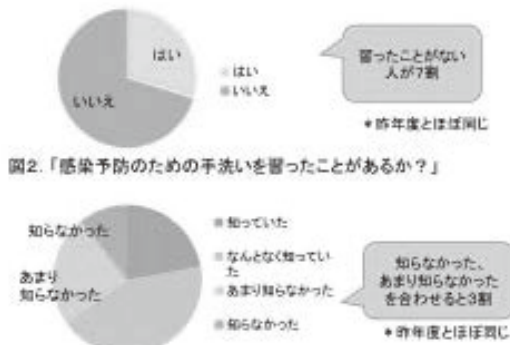


図2. 「感染予防のための手洗いを習ったことがあるか？」

図3. 「今回のような手洗い方法を知っていたか？」

ポスターを使用した説明はほとんどの人がよく分かったと答えた。蛍光ローションを用いた手洗いの検証実験の感想では、「しっかり洗ったつもりだったのに」、「驚いた、ショック」という記載が多くみられ、「手洗いの不十分さが分かった」「反省した」「改善したい」という記載が多くみられ、「視覚」と「感情」にアプローチすることにより「意識の変化」に繋がった。

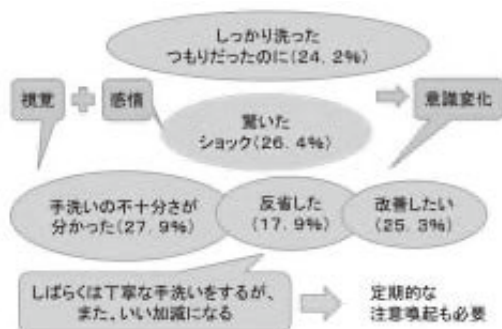


図4. 蛍光ローションを用いた手洗い実験の感想

さらに、84.2%の人が講習で得られた知識を家族等、誰かに伝えたいと思っていると答えた。また、講習会への参加のきっかけとしては「手洗いに興味があった」が45.3%であったのに対

して、「骨粗鬆症の講話があるから」が55.8%、「骨密度測定ができるから」が65.3%であった。学生が参加したことについては81.1%が良かったと答えた。その理由としては、「若さがもらえる」、また、学生が「親切」、「丁寧」であることから「和む」「楽しい」「一生懸命が伝わる」などが挙げられた。さらに、「学生と一緒に学習できた」「学生の為になる」などの相互交流を示唆する意見もみられた。

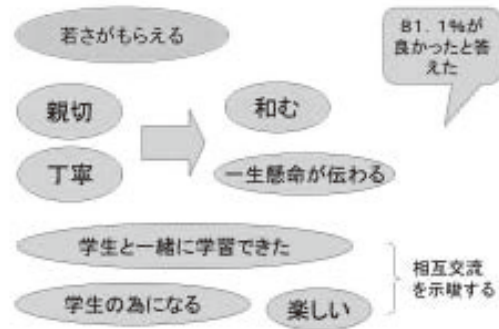


図5. 学生が参加したことについて

【考察】今年度も昨年度に引き続き尼崎市の全ての公民館に協力していただくことができ感謝している。手洗いは日常的に習慣化している行為であるが故に、「手洗い講習会」というだけでは人が集まりにくい。そこで昨年からは人を呼び込むために骨塩量測定と骨粗鬆症の講座を同時開催しており、これらが人を呼び込むことに有効であったことが示唆された。講習会前はそれほど関心を持っていなくても、講習を受けることで手洗いの重要性を認識することができ、手洗い技術も伝えることができた。また、学生が参加することにより、世代間の交流を図ることができ、参加者の評価も良く、学生にとっても大きな学びの場となった。今年度は、イベントにおけるブース形式における講習も行ったが、多くの参加者を得ることができたため、公民館との連携を続けていく為には、ブース形式による講習も有効であると考えられる。

地域資源を活用したモデル構築のための基礎的研究
—歴史文化遺産としての民俗文化財の発掘—

研究代表：大江篤

共同研究者：垣東弘一、久留島元、上相英之、岡本真生、柏原康人、久禮且雄

研究目的

尼崎市のシティプロモーション指針に、尼崎市は「①実態と違うイメージを持たれている。②まちの魅力が十分に伝わっていない。③地域の個性（エリアごとの特徴）が魅力に結びついていない。④子育てファミリー世帯の転出超過の原因と考えられる治安や教育の問題」の4つの課題があげられている。

この課題を解決し、魅力あるまちづくりを推進していくために、地域の資源としての歴史文化遺産を発掘し、地域住民の手で活用できるようなデータベースを作成するとともに、まち歩きやボランティアの人材育成等の企画を行うことを目的とする。

研究計画

5年目、COC事業のとなる平成29年度は、これまでの研究成果をまとめ、今後につながるデータベースの公開を目指した。平成28年度にはデータベースより百話を紹介した『尼崎百物語』（神戸新聞総合出版センター）を刊行した。今年度はデータベースのデザインを完成させ、試験公開するとともに、活用についての研究をすすめた。

研究成果

①データベース試験公開

<http://kwaii.sonoda-u.ac.jp/wp/>

(図1)

②刊行物

神戸大学 COC+事業成果報告 シリーズ「地域づくりの基礎知識」『地域歴史遺産と現代社会』（奥村弘・村井良介・木村修二編、神戸大



(図1) 百物語データベース (仮)

学出版会、2018年1月)、大江執筆「民俗文化と地域—但馬地域の事例を中心に—」

③調査活動

・小代地域聞き取り調査 2017年8月26日 (上相、久留島、大江)

・新三和商店街、天龍神社。2017年9月15日 (久留島)

④講演会、研究報告など

・大学 COC+「歴史と文化」領域 シンポジウム地域歴史遺産としての「営みの記憶」—災害復興の現場から—、2017・7・22、本学 俵木悟 (成城大学)、松下正和 (神戸大学)、上相英之、大江篤

・みんなのサマーセミナー尼崎、2017年8月5日 (土)、於：尼崎市立双星高校。大江篤、久留島元、妹尾恵里、柏原康人

・浦江塾 第69回、2017・4・1、於：妙壽寺。岡本真生「残念さん—幕末に発生した流行神をめぐって」

・日本科学史学会 生物学史分科会 夏の学校

2017、2017・9・24、於：京都大学人文科学研究所、岡本真生「オープンアクセスによる民俗知識の再文脈化」

・園田学園女子大学総合生涯学習センター公開講座歴史セミナー18回(尼崎市立地域研究史料館との共催) 大江篤、久留島元、岡本真生

・園田学園女子大学怪異学セミナー13回
大江篤、久留島元、久禮旦雄

・尼崎市立地域研究史料館『尼崎市史』を読む会特別企画『たどる調べる尼崎の歴史』入門講座(園田学園女子大学)3回、大江篤

・大庄市民大学教養講座(尼崎市立大庄公民館)2017・08・03、大江篤「崇徳天皇と尼崎～土地の記憶を伝承すること～」

・NPO 法人やんちゃんこ 尼崎をもっと知ろう“昔へタイムスリップ”(兵庫県シニア世代から子育て世帯へのふるさと伝承事業「塚口城の謎を知る」2017・11・12、大江篤

今後の課題

①データベースの完成

『尼崎百物語』刊行時に作成したデータを基礎に構築したデータベースに移行する作業を行った。その際、伝承地については地図で位置を示すことが可能なものについてはリンクをはり、文献については国会図書館・尼崎市立地域研究史料館のOPACにリンクをはる。その際、書誌情報だけではなく、史料による内容の際についても厳密に記載するようこころがける。

②データベースの活用に向けて

2014(平成26)年2月に兵庫県文化財保護審議会は、兵庫県文化財保護条例制定50周年を迎えて、「地域の文化を発展的に受け継ぐために-地域の持続可能性に文化が果たす役割-」という提言を行った(兵庫県文化財保護審議会 2015)。

この提言のなかで(4)「営みの記憶」を

残す-歴史文化遺産が直面する脅威-」に注目したい。地域の歴史文化遺産は、「地域の暮らしを積み重ねた結晶であり、社会を結ぶ膠着材」であり、それが消滅することにより、「人の暮らし」「社会の履歴」が消滅することになる。

尼崎市は大都市圏とはいえ、流出人口も多く、町の消滅が現実化する日が迫っている。つまり、「町じまい」が目前に迫り、地域社会で維持されてきた歴史文化遺産をどのように保存すべきかを考えなければならない。地域の消滅とともに「社会の履歴」が消えてしまうことがないように「営みの記憶」を記録に残し、伝えていくことが急務である。

そのためにも、指定文化財だけではなく、文化財未満の歴史文化遺産を地域とともにつくるデータベースの重要性は高まるものと考ええる。

一方、歴史文化遺産をデータベースの中にとどめず、地域で活用するためには「地域の文化を受け継ぐ」ための取り組みが大切である。そのためには、「地域を愛する人づくり」と「魅力あふれる地域づくり」が必要となる。なかでも小学校教育における郷土学習の重要性が増すと考える(大江篤「小学校社会科と民俗学-兵庫県の民俗文化財を中心に-」『地域連携推進機構年報』第4号、2017・3)。

歴史的な記録に書き残されることのない日々の平凡な出来事の積み重ねのなかで、幸せな生活を送れることこそが持続可能な社会に必要である。民俗文化はそのような日常的な「あたりまえの暮らし」であることから、人々が歴史文化遺産であると認識することができない。だからこそ、「幸せ」な暮らしの記憶を記録化し、データベース化することから、民俗文化の重要性を再認識しなければならない。

災害伝承を活用した地域防災教育プログラム構築に関する研究

研究代表：野呂千鶴子

共同研究者：大江篤、石原凌河、上相英之

研究目的

東日本大震災以降、頻発する地震から、南海トラフ大地震の懸念に発展し、防災システムの構築は必須であるといえる。防災システムの構築にあたり、東日本大震災から得た教訓のひとつは、防波堤など人間の作るものには限界があり、瞬時の人の判断や避難行動が大切であるということである。片田(2011)は、行政による防災対策などが充実すると人々の災害に対する意識が減退することを指摘し、防災教育による社会対応力の強化が必要であると述べている。

尼崎市は人口約 45 万人の中核都市の指定を受けた都市であり、平成 24 年の高齢化率は 23.4%とほぼ全国平均と同様であり高齢化が進展している。1995 年の阪神淡路大震災時の被害は、死者 50 名弱、負傷者約 1000 名、家屋の損壊は全壊 11000 戸、半壊約 5 万戸であった。近い将来の発生が予測される南海トラフ地震時には、尼崎市の津波予想は 3.8m であり、津波よりも家屋倒壊による被害のほうが大きいことが推測される。

今後起こり得る巨大地震等への備えとして、個人、地域の防災力を強化することは必須である。超高齢社会の現代において、大学生は災害時避難誘導等活動できる資源である。矢守ら(2007)は、防災力を高めるには「人間力」「生活力」「市民力」の 3 つの力の養成が必要であると述べており、大学における防災教育はこれら 3 つの力を高めることを目的とし、学生を含めた地域の防災力を高めてい

く必要がある。

これを実現する為に、地域課題の抽出のための高齢者への聞き取り調査や地域とのワークショップを通してデータを収集整理する。その上で、各地域の伝承を活用したクロスロードや防災マップの製作など、地域における防災活動の実際と課題および本学学生の防災意識の実態を把握し、地域と大学が連携した防災活動の試みを通じて、地域防災力を高めていくことを目的とする。さらに大学と地域が連携し地域防災力を高めるための教育プログラム・体制づくりを行う。

成果

① 高齢者聞き取り調査・フィールドワーク

日時:2017年8月26日-27日

場所:香美町小代地区

参加人数:地域住民9名

地域完結型高齢者の自立生活機能支援システムの策定を目指し、香美町小代区の高齢者からの聞き取り調査を行った(図1)。



図1 香美町小代地区聞き取り調査

② 園田東避難訓練

日時:2017年11月19日(日)

場所:園田東小学校

参加人数:園田東自治会住民約300名とボランティア(本学や他学の学生、防災ボランティア等)



図2 園田東小学校 避難訓練

③ 防災ゲームWS

日時:2018年2月22日

場所:豊岡市立清滝小学校 参加人数:小学生14名
紙芝居と防災ゲーム「なまずの学校」を使用して、災害時の対応について学ぶプログラムの事象実験を行った。

④ 刊行物

神戸大学 COC+事業成果報告 シリーズ
「地域づくりの基礎知識」『地域歴史遺産と現代社会』(奥村弘・村井良介・木村修二編、神戸大学出版会、2018年1月)、大江執筆「民俗文化と地域—但馬地域の事例を中心に—」

⑤ 講演会、研究報告など

・大学 COC+「歴史と文化」領域 シンポジウム地域歴史遺産としての「営みの記憶」—災害復興の現場から—、2017年7月22日、本学
俵木悟(成城大学)「失ったものからの発見と創造:災害復興に民俗調査を通して携わった経験から」、松下正和(神戸大学)「大規模自

然災害時における被災歴史資料保全活動の現状と課題」、上相英之「野に刻まれた災害の記憶:石造遺物の果たす役割について」、大江篤(本学、シンポジウム司会)

・NPO 法人やんちゃんこ 尼崎をもっと知ろう“昔へタイムスリップ”(兵庫県シニア世代から子育て世帯へのふるさと伝承事業「塚口城の謎を知る」(2017・11・12)

今後の課題

オリジナル防災教育プログラムの作成

平成23・24年度の兵庫県社会教育委員会の提言に、

地域社会における人々の生活を豊かにする資本として、…地域社会における人と人との関わりの豊かさが、こどもの教育成果の向上…につながるなどの多くの役割を果たす

と、ソーシャルキャピタルの機能を重視している。そして、幼児期「地域に触れる」小学生「地域を知る」中学生「地域との関わりに気づく」高校生「地域に参画する」大学生「専門分野や学びを活かす」成人「地域の核となる・専門分野や学びを活かす」と年齢に応じた地域とのかかわりを指摘し、社会教育と学校教育が連携し、生涯を通じて地域とのかかわりを持ち続ける重要性が述べられている。

この提言を踏まえて、これまでに、紙芝居とカードゲームを合わせた防災カードゲーム「なまずの学校」や、防災すごろくゲーム「GURAGURA TOWN」、ロールプレイなど高度な役が求められる防災教育教材「避難行動訓練 EVAG(豪雨災害編)」などを購入、検証してきた。

このデータを基に、今後は尼崎の地域特性や対象年齢、規模など地域の実情に合わせた、オリジナルの防災教育プログラムの作成と実証を目指す。

「健康意識の高い町・尼崎の土台づくりと食育の定着について」

研究代表：餅 美知子

研究協力者：松葉 真、木下 康子

【はじめに】

「健康意識の高い町・尼崎の土台づくりと食育の定着」の取り組みを開始して、5年目を迎え、尼崎市内にある“食の健康協力店”に対する取り組みも地区ごとに基幹店を選定し学生と店舗との関わりを密にしていくことを念頭においたことで、「質の高く」「食物栄養学科の目線にたてた」活動ができてきた。

【既存店への対応と実践活動の紹介】

昨年度は、社会的にインパクトの高い店舗に対して、献立の栄養価計算やポスターの掲示を行ってきた。

今年度は、男性の喫食者が多いこの店舗から、若い女性の集客率を高めるために女子大生目線にたってオーダーしたくなる単品メニューの考案依頼があり定番メニューを基本とした要望で提案した。11月には定食メニューの改変が出来、野菜などの素材をふんだんに使用したチンジャオロースーやレタス入りチャーハンなどヘルシー感あふれたメニューが出来あがった。

既存店をモデルとした取り組み事例

◆女性向献立2種
単品料理から定食へ
チンジャオロースー
レタス入りチャーハン
11月のメニューに採用

◆女性向献立の導入
単品メニューから
献立の選定
色鮮やかさを
加えた

◆女子大生の視点
から出来ること
◆既存の献立から
発展させること

◆社会に対して
インパクトがある
◆献立の選定に生徒
が対応してくれる
親子の互換 立花店

◆どの店舗と
するのか

◆可能な
対策は
なになのか

◆どれ位
オーダーが
あったのか

◆継続は
できるのか

◆第1ステップ
多題の方が
利用されやす
い店舗に書目

◆第2ステップ
食生活
サポートBOOK
に目を通して
もらう

◆第3ステップ
①塩分量
クイズの実施
②来店で食生活
について話し
合ってもら

◆第4ステップ
次回の来店で
塩分化対策が、
実践or継続
ができる

【新規開拓店への対応と実践活動の紹介】

尼崎市は外食や中食の割合が高く、それに伴い塩分摂取量の割合も高く、手軽に食材の選び方を勉強できる実践の場である”ビュッフェ方式の”店舗を選定した。

この店舗では、食生活サポートBOOKを作成し食卓に設置させてもらい、喫食者に関心度を高めてもらう為に塩分クイズも掲載した。

新規開拓店をモデルとした取り組み事例

◆尼崎市の食における問題点：外食や中食率が高いことによる塩分摂取が多い

◆新規開拓店はビュッフェ方式の店舗なので学生が作成した食生活サポートBOOK（料理の選び方＆買物の塩分量のマニュアル）冊子を届けてもらえた

◆塩分クイズも掲載した。幅広い対象者にアドバイスが出来る冊子 至4ステップ

◆第1ステップ
多題の方が
利用されやす
い店舗に書目

◆第2ステップ
食生活
サポートBOOK
に目を通して
もらう

◆第3ステップ
①塩分量
クイズの実施
②来店で食生活
について話し
合ってもら

◆第4ステップ
次回の来店で
塩分化対策が、
実践or継続
ができる

ビュッフェ方式の店舗に対応するための学習としては、2年生に栄養学実習にて自分が選んだ献立をエネルギーやたんぱく質、脂質や糖質、塩分摂取量などを手軽にカウントし過剰や不足の調整をしてから食べるカウントバイキング食事会を授業に取り入れている。

栄養学実習にてメタボ対策のためのカウントバイキング食事会を開催して実践力を養う

成人期 代謝対策
カウントダイエット 食事会 Aクラス
献立作成⇒材料購入⇒調理⇒定食⇒評価
20種類の料理を1食
エネルギー・たんぱく質・塩分のカウントの実施

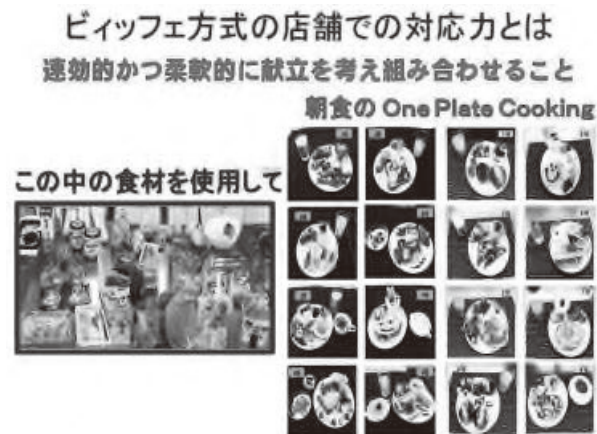
区分	写真	区分	写真
150 Kcal		100 Kcal	
主食		副菜	
200 Kcal		50 Kcal	
主食		物	

◆献立の献立を賞食後に評価を行う

◆評価表

区分	写真	区分	写真
150 Kcal		100 Kcal	
200 Kcal		50 Kcal	

献立力を養うために、食材から速攻で調理を行う **One Plate Cooking** も体験している。



【健育力を高める手立てとして】

- ◆店舗の提供献立の厳選化で健育力が高まる
店舗側の方が、提供している料理形態や特徴と欠点の把握をすることで具体的には(味付けの濃度)(油の質や油料理時の工夫)(野菜の提供の仕方)を改善し、献立の組み合わせ等を提示することで真の食の健康協力店と言えるのではないだろうか。
- ◆利用者の食事意識の向上で健育力が高まる
喫食者が今の健康状態や食生活パターン(嗜好)(喫食量)(味付け)などを意識して、献立を選ぶ能力を身につける必要がある。食事への関心度を高める
- ◆クリニックとの連携で健育力が高まる
クリニックに通院している喫食者に健康協力店を紹介してもらえることで、大学+健康協力店+クリニックによる健育力向上食堂が増えることで生活習慣病や低栄養に対応できる。

食育の定着化を目指した5年間の総括として

【課題解決への取り組みと 本心に望まれる新たな展開】

1. 尼崎市各地区への「食の健康づくり協力店」の基幹店設置の完成へ
2. 「食の健康づくり協力店」との関係の継続がステップアップ効果に影響する

3. 尼崎市の世代ごとの健康を守る食及び食事処に重点を置いた施策が重要
 - ①生活習慣病改善食の提供 (メタボ世代)
 - ②低栄養改善食の提供 (学生、高齢者)
 - ➡病気ではないが低栄養のサポート
 更に、クリニックとの食を通じた栄養改善の橋渡し (冊子やポスターの作成)



- ③具体的な食事提供の指導と普及の手法として、エネルギー、たんぱく質、糖質、塩分のカウントが出来る“100kcal カウントバイキング法”の指導と食事会の展開を学食やメタボ対応の社員食堂、低栄養対応の老健施設に実施していきたい。

尼崎市民に対する健康度を高めるには、健育力を高めよう



庄下川の河川環境を利用した児童生徒のための親水プログラムの構築実施

研究代表：衣笠治子

教育研究分担者：近藤照敏，山本起世子

1. 29年度の目的

29年度は、27年度に構築した幼児を対象とした親水プログラムを修正し実施することを目的とした。つながりプロジェクトの学生が中心となって実施することで、27年度に作成した親水プログラムに携わる学生リーダーの養成マニュアルを検証することとした。従来より行っている庄下川アメニティーゾーンの生物調査、上生嶋橋での水質モニタリングも継続した。

2. 水質モニタリング

前年度と同様、上生嶋橋から採取した表層水を試料とした。期間は2017年4月から2018年1月の期間で、原則月1回、計9回実施した。水質検査項目の平均値は、DO 12.78mg/L, COD 12.8mg/L, BOD 6.0mg/L, 透視度 113cm, pH 9.11であった。細菌検査は2017年10月に午前6時から午後6時まで2時間おきに測定した結果、最小値 3×10^3 cfu/mL, 最大値 1.1×10^6 cfu/ml であり、午前中に一時的に高くなり、その後減少していく傾向にあった。

3. 幼児を対象とした親水プログラムの実施

(1) 日程と対象

尼崎市内の保育所年長児 20 名を対象に 27 年度に構築した幼児を対象にした親水プログラム「しょうげがわたんていだん」を実施した。日程は11月2日午前10時から12時に行った。

(2) 学生リーダーの養成

つながりプロジェクト4の履修学生および有志の学生が学生リーダーとして参加した。

27年度の地域志向教育研究の一部としてまとめた「親水プログラムを運営するための大学生ボランティアリーダーの養成」の手順に従い、学生リーダーの研修を1回1～2時間程度で計4回実施した。研修内容は、水質検査の手法、植物や小動物の名前や見つけやすい場所の確認、危険な場所、また児童への声かけの手法や、植物遊びである。また、幼児が自宅に帰ってプログラムの話ができるよう、地図などを記載したポケットサイズの冊子を制作した。



図1 冊子に記載した地図

(4) プログラムの実際

今回の「しょうげがわたんていだん」は、大学近辺の庄下川を散策する1時間の親水プログラムで、1グループ幼児数人に対し2名以上の大学生リーダーがつき、植物や生き物を探していくものである。散策する過程で、都会の川にもたくさんの植物や小動物がいること、植物遊びでにおいや触感を知る、川の安全、ごみの問題、外来種の問題などに気づいてもらえるような声掛けを大学生リーダーがおこなった。大学生リーダーの声掛けや幼児の興味によって、さまざまな展開があるが、



図 2 29年度 親水プログラムの様子

多くは小動物や植物遊びが中心となる。しかし今回は、大雨によってごみが流されてきた後であったため、ごみが多いことを指摘し自らごみを拾おうとする幼児が多かった。

4. 5年間の実施内容と成果

(主な実施内容)

- 平成 25 年：児童対象の親水プログラム「庄下川で秋をみつけよう」、水質モニタリング
- 平成 26 年：生物調査、水質モニタリング
- 平成 27 年：幼児対象の親水プログラム「しょうげがわたんていだん」、水質モニタリング、生物調査
- 平成 28 年：児童対象の親水プログラム「庄下川でみつけた」、水質モニタリング、生物調査
- 平成 29 年：幼児対象の親水プログラム「しょうげがわたんていだん」、水質モニタリング、



図 3 平成 25 年度 親水プログラムの様子
生物調査

(報文)

- ①衣笠治子 大学生による多目的な河川研究

武庫川の科学 1, (1), p8 (2015)

②衣笠治子, 岩角 遥, 吉田美帆, 荒川美月 尼崎市庄下川の水質モニタリング 武庫川の科学 3, (2), p29-33 (2016)

③松浦秀一, 新里茂教, 松井恵理, 衣笠治子 西村邦子, 宮永恵三, 三宅謙, 長尾彩子「庄下川水系の水質と生物相の環境改善について」 尼崎市環境監視センター年報平成25年度 (2017)

④松井恵理, 衣笠治子, 野寄玲児, 松浦秀一「尼崎市庄下川の生物相」園田学園女子大学論文集 51, p1-18(2017)

(口頭発表)

①衣笠治子, 原田美智子, 松浦友里恵, 丸山裕子「小学生を対象とした庄下川親水プログラム」武庫川市民学会第 2 回研究発表会 (2013)

②岩角遥, 衣笠治子, 松井恵理, 原田美智子。「庄下川水質検査について」武庫川市民学会第 3 回研究発表会 (2014)

③松井恵理, 衣笠治子, 岩角遥, 原田美智子「児童のための庄下川学習プログラムの作成」武庫川市民学会第 3 回研究発表会 (2014)

④松本彩花, 大林理紗, 清水悠未, 中屋明日香, 松田明由未 「幼児を対象とした親水プログラム」 阪神つながり交流祭 (2015)

⑤衣笠治子, 「庄下川の水質モニタリング」武庫川市民学会第 4 回研究発表会(2015)

⑥衣笠治子, 中屋明日香, 林里紗, 原田美智子, 松井恵理, 山本起世子, 西村邦子「児童のための庄下川自然観察会の企画と運営」武庫川市民学会第 5 回研究発表会 (2016)

⑦松田明由未, 衣笠治子, 松井恵理, 原田美智子, 西村邦子「庄下川水質検査について」武庫川市民学会第 5 回研究発表会 (2016)

⑧松井恵理, 衣笠治子, 野寄玲児, 松浦秀一「尼崎市庄下川の生物調査」武庫川市民学会第 5 回研究発表会 (2016)

尼崎市に住む高齢者のための運動交流プロジェクト実践と普及

研究代表：林谷啓美

研究協力者：藤澤政美

1.はじめに

平成 29 年 9 月 15 日現在、我が国の総人口に占める高齢者人口の割合は 27.7%と過去最高となった。また、男性の平均寿命は 80.98 年、女性のそれは 87.14 年でいずれも過去最高を更新した。そして世界保健機関 (WHO) が発表した世界保健統計 2016 によると、世界一の長寿国は前年同様日本で男女平均が 83.7 歳。さらに健康寿命においても男女ともに世界一である。しかしながら、平成 27 年度の国民医療費は 42.4 兆円で前年度より 1.6 兆円の増加。そのうち、65 歳以上の高齢者が全体の 59.3%を占めている。また、要介護(要支援)認定者数は、平成 26 年度末現在 606 万人で前年度末より 23 万 6 千人の増加で男女ともに最も増加者が多いのが要介護 1、続いて要介護 2、そして要支援 2 という比較的介護度が軽い高齢者である。

高齢者の日常生活の中での移動能力の低下は生活機能全般に対する影響が大きく、介護予防の観点からはその能力の維持・増進を図ることが重要な対策となる。そのような移動能力の低下を引き起こす最大の要因は下肢や体幹の筋力低下または膝や腰の痛みである。

一方、尼崎市の平成 22 年の平均寿命は男女とも県下最下位で、介護を必要としないで、自立した生活ができる生存期間の健康寿命も男女ともに県及び国より短くなっている。

この健康寿命の延伸を阻害する要因として、主に内臓脂肪症候群、うつ、認知症など心や神経系の問題、そして膝痛、腰痛など運動器症候群が上げられる。

これら運動器症候群、特にサルコペニアの

予防や改善などを主な目的に考案したのがオリジナルの筋力運動「健康あま体操」である。また、内臓脂肪症候群やメンタル面にも効果が期待できるよう、オリジナルの音楽とそれにあわせた有酸素運動のリズム運動も考案。

そこで、本研究は、尼崎市における高齢者のためのオリジナル音楽・運動を考案し、この普及により、筋力向上をはじめとした健康増進およびコミュニティの拡大をはかることにある。また、これらの運動を高齢者と本学学生が一緒に行うことによる世代間交流を通し、街の活性化につなげるものである。

2. 平成 29 年度実施内容

1) 運動 DVD バージョンⅡのリリース

準備運動、リズム運動、筋力運動、整理運動より構成され、モデル、ナレーションともに本学学生が担当。DVD では準備運動、整理運動ともに 5 分、リズム運動は 4 分 20 秒、筋力運動は 21 分 10 秒で 12 種目、うち下肢のものは 6 種目、全編で 35 分 25 秒。



2) 地域志向科目「つながりプロジェクト」

社会福祉法人尼崎市社会福祉協議会与連携し、オリジナルの音楽と運動 DVD (監修：藤澤政美) をもとに、尼崎市立総合老人福祉

センター、あま体操絆、猪名寺長生クラブ連絡会等にて本学2年次生とともに実施。



尼崎市立総合老人福祉センター



猪名寺長生クラブ連絡会

3) 定期的な運動の実施

尼崎市立総合老人福祉センター、あま体操絆にて週にそれぞれ1回ずつ実施。猪名寺長生クラブ連絡会は月に3回、中難波はなみずき会は月に1回ずつ実施。本学2年次生も参加し、高齢者と交流しながら運動を行った。

4) 運動の普及

(1) 森の文化祭 in 尼崎の森中央緑地にて、日頃この運動に取り組んでいる高齢者20名・社会福祉法人尼崎市社会福祉協議会がリズム運動を披露し、来場者とともに実施。

(2) 平成29年度本学学園祭(平成29年10月21日)にて尼崎市立総合老人福祉センター、あま体操絆の計40名、本学学生4名、バンド紡ぎ家、研究者、社会福祉法人尼崎市社会福祉協議会により音楽およびリズム運動

を披露。運動成果の発表、交流の場となった。



平成29年度本学学園祭

(3) あま体操絆20名が園田地区まつりにてリズム運動を披露、運動参加希望者が増えた。

3. 結果

(1)測定対象

これら運動を月に3回、18か月継続しているグループの女性11名について、身体測定等(身長、体重、血圧、体脂肪率、筋肉量、推定骨量及び握力)実施。測定は平成27年11月(初回測定)と平成29年6月に実施。尚、本研究は、本学生命倫理審査委員会の承認を得て実施した。

(2)測定結果

初回測定時の年齢は 75.0 ± 3.5 (70~81)歳、身長 151.5 ± 5.6 (144.6~163.3)cm。各パラメータの初回(前値)と18か月後(後値)の結果を表に示した。

		初回(前値)		18か月後(後値)		
体重	kg	53.6	± 9.0	53.1	± 8.8	
BMI	kg/m ²	23.3	± 2.9	23.1	± 2.8	
体脂肪率	%	31.5	± 5.9	32.2	± 6.4	
収縮期血圧	mmHg	137.5	± 15.6	130.0	± 13.6	
拡張期血圧	mmHg	79.8	± 14.7	67.6	± 8.7	**
筋肉量	kg	34.3	± 3.5	33.7	± 3.7	
推定骨量	kg	2.0	± 0.3	2.0	± 0.4	
基礎代謝	kcal	1045.9	± 129.8	1027.7	± 129.4	
握力 右	kg	21.9	± 3.3	22.2	± 2.3	
左	kg	20.4	± 3.0	20.5	± 3.0	
** : p<0.01						

拡張期血圧が79.8mmHgから67.6mmHgへ有意な低下を示した(p<0.01)。収縮期血圧においても137.5 mmHgから130.0 mmHgへ低下傾向を示した(p=0.076)。また初回時

に該当者がなかった至適血圧が3名になるなど、6名のレベルが下がった。

筋肉量については34.3kgから33.7kgへと1.7%の減少、一方、筋力の握力は右が21.9kgから22.2kgへと1.4%の増加、左は20.4kgから20.5kgへの0.5%の増加となった。

4. 考察

18か月間の月に3回のリズム運動と筋力運動で拡張期血圧に有意な低下が、また収縮期血圧においても低下傾向が認められた。

従来、運動における有効な降圧のためには、最大酸素摂取量の50%程度のいわゆる有酸素運動で1回およそ300kcal、合計運動時間が1,000分以上必要とされている。今回のリズム運動の運動量は1,250kcal(4分20秒/回×3回/月×18か月)程度の運動量であり、前述の推奨される運動量を遥かに下回っている。一方、正常血圧または高血圧予備軍においてはレジスタンス運動(筋力運動)において有意な血圧降下を示した報告もあり、筋力運動が降圧に寄与した可能性もある。

他に初回測定が11月、18か月後の後値が6月であった季節変動である。この点を考慮し、今後は同一時期に測定を行いたい。

一般に50歳以降毎年1~2%程度筋肉量は減少するとされている。今回の運動実施期間が18か月(1.5年間)であるため、1.5~3.0%の筋肉量の減少になるが、今回は1.7%の減少で、筋肉量の減少にやや歯止めがかかっていると考えられる。一方、この減少にもかかわらず握力は右1.4%増、左0.5%増と低下していないのは、筋力運動による神経系への入力量、すなわち運動単位の動員が増えた神経系の改善の可能性が示唆される。この改善には、巧緻性を求められるリズム運動も影響を及ぼしていることも考えられる。

以上より、対象者を増やし、測定や運動実施の内容などを精査し、筋力運動、リズム運動の

効果を検証しつつコミュニティを拡大していきたい。

5. 参考文献

- 1) 総務省：統計からみた我が国の高齢者(65歳以上)平成29年9月17日
- 2) 厚生労働省大臣官房統計情報部：日本の健康寿命 平成28年簡易生命表, 2017
- 3) WHO(世界保健機構)：World Health Report, 2016
- 4) 厚生労働省政策統括官付参事官付保健統計室：平成27年度 国民医療費の概況, 平成29年9月13日
- 5) 厚生労働省老健局介護保険計画課：平成26年度 介護保険事業状況報告(年報)
- 6) 尼崎市：尼崎市国民健康保険保健事業実施計画第1期, 平成27年5月
- 7) スポーツ庁：平成28年度体力・運動能力調査の結果について, 平成29年10月8日
- 8) 北海道薬剤師会：季節による血圧変動と心血管系疾患の発症, 平成30年1月18日,
- 9) 岩根幹能, 葭川明義, 大畑博, 麦谷耕一, 木下藤寿, 伊藤克之, 生田善太郎, 茂原治：血圧の季節性変動と寄与因子, 産業衛生学雑誌, 44, 2002
- 10) Cornelissen, Fagard RH, Coeckelberghs E, Vanhees L. : Impact of resistance training on blood pressure and other cardiovascular risk factors: a meta-analysis of randomized, controlled trials. Hypertension. 58(5),950-8,2011
- 11) 葛谷雅文：老年医学における Sarcopenia & Frailty の重要性, 日本老年学医学雑誌, 46(4),279-285,2009
- 12) Sehl ME1, Yates FE : Kinetics of human aging: I. Rates of senescence between ages 30 and 70 years in healthy people. J Gerontol A Biol Sci Med Sci. 56(5):B198-208,2001

学生を主体とした、地域学校への情報教育応援活動

研究代表：難波 宏司

研究協力者：村端 慶治

1 はじめに

本研究は、次期学習指導要領実施から開始される、小学校でのプログラミング教育の先行実施を学生にサポートさせる活動の実践研究である。



写真1 3とプログラミング 具体的には、左図のレゴロボット (EV-3) を教材として、本学学生が小学生に対してプログラミングを教える活動である。

本研究には、以下の内容を含んでいる。

- 1 小学校でのプログラミング教育の在り方
 - 2 学生のティーチングスキル・コーチングスキル向上教育の方法
 - 3 地域・学校に対するサポートの在り方
- 本論では、主に3に重点をおいて考察する。

2 活動報告

2.1 学生に対する指導

最初に、学生にプログラミング教育の意義が児童の主体性を引出し、科学的思考とレーニングと IT に関する関心を高めることであることを理解させた。

次に、学生にプログラミングの方法を指導した。基本的な使い方を指導（1時間程度）した後、課題を提示し、その解法を学生に思考させる形でプログラミング能力を高めた（4回）。

その後、グループ分けし（3グループ）、グループで児童に対する指導法を考えさせた。指導法に関しては、最初制限を持たせず自由に考案させ、それを児童の視点から見てどうなのかを教員側から指摘する形で指導案の改良を行った。ある程度まとまったところで、模擬授業を行い、

それをビデオ撮りした。

2.2 児童に対する指導実践

7月及び9月に、尼崎市立小学校長会及び教頭会で事業内容を説明し事業実施小学校を募った。その結果、杭瀬小学校、土曜講座での実施、1～3月 立花西小学校でのクラブ活動での実施となった。

杭瀬小学校では、11月～12月の単発3回実施（継続でなく、回ごとに参加児童が変わる）で、実施時間は9時30分から11時30分の2時間。実施回ごとに指導する学生グループ（A, B, C）を変えた。参加児童は各回ほぼ15名で4,5年生が多かった。学生の指導内容は、ほぼ、ロボットの前進/回転、超音波センサによる障害物感知、色センサによる色による制御停止などで、ほぼ教員が学生に指導した内容のアレンジである。しかし、指導の目標や指導方法は、学生グループごとに特色を持っていた。

グループAの指導（教え込み型）



写真2 グループA指導風

児童に「分かる」こと目標にし、全体の説明は丁寧にいき、最後まで段階を追って、説明していった。児童には教える姿勢で接した。

グループBの指導（お姉さん型）



写真3 グループB指導風景

「協同作業を通して、楽しい体験」を目標に、全体の説明は簡潔にし、児童には一緒に考える姿勢で接した。

グループCの指導（体験型）



写真4 グループC指導風景

「主体的に考え、行動する」を目標に、指導的な説明の後、課題を提示し、児童に実験する時間を充分取った、児童には、見守る姿勢で接した。

3グループとも最後に課題（回転・センサ感知を含んだグループごとに異なる課題）を出したが、どのグループもほぼ2/3の児童が、課題を達成した。

3 考察

3.1 児童アンケート

実施後児童に対して簡単なアンケートをとった。

それを数値化して下表のように集計した。
(5点満点で数値が高いほど項目に合致)

表1 児童へのアンケート集計

項目	全体	A	B	C
満足	4.8	4.7	5.0	4.7
再参加	4.5	4.5	4.7	4.4
時間短い	3.9	3.4	4.5	3.7
簡単	3.1	2.4	3.7	2.9

となった。全体としてほぼ期待される結果と

なったが、グループ若干の差が見られた。Bグループは児童が満足することを意図した指導を行い満足度などは高かったが内容が簡単すぎたという結果となっている。Aグループは教え込むタイプで、効率よく指導が進んだので、児童には時間が余った。また、教え込みすぎたため児童には難しく感じたと思われる。Cグループは、準備段階では、主体性を育てること重視し課題もよく練られていたが、意欲を失った児童への対応がうまくいかず、満足度や再参加の希望が少なくなったと思われる。

3.2 学生の地域連携の在り方

本事業は、当初、小学校でのプログラミング教育を学生が実施することにより、小学校教員の負担軽減になり社会貢献につながると考えていた。ところが、何人かの教員と話しあう中で、外部からのサポートを受けた場合、従来との指導方針や指導方法との差異が問題となることがあり、実施前の打ち合わせで時間がとられたり、実施後の児童へのサポートが必要となったりと反って多忙となることが指摘された。また、学校側からは「教育の質保証」（いつでも、同じ指導目標、指導内容）が求められるのに対し、本事業では、学生の主体性・創意工夫を重視し、また専門教育ではないので知識・技能にはばらつきが生じ、質保証は保証できない。

今回の実践では、グループA及びグループCは教員の代替として指導した。それに対して、グループBはみんなのお姉さんとして、接し指導した。観察では、グループBが児童に与える影響としては最も高かったように思えた。

教育に関しては当然、小学校教員が技量的に優れている。そこに同じ姿勢で臨んでも相手としては困るであろう。本学学生にあって、相手（小学校）にないもの（「近くのお姉さん」）を提供し交流することが、地域連携の持続には必要であろう。

「生活」をテーマに、地域に根差した生涯学習プログラムの開発
 生活の知恵再発見（食生活、衣生活編）

研究代表：深津智恵美

研究協力者：小西春江，山口律子

1. 目的

生活の営みの多くは、古くから経験に基づく細かな工夫や知識が祖母から母へと受け継がれ、現在では「おばあちゃんの知恵」として伝承されている。しかし現在の生活を見ると簡便志向に走り、また商業ベースに乗った便利品に慣れてしまい、多くの無駄を生み出している。この生活の見直しを図ることを目的とし、地域に根差した学習プログラム「生活の知恵」を発信し、本学の総合生涯学習センターで展開されている、プログラムの中に「生活の分野」を入れることを目的とした。

3. 研究計画

生活に関わる身近なテーマを中心にプログラムを構成する。2年目は、「衣」と「食」の2つの講義と実習の事業を実施する。終了時のアンケート調査から、今後継続できるテーマで、ニーズに合わせた内容のプログラムを、展開させてゆく。

4. 活動結果

1. 衣生活編 講義（90分）×2コマ

「洗濯の新表示 このマークの意味がわかりますか？」平成29年11月1日（水）実施、受講者4名、「賢い洗濯方法を知りたい、洗濯代を安くするには？知らないと損をする洗濯のコツ！」平成29年11月8日（水）実施、受講者5名

衣生活（特に洗濯）アンケート調査：自記式18問、回収率100%

アンケート結果は、今回の受講者全員が「洗濯」に関心が高く、大切であると考え、

自分自身で洗濯をしている。衣服を購入する際、どんな素材が使われているか「組成表示」、洗濯などの「取扱い表示」等を見て購入するのは62.5%、洗濯などの「取扱い表示記号」を見て洗濯するのは87.5%であった。洗濯の「取扱い表示記号」が改正される平成28年12月以前から改正されることを知っていたのは50%であった。



洗濯方法は母または祖母から教わったのは62.5%であった。ウールのセーターは50%が家庭で手洗いし、50%がドライクリーニングに出している。

講義は一方通行にはせず、時折対話も織り交ぜながら進めた。その結果、講義を進めていくにつれ、受講者からさまざまな経験談が話され、講義内容以上の盛りだくさんの「洗濯の知恵」が飛びかった。2講座とも高齢者の方の発言が活発で、若年者はその知らない「洗濯の知恵」を一生懸命に聴かれていた。今回の参加者の高齢者は「洗濯の知恵」は確かに母、祖母から伝承

されていた。受講者は少なかったが、全員意欲的に、学ぼうとする姿勢が感じられた。

また、本学学生に同様の質問をした場合と「洗濯の知恵」を知らない者が多く、だんだんと伝承されなくなってきていると、危機感を抱いている。



2. 食生活編 講義・実習 3時間30分 「～エコクッキングしてみませんか～」

平成30年1月20日(土)実施、本学調理学実習室、参加者19名、食生活アンケート調査：自記式13問、回収率100%

実施内容は、エコクッキングについて講義を行い、調理の操作等の説明をした後、実習を行った。実習の満足度は、講義内容、時間配分、配付資料、手順・レシピ、参加費、スタッフの対応とも89.5%以上の者が満足と答えていた。今回の講座を受講してエコクッキングに対する意識は全員が高まったとの結果であった。



今回の5つの料理の中で再度作ってみたいもの(複数回答)は、47%がビビンバで、次いでりんごホットケーキ21%、ナムルの順であった。

フライパン一つで洗い物が少なく、時短で料理が行えることがエコ意識の導入口となった受講者がいる一方、既にエコの実践をして



いる受講者も数人あり、意識の高い受講者が含まれていた。

料理の試食の結果は「全ての料理がおいしい」「調理使用道具が少ないが、手抜き料理に見えない」「材料を無駄なく使い、ガスや水道の使用量が減らせるから、今後家でも行いたい」等、好評であった。

衣生活編・食生活編とも今回の受講者は高齢であったため、まだ知恵の伝承が存在する世代であった。

今回の受講生は、講座の継続受講を、積極的に参加したいと望んでおり、生活に対して関心を持つ者であることがみえた。

今後も大学開催の講座である為、科学的な知識や、考え方を加えた「生活の知恵」を伝承していく必要があると確信する。

5. 今後の課題

昨年度も同様に、高齢者の受講生は講座に参加したいと積極的である。

また、若年者層の学生や30代、40代の中に潜在的に生活に関しての講座の受講希望者が存在すると思われる。

これらの層には、講座の内容をより具体的に提示すれば、興味を示すのではないかと考えられる。

今後、生涯学習として継続的に開催する場合、本学の総合生涯学習センターで長年培われた、ノウハウを生かした募集方法等を駆使して、ニーズにあった「生活の知恵」を発信できる学習プログラムを、構築してゆきたい。

尼っ子のスポーツ振興プロジェクト

研究代表：木田京子

研究協力者：藤川浩喜、足立学、近藤照敏

はじめに

尼崎の子どもがスポーツに出会い、スポーツを継続するきっかけの支援、さらに、尼崎の子どもたちの競技力向上及び指導計画・指導実践に関わる学生の経験値を高めることを目的とし、28年度より行っている。3競技でスポーツ教室を各競技団体と協力し開催し、29年度は継続開催し、さらには参加者の満足度調査及び学生の指導者としての振り返りを行うことを新たに行った。29年度の活動は以下の通りである。

活動報告

1. ソフトボール教室

対象：尼崎市内女子中学生 95名

日時：平成30年1月20日

場所：園田学園女子大学グラウンド

協力：尼崎ソフトボール協会、尼崎体育協会

指導：本学ソフトボール部員 25名

内容：1) W-up アイスブレイクからはじめ、学校の練習に取り入れられる内容を中心に、2) 人組での動的ストレッチ、ダイナミックストレッチ、バリエーションダッシュ等を取り入れ、最後はゲーム性のある運動を行った。

2) 基礎基本練習 (図1)

捕る・投げる・打つの基本動作練習を2グループのローテーションにより行った。キャッチボール、ゴロ捕球とバッティングスイングとトスバッティングで動作の理論を説明しながら、習得できるようにアドバイスをを行った。



図1 基礎基本練習風景

3) ポジション別練習。

ポジションを4グループに分け、それぞれの特有の動きを専門的に指導した。尼崎の中学校にソフトボール経験を有する指導者が少ないため、受講生から普段困っているポジション特有の悩みをはじめにヒアリングし、実際に指導内容に盛り込んだ。特にピッチャーはウインドミル投法を指導される機会が少ないためか、熱心に耳を傾ける選手が多かった。



図2 大学生のプレーを見る様子

4) 大学選手のプレーを見て学ぶ。(図2)

大学選手のピッチングやシートノックを見る事で教わった内容をおさらいする機会を設けた。最後に受講生のリクエストでフォーメンションプレーも行い、歓声が一番上がった時

間であった。

5) 講習会後の評価会。指導風景を動画に撮影し、評価会を行った。指導内容や動作、指導者としての姿勢なども振り返る事で、気付くことが多く、学生の感想は、「受講生により反応が悪い場合に困った」「模範の示し方が難しかった」「指導する際の位置が悪かった」「やる気を向上させるには褒めること大切だとわかった」等の意見があり、学生にとっても良い経験であった。

2. 陸上競技教室

対象：尼崎市内女子中学生 198名(述べ数)

日時：平成29年4月14日・26日・5月25日
(3回に分けて開催)

場所：ベイコム陸上競技場

協力：尼崎陸上競技協会

指導：本学陸上競技部部員 其々約25名

内容：1) 専門種目別指導

短距離：基礎練習、加速走、スタートダッシュ、筋トレ。

ハードル：基礎練習、1台目から3台目までのアプローチ、筋トレ

走り高跳び：ドリル、3歩跳、5歩跳、助走からの踏切練習

走り幅跳び：ドリル、5歩跳、助走からの踏み切り練習、着地練習

砲丸投げ：メディシングボール投げ、グライドドリル、立ち投げ、グライドからの投げ練習

尼崎から全国大会に出場する選手が減っている現状、尼崎からのトップ選手育成の為、技術や記録が向上するように指導した。普段、専門種目の指導者が不足し、種目別の技術指導を受ける機会は少ない。各グループ、模範を見せながら指導を行った。中には砲丸で1m以上記録が伸ばした選手も見られ、指導し

た学生も一緒に喜ぶ様子も見られた。



図3 種目別指導の様子

2) 講習会後の評価会。ソフトボールと同様振り返りを行った。学生からは、「すぐに記録が伸びた選手がいて嬉しかった」「一生懸命の中学生の姿勢に答えなければいけないという意識になった」「とても良い経験だった」等の感想であった。

3. バレーボール教室

対象：尼崎市内女子中学生 78名(5チーム)

日時：平成29年8月2日、平成30年1月13日
(2回に分けて開催)

場所：園田学園女子大学スポーツセンター

指導：本学バレーボール部 其々31名

内容：1) W-up 大学チームで普段から行うトレーニングを兼ねたウォーミングアップを一緒に行った。難しい動きに戸惑う選手もいたが、大学生が模範を見せながら行った。



図4 バレーボール教室ウォーミングアップ

2) 基礎基本練習

パス・台上レシーブ・3人レシーブ・スパイク・2段トス・サーブのバレーボールに必要な技術の理論を学び、練習を行った。特に注意した事は、癖や欠点を探すだけでなく、上手く出来ていることを承認し、声に出して「いいよ!」「ナイス!」等の声掛けを意識的に行うことで、選手自身の向上する気持ちを持たせることに取り組んだ。

3) 大学生のプレーを見て学ぶ

バレーボールのスパイクのトップ選手の球速は100 km/hとされている。実際に受講生に大学生のプレーの速度体験と、スパイクからのレシーブプレーを間近で見る事が類似運動に繋がるため行った。



図5 バレーボール技術練習様子

まとめ

尼崎より少しでもスポーツを楽しみ、継続する子どもたちが増える事、さらには尼崎の競技力向上を目指し、尼崎地域のスポーツを、今後も盛り上げていけるよう、継続していきたい。

平成 22 年からスタートさせた〈まちづくり解剖学—尼崎—〉を平成 25 年、学長を機構長とする「地域連携推進機構」の発足を機に学内の教職員（看護、健康、栄養、子育て、教育など）、市役所、地域の方々と一緒に改めて地域の研究会を開くこととなった。〈まちづくり解剖学尼崎〉への発展である。これによって平成 25 年からは、主催を園田学園女子大学・園田学園女子大学短期大学部地域連携推進機構とし、共催を尼崎市、尼崎商工会議所として、隔月で運営を行っている。

平成 29 (2017) 年度主な目的

- 地域社会、大学、行政それぞれが抱える課題を共有する。
- 地域社会でのまちづくりの問題点・改善点を明確にしていくことで今後に向けての構想、行政の役割を理解、大学として何ができるのか考える。
- 実施方法は、一つの地域（尼崎市）の課題に対して異なる立場の方々からそれぞれのお話を聞くことで理解を深め、発言することで参加者みんなの意見を聴き自分の考えをまとめる。

平成 29 年度は、例年特別編として実施している災害関係から防災・減災を考える会を定例開催として行った。

第 1 回

日時：2017 年 5 月 25 日（木）18:15～20:00

場所：5 号館 2 階チャティー

テーマ：「つなげよう尼崎と学生の輪～あまがさきを私たちのホームへ～」

発表者：食物栄養学科 佐伯亜美さん、食物栄養学科 佐野彩奈さん

参加者：16 名

内容：「つな Girl（学生地域連携推進委員会）の活動」

第 2 回

日時：2017 年 7 月 20 日（木）18:15～19:30

場所：大学 5 号館 2 階チャティー

テーマ：「わがまちまちづくり ～ここが工夫のしどころ～」

発表者：富松神社宮司 善見壽男氏、貴布禰神社宮司 江田政亮氏、猪名寺自治会長 内田大造氏

参加者：15 名

内容：「地域の特徴、特産品を通してのまちづくり」

第 3 回

日時：2017 年 9 月 28 日（木）18:15～20:00

場所：大学 5 号館 2 階チャティー

テーマ：「尼崎市の地域学校協働活動とまちづくり」

発表者：杭瀬小学校区学習センター運営委員 磯田雅司氏、大槻真佐子氏、

参加者：13 名

内容：「学校支援活動コーディネータのモデル校としての活動」 コーディネー

第 4 回

日時：2017 年 11 月 16 日（木）18:15～19:30

場所：大学 5 号館 2 階チャティー

テーマ：「インターンシップのあれこれ」

発表者：尼崎経営者協会 藤井克祐氏、NPO 法人 JAE 坂野充氏、尼崎商工会議所 小林史人氏、

参加者：13 名

内容：「インターンシップの最新情報、インターンシップに対する産、官、学の立場と思い」

第 5 回

日時：2017 年 1 月 12 日（木）17:30～18:30

場所：大学 5 号館 2 階チャティー

テーマ：「まちの課題解決に取り組む『大学』」

発表者：尼崎市企画財政局ひと咲き施策推進

立石孝裕氏、地域連携推進機構 榎本匡晃

参加者：22 名

内容：「COC の効果とみんなの尼崎大学〈行政から見た大学の地域連携〉と「ポートランド州立大学の CBL 実践研修報告」

第6回

日時：2017年3月8日（木）13:00～16:00

場所：大学3号館ラーニングコモンズ

テーマ：「災害後、避難所で健康的に生き永らえる」

発表者：人間看護学科 中世古恵美先生、食物栄養学科 松葉真先生、尼崎市危機管理安全局 災害対策課 首藤広樹氏

参加者：22名

内容：「避難所で考えられる問題と日ごろからの備えについて、防災グッズの紹介、災害後、避難所で健康的に過ごすソーラーCooking、命をつなぐスタミナ羊羹づくり」

【アンケート結果から】

〈1～6回〉

- ・学生と大人の交流の場を設けて欲しい。
- ・地域活動の可能性を感じる刺激的な回でした。自治はビジネス。人は育てるんじゃないくてさがす、必ずいる、という話が印象深かったです。
- ・尼崎にはこんなにも問題があるんだと思いました。少子高齢化の問題はやはり大きいと感じました。しかし、子供達に対する取り組みとして、まずは地域から動いていくという点が行われていて、大切だと感じました。取り組むときの心がけとして、宮司さんがおっしゃっていたことにとっても感心をしました。私たちが企画を行うときに参考にしていきたいです。
- ・「経営者の一人として学校運営に関わっていく」という言葉は地域商店街で経営をされているからこそ出る発想だと思った。担当者としても、目から鱗だった。
- ・現段階で意見のすり合わせを担うコーディネーターという役割があったりとこれま

での経験と課題から様々な工夫がされてきていると思います。大人たちの意見を出し合う場はあると思いますが、子どもたちの思いも聞ける場があれば良いかと思いました。

- ・インターンシップの目的が多様化する中で、目的のマッチングをする必要性もあるのかなと感じました。低年次から情報提供できる環境仕組み作りが大切だと感じました。
- ・今回はじめて参加させて頂きました。尼大の事がよくわからなかったのですが、今回の説明を頂き、とても良い取り組みだと思いました。
- ・大学から見た地域の課題、自分が育った街との比較等、小冊子みたいなものがあれば読んでみたい。
- ・災害時の食時対策として、豚汁から他の味付けに展開していくのが、避難生活をしている時にも気分が変わってとても良い考えだと思いました。
- ・羊かんが自作できるとは思わなかった。ソーラークッカーや防災備品がもっと広く認知されるとよいと思った。
- ・料理のレパートリーの味を変えるだけで、被災時は気分が上がると思います。こういう事を教えて下さるとありがたいです。
- ・まちづくりでは、いろいろな視点で見ていくことも必要かと思います。地域の知の核としての園田女子大に期待します。
- ・発表者ごとに、小グループに分かれ、意見交換する形が、発表者も参加者もいろいろな話が出来ると感じました。
- ・福祉（障がい、高齢者）について取り上げて欲しいと思います。

（文責：地域連携推進機構 榎本匡晃）

学 生 活 動



キッズフェスティバル 2017.10.21



政策提言発表会 2018.02.13

学生地域連携推進委員会

学生地域連携推進委員会、通称つな Girl は発足 4 年目を迎えました。新たに 1 回生 1 名を加え、計 14 名で活動しています。

2017 年度、つな Girl は「つなげよう尼崎と学生の輪～あまがさきを私たちのホームへ～」を目標に掲げました。この目標は、園田の学生と地域のつながりを深めたいという、つな Girl の願いから生まれました。尼崎市に住んでいる学生はもちろん、尼崎市に住んでいない学生にも尼崎市を好きになってほしい、尼崎市を第 2 のふるさとのように感じてほしい、そんな思いを込めました。つな Girl はこの目標に掲げ、明るく、楽しく活動してきました。

2017 年度の活動の中で印象的だったイベントは 3 つあります。1 つ目は、2017 年 10 月 21 日（土）に開催した「キッズフェスティバル」です。悪天候にも関わらず、学内、学外合わせて 14 のブースの出展があり、152 人もの子供たちが参加してくれました。帰るときには、子供たちが「楽しかった」と言ってくれて、長期間かけて準備してきた良かったと感じました。

2 つ目は、2017 年 11 月 6 日（月）～11 月 20 日（月）に開催した「ボランティアの木に花を咲かせましょう」です。これは、ボランティアに興味があるが一步を踏み出せない学生を対象に企画しました。学生に、ボランティアに対する要望や改善点を募集したところ、26 個の意見が集まりました。地域の方々にも学生の意見を伝えていき、ボランティアに参加する学生が増えることを願っています。

2018 年 2 月 18 日（日）に開催した「つながるパラダイス 3～見て、聞いて、食べて、転がして、兵庫発見！！～」です。今回のつな

がるパラダイス 3 では、兵庫県県政 150 周年事業の一環としてすごろくを作って、遊ぶイベントを企画しました。すごろくのマスには、兵庫県の神戸・阪神地域のマスコットキャラクターやスポットをクイズにしたマス、特産品が試食できるマスなど、たくさんのマスを用意しました。特産品には、神戸・阪神地域のお菓子や野菜を用意しました。これには参加者の方も興味深々で、企画した甲斐がありました。

イベントを開催するにあたって、参加者に「楽しんでもらう」ことを一番に考え企画しました。説明の時間には、参加型のクイズを行いました。参加者の反応を見ると、答えを一生懸命考えている姿や笑顔が見られ、参加者の方が楽しんでいるのを実感でき、自信につながりました。

2017 年度の活動を通して学んだことは、「参加者の立場に立って考える」ということです。特にイベントを企画するときが一番大切で、難しいと感じました。何度も話し合っただけで企画したイベントが成功したときは、達成感がこみ上げてきました。そして、イベントが成功するのも、つな Girl が楽しめるのも、一緒になって盛り上げてくれる参加者がいてこそだと思います。学生にもつな Girl の楽しさを知ってもらい、学生が参加したいと思えるような企画を考えていきたいです。

（食物栄養学科 2 年 佐伯亜美）

第1回 定例会議

日時：4月5日（水）10：00～12：00

場所：まちの相談室 出席者：計6名

- 1) 「～尼崎城をもっと身近に～城下町市民の城への想いとその活用方法」の内容報告
- 2) 会議日、つな Girl 前期時間割表作成者決め
- 3) 新入生の勧誘について
- 4) 学生総会について
- 5) 「いい笑顔で賞」について

第2回 定例会議

日時：4月6日（木）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計6名

- 1) 事務連絡
- 2) 学生総会
- 3) 「いい笑顔で賞」について
- 4) 尼崎巡りにについて
- 5) まちの相談室開室日について

第3回 定例会議

日時：4月10日（月）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計6名

- 1) 尼崎めぐりにについて
- 2) つな Girl 勧誘について
- 3) 事務局より
- 4) 新入生歓迎会振り返り
- 5) エコあまフェスタ 2016 について

第4回 定例会議

日時：4月13日（木）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計6名

- 1) まちの相談室
- 2) まちづくり解剖学について
- 3) クラブ同好会代表者会議について

第5回 定例会議

日時：4月17日（月）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計10名

- 1) 尼崎めぐりにについて
- 2) 新入生歓迎会について
- 3) キッズフェスティバルについて

- 4) 諸連絡・報告

第6回 定例会議

日時：4月20日（木）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計10名

- 1) 尼崎めぐりにについて
- 2) 新入生歓迎会について
- 3) キッズフェスティバルについて
- 4) 諸連絡・報告

第7回 定例会議

日時：4月24日（月）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計10名

- 1) 尼崎めぐりにについて
- 2) 新入生へのつな Girl 紹介
- 3) 諸連絡・報告

第8回 定例会議

日時：4月27日（木）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計6名

- 1) まちの相談室について
- 2) 尼崎めぐりにについて
- 3) 学生総会について
- 4) 園田スポーツフェスティバルについて
- 5) キッズフェスティバルについて

第9回 定例会議

日時：5月1日（月）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計6名

- 1) 新入生歓迎会報告及び反省
- 2) 学生総会について
- 3) 尼崎城再建講演会について

第10回 定例会議

日時：5月8日（月）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計6名

- 1) 新入生歓迎会報告及び反省
- 2) 学生総会について
- 3) 尼崎城再建講演会について

第11回 定例会議

日時：5月11日（木）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計7名

- 1) 新入生歓迎会について
- 2) 学生総会について

3) やんちゃんこ主催イベントについて
第12回 定例会議
日時：5月15日（月） 12：10～13：00
場所：まちの相談室 出席者：計6名
1) 尼崎城の「面白い活用方法」について
2) 学生総会について
3) まちづくり解剖学にむけて
4) 報告事項

第13回 定例会議
日時：5月18日（木） 12：10～13：00
場所：まちの相談室 出席者：計6名
1) 学生総会について
2) まちづくり解剖学にむけて
3) 報告事項

第14回 定例会議
日時：5月22日（月） 12：10～13：00
場所：まちの相談室 出席者：計7名
1) 学生総会について
2) 報告事項

第15回 定例会議
日時：5月29日（月） 12：10～13：00
場所：まちの相談室 出席者：計6名
1) キッズフェスティバルについて
2) 報告事項

第16回 定例会議
日時：6月1日（木） 12：10～13：00
場所：まちの相談室 出席者：計7名
1) つな Girl 主催イベントの運営について
2) キッズフェスティバルについて
3) 報告事項

第17回 定例会議
日時：6月5日（月） 12：10～13：00
場所：まちの相談室 出席者：計5名
1) つな Girl 主催イベントの運営について
2) キッズフェスティバルについて
3) 報告事項

第18回 定例会議
日時：6月8日（木） 12：10～13：00
場所：まちの相談室 出席者：計6名

1) キッズフェスティバルについて
2) いい笑顔で賞の今後について
3) COC+子育て高齢化対策領域シンポジウム
学生企画情報交換会について

第19回 定例会議
日時：6月12日（月） 12：10～13：00
場所：まちの相談室 出席者：計6名
1) Gmailの対応について
2) キッズフェスティバルについて
3) いい笑顔で賞の今後について

第20回 定例会議
日時：6月15日（木） 12：10～13：00
場所：まちの相談室 出席者：計7名
1) 新入生紹介
2) Gmailの対応について
3) キッズフェスティバルについて

第21回 定例会議
日時：6月19日（月） 12：10～13：00
場所：まちの相談室 出席者：計8名
1) Gmailの対応について
2) キッズフェスティバルについて

第22回 定例会議
日時：6月22日（木） 12：10～13：00
場所：まちの相談室 出席者：計6名
1) 夏休みの会議について
2) キッズフェスティバルについて

第23回 定例会議
日時：6月26日（月） 12：10～13：00
場所：まちの相談室 出席者：計7名
1) いい笑顔で賞について
2) キッズフェスティバルについて
3) 同窓会総会について

第24回 定例会議
日時：6月29日（木） 12：10～13：00
場所：まちの相談室 出席者：計7名
1) 夏休みの会議について
2) キッズフェスティバルについて
3) 同窓会総会について
4) 委員勧誘チラシについて

5) ボランティアの木について
第25回 定例会議
日時：7月3日(月) 12:10~13:00
場所：まちの相談室 出席者：計7名

- 1) ボランティアの木について
- 2) キッズフェスティバルについて
- 3) 報告事項

第26回 定例会議
日時：7月6日(月) 12:10~13:00
場所：まちの相談室 出席者：計6名

- 1) ボランティアの木について
- 2) キッズフェスティバルについて
- 3) まちづくり解剖学について

第27回 定例会議
日時：7月10日(月) 12:10~13:00
場所：まちの相談室 出席者：計7名

- 1) キッズフェスティバルについて

第28回 定例会議
日時：7月17日(木) 12:10~13:00
場所：まちの相談室 出席者：計7名

- 1) 夏休みの会議について
- 2) キッズフェスティバルについて
- 3) 事務連絡

第29回 定例会議
日時：7月17日(月) 12:00~13:00
場所：まちの相談室 出席者：計8名

- 1) まちの相談室対応について
- 2) キッズフェスティバルについて
- 3) 夏休みの会議について

第30回 定例会議
日時：8月8日(火) 10:00~16:00
場所：まちの相談室 出席者：計7名

- 1) キッズフェスティバルについて
- 2) まちの相談室について
- 3) Gmail 対応について
- 4) 事務連絡

第31回 定例会議
日時：8月9日(木) 10:00~16:00
場所：まちの相談室 出席者：計7名

- 1) キッズフェスティバルについて
- 2) まちの相談室について
- 3) Gmail 対応について
- 4) 事務連絡

第32回 定例会議
日時：8月23日(水) 10:00~16:00
場所：まちの相談室 出席者：計4名

- 1) キッズフェスティバルについて
- 2) イベントへの参加について
- 3) 学生会交流会について
- 4) つながるパラダイスについて

第33回 定例会議
日時：8月29日(火) 10:00~16:00
場所：まちの相談室 出席者：計4名

- 1) つながるパラダイスについて
- 2) COC ポータルにかかる視察への対応について
- 3) 地域連携推進機構 Newslwtter 掲載記事の修正について

第34回 定例会議
日時：9月7日(木) 10:00~17:00
場所：まちの相談室 出席者：計7名

- 1) つながるパラダイスについて
- 2) キッズフェスティバルについて

第35回 定例会議
日時：9月13日(水) 10:00~17:00
場所：まちの相談室 出席者：計7名

- 1) つながるパラダイスについて
- 2) キッズフェスティバルについて

第36回 定例会議
日時：9月14日(木) 10:00~17:00
場所：まちの相談室 出席者：計5名

- 1) 会議の進行について
- 2) つながるパラダイスについて
- 3) キッズフェスティバルについて
- 4) 尼芋奉納祭について

第37回 定例会議
日時：9月20日(水) 12:10~13:00
場所：まちの相談室 出席者：計5名

1) まちの相談室開室及び会議開催の日時について

2) 尼芋奉納祭について

3) キッズフェスティバルについて

4) 事務連絡

第38回 定例会議

日時：9月25日(月) 12:00~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計7名

1) 学生交流会について

2) キッズフェスティバルについて

第39回 定例会議

日時：9月27日(水) 12:00~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計7名

1) 尼芋奉納祭について

2) キッズフェスティバルについて

第40回 定例会議

日時：10月2日(月) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計7名

1) 尼芋奉納祭について

2) キッズフェスティバルについて

3) 水辺まつりについて

第41回 定例会議

日時：10月4日(水) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計7名

1) まちづくり解剖学について

2) 3大学合同報告会について

3) Gmail対応について

4) 尼芋奉納祭について

5) キッズフェスティバルについて

第42回 定例会議

日時：10月11日(水) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計7名

1) 尼芋奉納祭について

2) キッズフェスティバルについて

3) 水辺まつりについて

第43回 定例会議

日時：10月16日(月) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計7名

1) Gmail対応について

2) 3大学合同報告会について

3) 水辺まつりについて

4) キッズフェスティバルについて

5) 事務連絡

第44回 定例会議

日時：10月18日(水) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計7名

1) 議事録について

2) キッズフェスティバルについて

3) 尼芋奉納祭について

第45回 定例会議

日時：10月23日(月) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計3名

1) 尼芋奉納祭について

2) 「ボランティアの木に花を咲かせましょう」について

第46回 定例会議

日時：10月25日(水) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計5名

1) 経験値評価システムへの入力について

2) 大阪マラソンについて

3) キッズフェスティバルについて

第47回 定例会議

日時：10月30日(月) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計4名

1) 大阪マラソン説明会報告

2) やんちゃんこ主催イベントへの参加について

3) キッズフェスティバルについて

4) 尼芋奉納祭について

5) つながるパラダイスについて

第48回 定例会議

日時：11月1日(水) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計5名

1) 「ボランティアの木に花を咲かせましょう」について

2) つながるパラダイスについて

3) キッズフェスティバルについて

第49回 定例会議

日時：11月6日(月) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計5名

- 1) 「ボランティアの木に花を咲かせましょう」について
- 2) つながるパラダイスについて
- 3) キッズフェスティバルについて

第50回 定例会議

日時：11月8日(水) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計5名

- 1) つな Girl ブログについて
- 2) つながるパラダイスについて
- 3) キッズフェスティバルの参加者等集計について

第51回 定例会議

日時：11月13日(月) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計5名

- 1) やんちゃんこ主催イベントへの参加について
- 2) つながるパラダイスについて
- 3) 「ボランティアの木に花を咲かせましょう」について
- 4) 事務連絡

第52回 定例会議

日時：11月15日(水) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計4名

- 1) つな Girl ブログについて
- 2) つながるパラダイス3について
- 3) Gメール対応について
- 4) FD委員会への参加について

第53回 定例会議

日時：11月20日(月) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計4名

- 1) まちづくり解剖学について
- 2) FD委員会からの連絡事項
- 3) 「ボランティアの木に花を咲かせましょう」について
- 4) つながるパラダイス3について

第54回 定例会議

日時：11月22日(水) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計5名

- 1) 議事録について

2) プラス学生会-朝のおそうじ会-について

- 3) 「ボランティアの木に花を咲かせましょう」について
- 4) つながるパラダイス3について
- 5) キッズフェスティバルの経費について

第55回 定例会議

日時：11月27日(月) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計5名

- 1) 学長賞について
- 2) 大阪マラソンボランティア報告
- 3) 「ボランティアの木に花を咲かせましょう」について
- 4) つながるパラダイス3について

第56回 定例会議

日時：11月29日(水) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計5名

- 1) 「ボランティアの木に花を咲かせましょう」集計作業
- 2) つながるパラダイス3について
- 3) 事務連絡

第57回 定例会議

日時：12月4日(月) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計4名

- 1) 12月、1月の会議について
- 2) つながるパラダイス3について
- 3) 「ボランティアの木に花を咲かせましょう」について

第59回 定例会議

日時：12月13日(水) 12:15~12:55

場所：まちの相談室 出席者：計5名

- 1) つながるパラダイス3について
- 2) 事務連絡について

第60回 定例会議

日時：12月18日(月) 12:10~13:00

場所：まちの相談室 出席者：計5名

- 1) つながるパラダイス3について
- 2) Gmail対応について
- 3) 事務連絡

第61回定例会議

日時：1月10日（水） 12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計5名

- 1) つながるパラダイス3について
- 2) クラブ冊子について
- 3) Facebookについて

第62回定例会議

日時：1月15日（月） 12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計5名

- 1) つながるパラダイス3について
- 2) 来年度委員長の選出について

第62回定例会議

日時：1月17日（水） 12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計3名

- 1) つながるパラダイス3について
- 2) 来年度委員長の選出について
- 3) 学生会4回生お別れ会について

第63回定例会議

日時：1月22日（月） 12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計4名

- 1) 学生課からの伝達事項
- 2) 学生会お別れ会について
- 3) つながるパラダイス3について

第64回定例会議

日時：2月8日（木） 8：30～17：00

場所：まちの相談室 出席者：計3名

- 1) つながるパラダイス3の下見・準備

第65回定例会議

日時：3月14日（金） 10：00～16：00

場所：まちの相談室 出席者：計2名

- 1) 次年度委員長の選出について

第66回定例会議

日時：3月16日（金） 10：00～16：00

場所：まちの相談室 出席者：計2名

- 1) 昨年度振り返りについて

第67回定例会議

日時：3月19日（月） 10：00～16：00

場所：まちの相談室 出席者：計2名

- 1) 今年度の目標について

第68回定例会議

日時：3月20日（火） 10：00～16：00

場所：まちの相談室 出席者：計2名

- 1) 学生会総会について

つながり交流祭

2017年12月16日(土)、武庫川女子大学にて第8回阪神つながり交流祭2017が開催されました。この事業は、阪神まち大学が主催し、阪神南地域を対象とする大学・短大の学生が地域団体や事業者、商店街等と連携して実施する地域づくり活動や商店街活性化活動の促進を目指すものです。今年度は武庫川女子大学甲子園会館において、大学生、地域活動団体、NPOなどが集まり、本学からは児童教育学科三年生、短期大学部幼児教育学科二年生、人間看護学科四年生、二年生が参加しました。

まず武庫川女子大学音楽学部「浜甲カンタービレ」によるウェルカムコンサートがあり、その後、大学生や地域連携団体による活動報告がありました。今年度の活動報告は以下のとおりです。

1. 阪神まち大学・イベントプロデュースコース「阪神つながり交流祭について」
2. 関西学院大学社会学部大岡ゼミからは「鳴尾東で発見！母親たちの「あったらいいな」」
3. 園田学園女子大学尼崎プロジェクト「そのだ子育てステーションぴよぴよの取り組み」
4. 園田学園女子大学人間健康学部人間看護学科「地域で自分らしく暮らすための高齢者地域支援プロジェクト」
5. 武庫川女子大学住環境・地域デザイン研究室「またあしたプロジェクト」
6. 阪神まち大学・日本酒ものづくりコース「酒造り体験・蔵開きの企画」
7. 阪神まち大学・まちづくりプロジェクトコース「元気な自治会計画」
8. 関西学院大学大熊研究室「「ひ・み・つ」

アート企画、ほんわか walker 商店街活性化事業」

9. 阪神まち大学・商店街プロジェクトコース「ご当地アイドルオーディションの開催」

本学児童教育学科・幼児教育学科の合同チームは「尼崎プロジェクト」の一環として、大学構内に設置された「そのだ子育てステーション ぴよぴよ広場」と「ぴよぴよまつり」の取り組み、そこで得られた学びについて報告を行いました。学生たちは実際に子どもや保護者と身近に接することで、保育中の配慮や安心・安全の大切さについて学んだと述べていました。

人間看護学科坂元ゼミの四年生、二年生の学生は昨年から引き続き①在宅で暮らす認知症高齢者に合った個別支援による地域生活維持や活性化、②地域高齢者の健康増進支援及び認知症予防支援を目的としたボランティア活動について、報告しました。

学生による活動報告のあと、各大学・団体のブースセッションが行われ、参加者は活動報告で興味を持った発表団体に直接質問し、さらに詳しい内容を聞いていました。

休憩をはさみ、テーマ別ディスカッションでは①自治会・地域コミュニティ、②商店街、③地場産業・地元の産業の3つのテーマに分かれ、各テーマについて阪神地域が抱えている問題や現状をふまえた議論が行われました。各テーマで地域の課題や若者が活躍するためにどうすればよいかが話し合われました。

閉会式のあと交流会が行われ、第8回阪神つながり交流祭が終了しました。

「尼崎プロジェクト」0歳～100歳が共に生きるくのびのびタウン
 そのだ子育てステーション「ぴよぴよ」の取り組み

—「ぴよぴよ広場」「ぴよぴよまつり」を通して—

2017年12月16日(土) 阪神つながり交流祭



園田学園女子大学人間教育学部児童教育学科	代谷 真梨
	森田 菜月
園田学園女子大学短期大学部幼児教育学科	大前 優奈
	足立 菜奈

発表の流れ

- 1 そのだ子育てステーション「ぴよぴよ」とは
- 2 「ぴよぴよ広場」に参加して
- 3 「ぴよぴよまつり」を行って
- 4 そのだ子育てステーションで学んだこと



2

そのだ子育てステーション「ぴよぴよ」とは



大学の地域貢献

学生の学び



3

「ぴよぴよ」の特徴



触って、触って遊びます

わあ～！
楽しそう！！

2階建てのおうちみたい



「ぴよぴよ広場」とは

- 対象：地域の0～3歳児の親子
- 開催日：毎週、火・金(2日間)
- 開催時間：10:40～12:10(4月11日より)

たくさん来て
くださって
うれしい
なあ！

11月末現在 登録者数：196名
 延利用者数：1831名



5

「わあい！わあい！ぴよぴよまつり」



わあー！
人がいっぱい！！



6

3つの学び

- 保護者とのかわり
- 保育中の配慮：特にけがをしないために
- 保育前後の配慮：準備・掃除など



ご清聴ありがとうございました！！

バイバイ



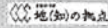
ありがとうございます



8

楽しく街発見

2017年度 大学の社会貢献 9班
 食物栄養学科 大浦えりか 田井中七瀬
 総合健康学科 川崎紗葉
 生活文化学科 奥野莉奈 辻本静花 藤見愛



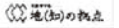
尼崎市では

今！こんな事で困っています！



- 公共施設の老朽化
- 公園で遊ぶ子どもが少ない
- 子どもの肥満
- 子どもと大人の関わり、ご近所付き合い

これらのことを踏まえて、私たちは **森公園周辺** を歩きました。

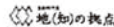


森公園周辺のお困りごと

- 公園の入り口道路に面しているから危ない
- 街頭がないところがある
- 歩道が狭いところがある
- カーブミラーがないところがある



そこで私たちが解決するために考えたイベントは

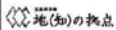


あまスタ ~あなたの街のスタンプラリー~

まず、事前学習として・・・

- 子供と一緒に街を歩いてクイズを作る(グループに分かれる)
 例)この町の街灯は何個?
 この道に信号・横断歩道はあるのか?
 ☆このときにどうすれば危険じゃないか考える。
 例)街灯が少ない→どうすれば危なくなく掃れるか。

- 保護者に対する招待状カードを作る。
 (○月○日にこのゲームをするから来てね)



ゲーム当日



いくつかのグループにわかれて町を散策する
 この時、各グループにクイズカード&地図を渡す
 (大学生1人、子供5人、大人3~4人)

答えのある所に大学生がいる。正解したら○スタンプ、間違えたら×スタンプ
 答え合わせの時に解決策を言う。賞品は押し花、しおりなど

ゴールは森公園

開催日:夏休みの土・日
 場所:森公園周辺



期待する効果



- ・子供に街についての理解を深めてもらう
- ・大人と子供の会話の機会が増える
- ・子供の外出が増える
- ・賞品や参加賞を押し花しおりや花の種にすると緑化が進む



課題の解決に必要なこと

- ・虐待を断ち切るためには、
家族以外の人から大きなサポートをしてもらう
- ・治安・マナーを良くする為に
駅前などに警察の巡回を行う
- ・地域のスポーツクラブを盛んにする
- ・専門家による指導

地(初)の拠点

課題の解決に必要な子どもの居場所

- ・スポーツができる場所
- ・ご飯が食べれる場所
- ・なんでも話せる場所
- ・安全な場所
- ・リラックスして過ごせる場所

地(初)の拠点

子どもの居場所づくりの具体案

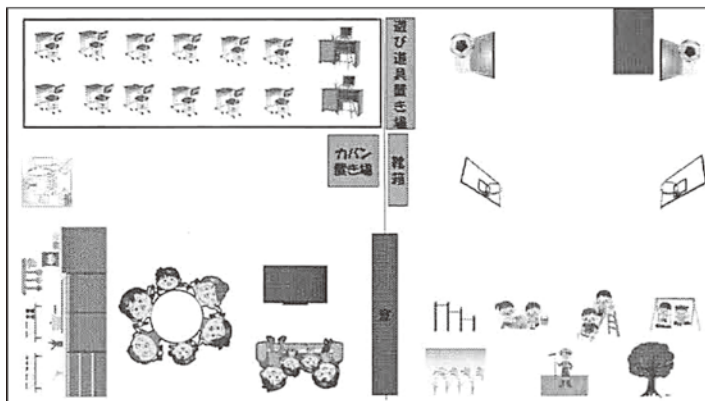
- ・オフィス街の一角
- ・西宮北口みたいな街
- ・一軒家が多い街
- ・共働きの家族世帯が多い街
- ・ショッピングモールが近くにある
- ・駅から近くて迷わずいける場所
- ・広くて運動ができるスペースがある

地(初)の拠点

子どもの居場所をつくるために必要なこと

- ・屋内・屋外どちらもある
- ・資金集め(人件費も含め)
- ・便利な場所(仕事→子どもの迎え→買い物ができる)
- ・キッチンが設備してある
- ・栄養士、保育士(子どもが好きな人、第一印象が良い人、聞き上手な人、勉強・スポーツが教えられる人)
- ・畑を耕す場所
- ・おもちゃ・遊具の設備

地(初)の拠点



提案を実施した時のメリット

- ・友達が増える(年齢問わず)
- ・親が気にせず働ける
- ・肥満が減る
- ・運動不足が減る
- ・自然と触れ合える
- ・便利な場所なため子どもが集まる
- ・みんなで楽しくご飯が食べれる

地(初)の拠点

フォーラム



COC+子育て高齢化領域 3大学合同報告会 2017.10.14



COC 最終報告会 2018.02.10

稲村和美・尼崎市長、原田規梭子・東洋学園大学学長と Tublok を見学

地域歴史遺産としての「営みの記憶」—災害復興の現場から—

2017年7月22日（土）、園田学園女子大学222教室において、シンポジウム「地域歴史遺産としての「営みの記憶」—災害復興の現場から—」が開催された。これは大学COC+事業「歴史と文化」領域の一環として、地域にくらすひとびとの「営みの記憶」を見つめなおし、持続可能な地域社会システムを構築していくという趣旨で企画された。

まず、COC+事業の主幹校である神戸大学の奥村弘氏（神戸大学地域連携推進室室長）による挨拶があり、続いて本学の大江篤氏（人間教育学部児童教育学科教授）によるシンポジウム趣旨の説明が行われた。大江氏は、過疎化・少子高齢化が進行し生活様式が急激に変化していくなかで、地域で営まれた「人の暮らし」が消滅していく危機を指摘した。そのうえで、阪神淡路大震災や東日本大震災などの被災地で、復興を起点として地域の「営みの記憶」を継承する試みがなされていることを述べ、地域社会の継承に歴史遺産が果たす役割を考えたいとした。

一人目の報告者、俵木悟氏（成城大学文芸学部文化史学科准教授）からは、「失ったものからの発見と創造：災害復興に民俗調査を通して携わった経験から」として、東日本大震災被災地である岩手県大船渡市末崎町碁石地区における報告があった。俵木氏は、民俗学の方法が震災復興に寄与しうるかどうか、実践を通して考えるため、被災地での聞き書きと古写真の収集を主とする『ごいし民俗誌』プロジェクトのメンバーとして活動した。そのなかで、伝統的な祭礼や獅子舞踊りなどの民俗行事を、昔のまま伝承するだけでなく、新しく再生していく営みが重要と考えるようになったという。

二人目の報告者、松下正和氏（神戸大学地域連携室特命准教授）からは、「大規模自然災害時における被災歴史資料保全活動の現状と課題」として、2009年に歴史資料ネットワークの試みについて報告があった。歴史資料ネットワークは、阪神淡路大震災の経験から発足し、全国の地震や風水害の被災地で旧家の古文書や自治会文書、民具、古写真などを保全する活動を行っている。そして、歴史資料を地域の人々をふくめた社会で保全していくことにより、土地の記憶を継承、活用することで災害復興やまちづくりを行うという提言があった。

三人目の報告者、上相英之氏（国文学研究資料館客員研究員・本学非常勤講師）は、「野に刻まれた災害の記憶：石造遺物の果たす役割について」として報告があった。石碑や墓石のような石造遺物は、立地する場所に意味があり、記録された情報を読み解くことで地域の歴史的な生活を知る手がかりになると指摘された。そして、災害が起こった時代や被害の規模を記録した石造遺物の調査を行った、具体的な事例や方法などが報告された。

ディスカッションでは、地域に眠る歴史遺産の保全だけでなく、地域社会のなかで位置づけや、次の世代に継承していく重要性が改めて様々な観点から論じられ、それぞれの具体的な経験や事例が紹介されるとともに議論が深まった。

（地域連携推進機構 TA 久留島元）

平成 29 年度 神戸大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学
3 大学合同報告会プラットフォーム報告

2017 年 10 月 14 日（土）、生田文化会館大ホール（神戸市）において、地（知）の拠点大学による地方創生推進事業 COC+「子育て高齢化対策」領域 3 大学合同報告会が開催された。昨年に続き、神戸大学を主幹校とする地域創生推進事業の一環として、医療福祉専門職養成課程を有する県下の 3 大学が教育研究の成果・知見の共有を図るため企画されたものである。

第一部では、石原逸子氏（神戸市看護大学基礎看護学領域教授）、中野博文氏（本学人間健康学部長）による開会挨拶があり、中野氏からは園田学園女子大学による地域連携活動の歴史が語られた。

続いて本事業の概要説明として、藤本由香里氏（神戸大学地域連携推進室特命助教）より「知っていますか？兵庫県～地域創生って何だろう～」兵庫県の直面する少子高齢化、人口減少などの課題が指摘された。

第二部では、相原洋子氏（神戸市看護大学准教授）、宮田さおり氏（本学准教授）の司会により学生発表「専門職学生として地域活動で学んだこと」が行われ、各大学の学生から以下の報告があった。

神戸市看護大学看護ゼミ 4 年生「地域活動で学んだこと」、「地域活動での学びを実習でどう活かしたか」

本学人間健康学部食物栄養学科 2 年生「食育 SAT システムを用いたライフステージ別地域住民に対する適切な食事選択の構築指導について」

本学人間健康学部人間看護学科 4 年生「母子保健における保健師の役割～様々な職種がいる中でなぜ保健師が必要なのか～」

神戸大学医学部保健学科作業療法学専攻 2 年生「Activity Area Of Occupational Therapist」

神戸大学大学院生松田直佳氏（保健学研究科博士前期課程）「産後女性に対する取り組み～産後のマイナートラブルについて～」

それぞれの体験をもとに、専門性を学ぶ大切さや、他職種連携の重要性を実感したことが報告された。質疑応答では地域活動で直面した具体的な課題などが話し合われた。

ポスター掲示をもとにした情報交換会でも、異なる領域を学ぶ学生同士が熱心に議論を交わっていた。

閉会挨拶では高田哲氏（神戸大学地域連携センター長）が、子育て支援や高齢化対策への各大学の取り組みに期待を述べられ、報告会は終了した。

（地域連携推進機構）

基調報告

『〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム』の成果と課題

大江篤（本学地域連携推進機構副機構長）

大江 副機構長の大江でございます。お手元の袋の中に入っております『〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値プログラム』というパンフレットに従いまして、5年間本学が取り組んでまいりましたCOC事業、まだスタートしたところのものもありますが、成果と課題について30分程度でお話をさせていただきたいと思っております。

まず、表紙の真ん中あたりの所なんですけれど、先ほど文科科学省の庄司様からご紹介いただきましたように、平成28年度の間評価でSの評価をいただきました。七つのS大学の中で、私立の大学は本学のみでございます。その中で文科省の専門委員の先生がたにお書きいただいた中で、地域との関係構築が教育に的確に反映されていることであるとか、専門職養成系の大学の特質を強化していくにあたってCOC事業が確実に位置づけられていることであるとか、後ほど述べます経験値評価システムについての具現化というところでご評価いただいたというところでございます。

まず、1ページめくっていただきまして、「社会貢献」というページが見開き右側のページでございます。まちの相談室というのを設けました。後ほど、この成果につきましては具体的に、1階のラーニングcommonsで動画や画像をパネルでご紹介しておりますので、20分の休憩でご覧いただければと思います。これまで、ともすれば大学、各学部学科の教員でありますとか、各部署がそれぞれで地域の方の悩みを受け止めてき

たところを、一元化するということがこのCOC事業でできたのではないかと考えています。

今、司会をしてくれております通称「つなガール」（学生地域連携推進委員会）の学生が主に運営をしております、空き時間の昼休みに週2回開設をし、その都度ご予約いただいて、いろんな投げかけをしていただいて、それを学内に発信していくというようなところです。件数は、パンフレットに各年度の件数を挙げておりますが、本当にひっきりなしという状況でございます。それから、その下にイベント記録と書いていますが、実はつなGirlはたった一人で始まりました。現在は14名の学生が、学生同士、それから学生と地域をつなぐ役割ということで、きょうも2名の学生が司会受付等手伝ってくれております。所属学部も学科も学年もまちまちでございます。短大生もおりまして、それぞれの学業が忙しい中、週2回お昼休みに会議を重ねて、取り組んできています。

もう一点だけ、ここに書いてないことで申し上げますと、この間、毎月1回、尼崎市、それから尼崎商工会議所、尼崎市社会福祉協議会、この3者の連携先のご担当の方に夕方、来ていただきまして、本学の各学部学科の代表の地域連携推進運営委員の先生がたと、統括会議として月に1回、顔を合わせていろんな情報交換をしながら進めてまいりました。以上が、このCOC事業の中での連携事業ということになっていこうかと思っております。

1枚めくっていただきまして、見開き、「教育」という部分でございます。本学の教育の理念は「経験値教育により、他者と支え合う人間の育成」です。経験値教育のプログラムを構築することがこのCOC事業

の大きな目的、目標でございました。まず階段状に人が上っていったる図をご覧いただきたいんですが、左下のカリキュラムの図にあるように、まず学部学科を横断した学びをつくっていく。これについては当初からコンセプトといたしました。地域の課題は特定の専門職だけで解決できるわけではない。看護師、管理栄養士、保育士、学校の教員それぞれの専門職が、多職種連携をすることが求められています。そのことを、学内で地域に出て学んでいくということを考えてカリキュラムを編成しました。

短期大学部まで含めて、「生命を考える」「大学の社会貢献」それから「女性と社会」というこの三つの科目が、本学の全学共通の基幹科目ということになります。その中でのCOC科目が「大学の社会貢献」という科目で、1年生の配当で半期15回、選択の科目で、前期後期に開講されています。尼崎市のそれぞれの部署から、まず「尼崎を知る」という講義をしていただいて、さまざまな市の課題の説明をしていただきます。平成26年度から29年度までのテーマが挙がっているんですが、あるときには企業に来ていただいたりとか、あるときは公民館であったり、一番、直近は子ども食堂をテーマにしたりという、それぞれのテーマでボランティア体験をしながら企画を立てていくという半期の科目というのを置いてまいりました。

選択科目ですので人数に幅があって、その都度テーマも市のほうにお願いしてご相談させていただきながら取り組んでまいりました。この科目につきましては、平成30年4月からはこの科目を必修科目にいたします。半期必修科目にいたしまして、大学4学科、短大は選択科目なんですけども、全ての学生に15回、今までは演習形式で行っ

ていたんですが、4月からは講義の形でしっかりと、まず「尼崎を知る」、まちを知ること、それから地域の課題と向き合うためのさまざまな理論的な背景を4名の教員が担当して、市のほうからも授業に来ていただきながらすすめていきます。フィールドに出て企画をするというよりは、講義中心の、地域志向科目の基礎になるような科目にしていこうと考えているところです。

ただ、全く大学に入ってきて、この地域で何も地域の活動をしないということではなく、ボランティア活動を推奨いたしまして、地域に出ていくという、基礎的な科目をまず1年生の段階で全員に学ばせる科目として発展的に開講しようと思っております。

地域志向のCOCの科目ではないんですが、初年次教育の中では、これもモデルケースを今つくっているんですけども、学生が、どうしても地域に出るのに、違う世代の人とお話をするのがおっくうであるとか、コミュニケーションが苦手だという学生も多いですので、コミュニケーション能力を付けるために、松竹芸能で開発されている「笑育」というプログラムも導入しながら、初年次教育も含めて1年生の段階で、2年生で地域に出るための基礎的学習と考えております。

右側のページですが、これが先ほどからお話しいただいている、つながりプロジェクトという必修科目でございます。経年上は2年生の必修科目で、資料にあがっている21のテーマは平成29年度でございます。28年度も同様に21プロジェクト、16名から18名の学生が、2年生全員が必修で履修しました。クラス編成は学部横断になります。4学科の学生がばらばらで、初めて出会った学生たちがチームビルディングをして

1年間、取り組んでいくという科目です。恐らくCOC大学の中でも地域志向科目を必修にしているところというのは少ないのではないかと思います。ご担当いただいた先生がたにもご負担をおかけしましたし、地域の方にもご迷惑をかけながら、まず担当教員自体がどういう授業設計をしたらいいのか、地域の方と一緒にどういうプロジェクト設計をしたらいいのかを模索しながら、学科もばらばらで、実習期間に出る学科があったりしながら、学生のスケジュール等の調整をして右往左往しながらこの2年間を過ごしてきました。

この地域志向の2科目については、第1回目に学長からお話があり、私が説明をするんですが、その中で、「とにかく尼崎で本気の大人に出会う経験をしましょう」「気持ちのスイッチをどこでもいから入るという体験を1年間ですべてください」ということを学生に伝えています。ただ、正直、必修科目です。全ての学生がモチベーションを高く持って地域に出て行っているわけではございません。学生の言葉として「なぜ住んでもいない尼崎のことを1年間も考えないといけないんだ」ということを言っています。それから、「自分が将来、目指す国家資格と今この学びが無駄ではないか、全く関係ないんじゃないか」ということを学生たちは疑問に思っています。「そもそも地域の知らない人と接すること自体がめんどくさいし、おっくうなんだ」と。

で、なかなかそれが1年たってどう変わるってところまでは難しいところではあるんですけど、将来、必ず役に立つ、「あのときあの経験したから今の自分がある」といえるような自分になりましょうねということを書いて、それぞれの先生がたにもご苦勞をしていただきながら進めてきた2

年間というところがございます。当然、持っていていただいている先生がたにとりましても非常に負担が大きい科目です。マスで講義をしたり、ゼミの気心知れたゼミ生だけを地域に出すのに比べると非常に厳しい科目だったと思います。調整がつかない学生も多く、さまざまなことをそれぞれの学科の学生が言ってきました。また、地域の方にする、大学とうまく連絡が通じない。地域連携推進機構でもTAを抱えているんですけども、なかなかそこがうまくいかないという課題満積の状態です。2年間を過ごしてまいりました。

このつながりプロジェクトは、通年科目でもう1年、平成30年度は22のプロジェクトが立ち上がります。中身が若干、変わっています。それからCOCが終了ということもございまして、少しエリアを広げまして豊中市、西宮市、伊丹市、それから、本学が但馬にキャンパスを持っていますので香美町、豊岡市という所、香美町の限界集落の所のご家庭に民泊をさせていただいてという合宿形式のプロジェクトも計画をしております。そういう新たな展開も見せながらより充実させていこうと考えているところがございます。それから平成31年度になるんですけど、先ほどの大学の社会貢献を必修にいたしまして1年生の半期の講義でしっかりと地域課題に向き合って、「つながりプロジェクト」を半期の科目にして、実践活動をやっていくという変更をかけたところでございます。

もう一点、こういった科目の難しいところではあるんですが、もう一度、左側のページをご覧ください、経験値というのを実質化させていくということをやっています。スマートフォン、パソコンで使える「経験値評価システム」というシステ

ムを COC 補助金で構築いたしました。その右の図の中の歯車の両サイドなのですが、アセスメントとつながり評価という形で学生が地域にボランティアに出たら、ボランティア出たことを全てスマートフォンで記録化をいたします。それを相手の地域の方のスマートフォンで QR コードを読んでいただくと、『自ら学ぶ、気付く、考え抜く、コミュニケーションを取る、協働する』という五つのベンチマークについて 5 点満点で評価をしていただくという、そのときの振り返りができるような評価のシステムを付けております。

当初は、ボランティア来てくれて、頑張ってくれてよかったねという評価が多かったんですが、非常に厳しく学生を見守っていただいている評価もございまして、下の 1 階の展示でいくつかサンプル、そういった地域からいただいている温かいお言葉なんかも紹介しております。この経験値が、知識と知恵、その知識を知恵に変える力というこの三つの力を経験値と考えております。当然、学力の 3 要素であります知識、技能というのが知識に当たりまして、思考力、表現力、判断力というのが知恵、それを主体性、対応性、協働性でもって知識を知恵に変えていくということ。この 5 年間でできたところというのは、この五つのベンチマークについて目指す人材像ということでルーブリック評価を作り込むところまでできました。

ただ、まだなかなかこれを学生たちに可視化して示すとか、大学として統計分析をかけて質の向上を図っていくという「学習成果の可視化」の部分についてはまだまだ発展途上と申しますか、手を付けたばかりというところになります。

それぞれのプロジェクトの具体的な内容、

それから大学の社会貢献の成果報告書でありますとか、こういったものについて具体的な内容は全て 1 階のフロアで、つながりプロジェクトの動画映像とか、写真のスライドショーなんかも置いておりますので、お話を聞いていただくより見ていただいたほうがいいのかと思いますので、ぜひともご覧いただければと思っております。

次のページですが、地域志向教育研究所でございます。午前中、10 人の先生がたにそれぞれ地域志向教育研究の今年度の、それから 5 年間の報告をしていただきました。私も含めてこれまで尼崎をフィールドに研究を十分できていたかというところでもなかった教員も多かったんですけども、この COC 事業の中で、それぞれマッチングをかける形での先生がたの研究の領域の中で、特に市内の小学校、中学校、高等学校でありますとか、自治会、公民館というところをフィールドにご協力いただいて、研究が進展をしていったというところでございます。

5 年間継続的にご研究いただいた先生がたもございまして、単年度であったり 2 年間もであったり、延べ 15 件の研究テーマということで、このそれぞれの中には代表教員の名前しか書いてありませんけれども、そういう意味では学生たちがつながりプロジェクトで学部学科間、専門領域の横断を取るというのと同様に、先生がたも他学科の先生がたと一緒になって共同で研究をしていく機会もつくることのできたと思っております。

今回 COC というのは大学が採択を受けているんですけど、当初、採択いただいた時点でもそうだったんですが、短期大学部への波及効果ということで、きょうも短大の先生にもご発表もいただきましたし、研

究協力者という形で短期大学の先生がたも研究に加わっていただいで進めてまいりました。それぞれの成果については年報や、本日の発表会でご紹介をしたり、各講座でありますとか、民間の講座なんかでも広めていきました。

午前中のご質問の回答で少しお話をしたんですが、この研究の継続につきましては、COC の補助金が終わった後は、次のように継続していく予定です。学内に共同研究という研究助成の制度がございます。現状は各教員の専任教員各 2 名以上で取り組む共同研究で、自由公募の形をとっているんですけども、この共同研究の中に平成 30 年度から地域志向研究という部門も設けて、現在、公募をかけているところでございます。補助期間が終わったら終わってしまうとか、学生が卒業したら終わってしまうのではなくて、地域のかたがたにとっては、このまちが生活の空間であり、そこに住み続けて、そこでより良い暮らしを求めているということへの研究でのサポートということにもなっておりますので、継続できるものは継続していったということで地域密着型の研究推進というの、大学の意思表示として地域志向研究を進めてまいりたいと思っております。

ただし、COC の場合は地域志向教育研究となっておりますので、つながりプロジェクトという学生の教育の改革プログラムに資する部分が重点的に置かれていたというところがあるんですが、今後については研究の部分は学術研究をベースに置いた形の研究を展開していただくといいところがございます。

その右側の部分なんですけど、この間、先ほどの月 2 回の行政であったり会議所に来ていただく会議と、もう一つ「まちづくり

解剖学」という短い、1 時間半ほどの交流会、勉強会を開催してまいりました。時には学生が発表し、地域の方にお話をし、私が地域の方にインタビューさせていただいたりということで、学外でのプラン、コンペなんかで発表する前の練習を学生がするような場面であったり、いろんな形でその都度のテーマでいろんなかたがたに来ていただいているというところです。ほぼ 2 カ月に 1 回、毎回開催をして、3 月は東日本 3.11 に合わせて防災をテーマにということで、今回は防災食をテーマにした内容で 3 月に開催をする、それが今年度の最終回ということにしております。

この中でいろんな出来事がありました。地域のかたがたと学生が教員や職員を間に介さずにマッチングをして、地域に出ていって活動してくれるケースがあったりとか。たまたまそこで学生の話聞いて私の所でもこんなことっていう出会いがあったりとか。新たな活動につながっていくような内容というのが研究であったり、教育であったり、学生の活動であったりということの芽がここで芽生えてきたというところかと思えます。

ただ、いかんせん夕方からの時間帯ですので、大学の発信力も弱くて市民の方もあまり人数的にたくさん集まっていたというところがございます。そういったところも大きな課題ではないかと思っております。

一番後ろのページですが、この COC 事業地域連携というものについてこの 5 年間、そこに挙がっています地域連携推進機構という部署が担当をして取り扱ってまいりました。COC 事業を申請するにあたって、地域連携事業、それから教育改革を全体に、見ていくということで機構長は学長が務める

という形で、学長のリーダーシップの下でこの地域連携 COC 事業を 5 年間検証してまいりました。

この春から 5 年間でベースができたということで新たな体制で地域連携を広く捉えまして、社会連携推進センターが立ち上がります。社会連携推進センターというのは地域連携事業、これまでの COC 事業の継承に、プラス研究支援、それから生涯学習というこの三つの機能を併せ持ったセンターということで発展的に、大学 COC を強化したセンターをつくって、社会貢献を考えていくという組織立てで進めてまいります。先ほどのつながりプロジェクトであるとか、それから大学の社会貢献という科目については、教学ですので本学の授業等を管轄してまず教学支援部のほうと連携をしながら進めていくということでございます。

この 5 年間ということなんですが、まず 5 年間の間に本学の教育理念それから大学使命、ミッションであります女性、地域、実学という三つのキーワードに沿いました教育、研究、社会貢献というこの三つの基盤づく、ベースになる地域連携教育の基盤づくりを行うことができたのではないかと考えております。

平成 25 年に COC に申請を上げるときに、まずこの学園の歴史、当然、この学園が 80 年前にできるときに地域の女子教育が行われないというところで、高等女学校ができて始まったわけですが、特に本事業の起点に置いたのが 1990 年、平成 2 年に構想が打ち立てられましたキャンパスシティー塚口構想でございまして、正門の北側において阪急塚口駅から大学まで、この塚口のまち全体がこの大学のキャンパスであるという構想です。ちょうど平成の年号の時代、その 30 年間、地域に開かれて、地域と共に歩

んできた。そういった本学の地域連携事業の礎となる新たな展開への基盤づくり、基礎づくりの礎となる取り組みがこの 5 年間で構築できたのではないかと考えております。

COC 事業のタイトルが『〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム』ということで、つなぐ、つながるということをキーワードにしてまいりました。学生同士も学内で縦割りの学科ではなくて横に学年も越えて縦横斜めにつながっていく。つなガールの学生たちは地域とそれから先生がた職員、他大学と学生をつないでいってくれている。当然、学生と教員も、学科の中での 1 対 1 の関係ではなくて、他学科の学生の面倒も見ていくことで、さまざまなつながりができていく。職員も同様に学生と、小さな大学ですので親しい関係の中で関わっていく。で、学生や教職員と地域のかたがたがつながっていく。大学生が地域にあふれることによって今度は地域のかたがた同士が思わない所で、今まで一緒にならなかった人たちが一緒になっていくというふうな、人とつながっていく、街とつながっていくというプログラムというのは今後も推進していかなければならないと思っているところでございます。

私個人もこの 5 年間の中で、この COC を主管させていただく中で、恐らくこういった事業に取り組まなければ出会うことがなかったさまざまな方と、もともとが学問領域が民俗学でフィールド科学をやっていますので、全国のいろんなかたがたと出会います。ただ、この尼崎市内でもつそれ以外の所でも実に多くの方を、恐らく一緒に研究することがない分野の先生がたもそうです。4 年間、私の授業を受けないであろう学生とも出会うことができました。それが大学

の目で見ますと本学を核に新たなつながりが生まれた、非常に刺激的な5年間の経過を過ごせたのではないかと考えております。

ただ、昨今いわれていますように非常に社会の変化が速いということ、それからAIであるとかITCであるとか多様化複雑化する社会の中で、将来に向けて本学がいつまでも本当の意味での地(知)の拠点、COC(センター・オブ・コミュニティ)ということで、拠点として尾崎の中、それからこのエリアの中でかけがえのない存在となっていくということを今後も、先ほど申しましたそれぞれのパートのところで事業の発展、推進ということで、一つも二つもステップアップして魅力ある大学づくりになっていけばと思っております。

甚だ早口でお話しをいたしましたけれども、5年間の成果につきましては、ぜひともこれから後の20分ほどしかないんですけども、1階の所での学生たちの取り組み、さまざまな形でブースで展示をしておりますのでご覧いただければと思います。簡単ではございますが、COC事業の成果と課題ということでお話をさせていただきました。どうもご清聴ありがとうございました。

シンポジウム

経験値教育と女性活躍

原田規梭子（東洋学園大学学長）

稲村和美（尼崎市市長）

川島明子（本学学長）

野呂千鶴子（本学人間看護学科教授/司会）

野呂 本学人間看護学科の野呂と申します。午前中の地域志向教育研究のなかでも、私もCOC事業はじまって以来5年間ずっと地域のほうで研究をさせていただきましたし、ずっと地域連携推進機構の委員として事業とともに歩むことができ、自分はとても成長したなと思います。今回、まとめという機会に、司会というかファシリテーターの役割を与えていただきましたので、これから皆さんのご協力のもとに進めていきたいと思ひます、よろしくお願ひします。

それでは「経験値教育と女性活躍」ということで進めていきたいと思ひますが、まず企画の意図について説明させていただきたいと思ひます。先ほど大江先生のほうからも話があったのですが、1990年のキャンパスシティ構想があつて、30年間、本学は地域に開かれた大学として取り組んできたという歴史的な流れを今回聞かせていただいたんですが、5年前に始まったCOC事業のなかでつなぐ、つながるというキーワードのなかで地域志向教育研究も、つながりプロジェクトという科目についても進めてきたのかなと思ひておられます。そういう中で尼崎市という地域とともに歩みながら、ソーシャルキャピタルの醸成というところまでも進むような、研究成果であつたり、つながりプロジェクトの科目評価というものができるようになつたりしてきたのかな、と思ひます。そのあたりのことなんですけれども、この5年間の取り組みがなかったとしても、本学はずっと尼崎とともに歩んできた

大学だったのかなと考えておられます。そのところから女子大学として女子学生を育て、卒業し、その人たちが社会に出て活躍し、というよい循環を生みながら、歩んできたなか、最大のパートナーであつた尼崎市とともにこの5年間、充実した地域連携というキーワードのもと、つなぐ、つながるというものができあがり、まちづくりというものに本学が本腰を入れて関わらせていただいたのかなと思ひています。本題の今回の『経験値教育と女性活躍』という部分なんですけれども、平成25年にこの事業が採択されてからこの5年間、女性を取り巻く背景というのは大きく変わってきたのかなというふうに思ひます。一億総活躍という言葉が、政府が打ち出してきましたし、いろんな意味で使われていますけれども、それとともに女性の職業生活における活躍の推進に関する法律が平成28年4月に施行されてきていました。その中でいろいろと女性が働くということについても今まで以上に変わってきた。今ここにいる私も含めて4人の女性たちというのはみんな同じように子育てを経験し、そしてそのままずっとキャリアを積んできたという女性たちなんですけれども、そういうふうな辺りから少し考えていきたいなつてというのがこのシンポジウムの企画になります。

ただ、女性活躍というとジェンダーの問題つていうのも出てくるように思ひますが、きょうはそれを言及していくのではなく、女性活躍というものを生み出す元の、学生たちを育てている実学の園田学園女子大学として、この大学つていうのはディプロマ・ポリシーのところにも明記しているんですけれども、そういう達成目標のところから考えていきながら女性としてどう生きるのか、生き抜くのか、そういうところを最大の焦点としながら本日は進めていきたいというふうにご考慮お

ります。

それでは、まず本日のシンポジストの先生がたをご紹介していきたいと思います。まず、尼崎市市長、稲村和美先生でございます。続きまして、東洋学園大学学長、原田規梭子先生でございます。最後に本学学長、川島明子でございます。

野呂 それでは進め方ですが、今からこの3人の先生がたにご自身のライフヒストリーといえますか、今まで歩んでこられたところから現在、未来へというふうな辺りで、まず女性活躍というキーワードの中での話を進めたいというふうに考えております。それではまず最初に尼崎市市長、稲村和美先生のほうから、今ご紹介したときに私さらっとお名前を言っただけなんですけれども、自己紹介をお願いしておりますので自己紹介も含め、ご提案をお願いできたらと思います。よろしく願いいたします。

稲村 改めまして尼崎市市長の稲村でございます。どうぞよろしく願いいたします。では座らせていただきまして。まず自己紹介をということなんですけれども、現在は尼崎市市長をさせていただいているわけですが、その前は兵庫県議会議員を7年半しております、その前は証券会社のOLです。なんでこの政治の道に入るようになったのかというきっかけが、まさに大学時代の原体験にさかのぼるということでございまして、きょうのこの経験値教育、COCの報告もいろいろな思いを持って聞かせていただきました。

実は、私、神戸大学の出身でございまして、神戸大学在学中に阪神淡路大震災が発生いたしました。私、自宅は奈良でございまして、片道2時間近くかけての遠距離通学をして、学生でしたので自宅におりまして、自分の所

はあまり被害はなかったんですが、大学は被災地の真ん中ということで交通機関も麻痺をしましたし、大学も避難所になり、長期の大学休校ということになったわけなんです。突然、大学も休みになってしまって、自分自身はテレビで普段、自分が通っている所が非常に大きな被害を受けているというのに衝撃を受けつつ、実はそのときの正直な気持ちとしては一度、被災地をこの目で見ておきたいというような気持ちもあって、被災地入りをしようと決めたというのが最初だったんです。

足りないといわれている物をリュックに詰めて被災地に行ってみますと長期でボランティア活動をする人はなかなか足りてないんだってことが分かって、そうすると大学が休校になった大学生でも少し何かできることがあるのかなということで、いったん家帰って。次からは泊まり込みで、ある小学校の避難所に行って、しばらく腰を落ち着けて活動させていただくということになりました。

まさにそこで私はいろいろな出会い、経験、学びをいただいたことなんですが、やはりライフラインも十分に復旧していない中で多くの人たちが避難所という特殊な状況で共同生活を送っていかないといけないということですので、運ばれてくる物資をどのように仕分けて配るのかっていうところから、トイレの掃除はどういうふうな当番で回すのか、いろんなボランティアの申し出があるのはどういうふうに受けたり、断ったりするのかっていうようなことを、毎晩、避難していらっしゃる方たちとボランティアと学校の先生たちが会議をしながら進めていくような、そんな状況でした。

そこで自分自身が思いもしない、自分はそんなつもりじゃなかったけれども被災者の方からはこんなふうを受け止められることがあるんだっていうような、いろいろな気付きや

経験ということもありました。無我夢中の活動でしたけれども、私たちのような学生ボランティアがたくさんそのとき避難所に来てまして、少しは力仕事中心にやれることがあるのかなってというような役割を得る手応えといますかね。そういったようなことも経験をさせていただきました。

そうこうしているうちに、だんだん被災地のフェーズが変わってきまして、学生ボランティアではどうすることもできない地域の課題ということが非常にたくさん見えてくるといいますか、顕在化をしていくわけなんですよ。そういった中でいくつか気づきがあったんですけど、一つは震災という特殊な状況で見える化された多くの問題は実は震災の前から地域にあった問題なんではないかっていうことですね。ですので、地域にある大学、そこに通う学生っていうのは、実はこの震災ということに限定せずにもっと地域と関わっていく必要性や、関わる意義っていうのがあるんじゃないかなっていう、これは一つ大きな、それまで実はなかなかやっぱり地域と学生ってつながっていないというのが実体だったと思うんですけども、そういう大きな一つのきっかけと学びをいただいたというふうに思っています。

あともう一つはさっき大江先生が報告に、本気の大人と出会ってほしいんだっていうようなお話ありましたけれども。私、幸いにそこで非常にいろんな専門性を発揮したり、いろいろな問題意識を持って主体的に活動される先輩世代の人たちとたくさん出会わせていただいて。自分にもできることがどんどん少なくなっていくって非常にもどかしい思いもたくさんしたんですけども、じゃあ自分が5年後、10年後、今こうやって活躍している先輩たちの年齢や立場になったときに何がしか役に立てるような、そんな状態になりたい

なというふうに思わせてくれるような人たちとの出会いというのに、やはり非常に恵まれたなというふうに思っています。役割を得た手応えと、でもそれが壁に当たったときに、じゃあもうちょっと自分ができることを増やしていきたいなっていうような、ある種の意欲というか、自分なりに学び続けていく力、いろんなことをやり続けていく力っていうようなものを得る、本当にそういう大きな原体験になりました。

そんな中でボランティアで手が届かんところはもっと政策的に、みんなが一生懸命、払ってきた税金でもっと上手にできるはずじゃないのかっていうふうに発想したことから、初めて税金の使い道に関心を持ち、誰がこれを決めているんだ、どうやったらそれを変えられるんだっていうふうに発想して、初めて政治というものに関心を持ったというのが私のキャリアにつながるんですけど、ちょっと今日は置いておいて。私はこの **Center of Community** ですね。この「地（知）の拠点事業」、そしてこの園田学園女子大学が取り組んでいらっしゃる経験値教育っていうのが非常に意義深いというふうに思いますのは、被災地で私がそうやって経験をした学びというのは非常に多くの犠牲の上にあった学びだったわけです。でも、そうではなくって、平常時なかなか見えにくいんだけど、実はそこにもたくさんの同じような学びの機会が本当はたくさんあって、そういったことをなるべく普段からやっていくということの大切さというのは私自身は非常に身をもって実感しております。

ですので今回5年の区切りで終わりにするのではなく、今後しっかりとこれを続けていこうというふうに尼崎市のほうにも呼びかけをしていただいたことを大変うれしく思っております。園田学園の皆さまには大変いつも

お世話になっているんですけれども、これからはぜひともよろしくお話をしたいというふうに思います。

女性の活躍ということが今日もう一つのテーマになっています。女性活躍っていうことに特段、特化した話ではないのかもしれませんが、やはり女性に限らずいろんな事情や条件を持った人たちが協働していく。ともに力を出し合ったり、補完関係になって力を発揮していくっていうときには評論家になってはいけません。

実践的な、現場での経験的な学びということの大きなこと、ポイントは自分が主体的に何事かをやり切るという経験だと思うんですよ。失敗も含めてですね。誰かに教えてもらったことを理解するだけではなく、自分自身がいろんな問題発見していく。大学受験までは私たち与えられた問題を一生懸命、解いていますので、そうじゃなくって、何が問題なのかっていうところからスタートをしていく学びですよ、経験値教育っていうのは。そういった中で自分が主体的になる。誰かのせいにはできない。誰かにやってもらおうじゃなくってっていうのをやっていく中で、いかに自分がやろうとしていることが相手に伝わるってのが難しいこととか。自分はそうは思っていないのに、こんなに誤解されることもあるんだとか、もしくは自分が見えていなかったいろんな人の事情が見えるような経験をすることができたりとか、そういったある種のセンスや経験っていうのが、やはりいろんな多様な自分とは違う力を持っている人、自分とは違う風景や物事の見方、価値観を持っている人たちとまさに一緒にやっていくってことの基礎力、基礎体力になると思うんですよ。

そういったことが、これから女性を含む多様な人たちが一緒に活躍できる組織であった

り、社会づくりの非常に大きなインフラになっていくんじゃないかな、そういう意味でもこういった経験値教育っていうのがこれからますます意味を持つんじゃないかなというふうに感じています。ひとまず、この辺りです。

野呂 稲村市長さん、どうもありがとうございます。もう多くのことを語っていただいたんですが、一つ一つ先生がたにお話いただいたところでまとめさせていただくのではなくって、皆さまの先生のほうからのご意見をいろいろいただきながら、ディスカッションを通じて皆さまと一体で考えていきたいと思っていますので、ちょっと先に進めさせていただきたいと思います。それでは次に東洋学園大学の原田学長様のほうにお願いしたいと思います。どうぞよろしくお話をいたします。

原田 皆さん、こんにちは。きょうはお招きいただきましてありがとうございます。先ほどからいろいろお話を伺って、大江先生のお話なども伺って、本当に私がいつも考えていることと同じなんですけれども、それを本当に学長のリーダーシップの元に大江先生がしっかりと具体化されているっていうことに敬意を表したいと思います。本当に素晴らしいプロジェクトだというふうに思っております。

自己紹介ということですがけれども、現在は東京ドームのすぐ側にある本郷にあります東洋学園大学って、きょう文科省からおいでいただきました方が住んでいらっしゃる流山という所にも、もう一つキャンパスもございまして、その2キャンパスでやっているんですけれども。そこの学長をやって、ちょうど4年目を迎えるところでございますけれども、もともと私は学長なんかをやるような器ではなかったと思います。非常に小さいときはおと

なしい子でして、みんな笑うんですけど本当にそうで。体もものすごく小さくて、三つ下の妹がいるんですけれども全て小学校のときから、背の高さから何から全て抜かれているような子でした。

母も、育ちが遅そうだからと大学まで続いている女子大の付属の中学校に入れてくれたんですけれども、中学、高校と女子校で育ちまして、実践女子大学というところなんですけれども、そこにそのまま95パーセントの生徒さんが上に上がるような学校でしたけれども、なぜか高校2年の後期ぐらいから何か頭の中で変容が起こったんだと思いますけれども、別の世界も見てみたいなという、家族も4人姉妹、女ばかりなんですね。そんな中で少し別の世界を見てみたいという感じで、受験勉強も何にもしなかったのも、何とか明治大学が拾ってくれまして、明治大学の英米文学科に進みました。市長も非常に大学時代いろいろなことがあって気付きがあたりだったようなんですけれども、私はそこで大変、素晴らしい恩師に出会うことができ、今の私がいると思っております。

やはり人と人との出会い、つながるということが大変、大きなテーマだろうと思います。大学生になったら絶対に自分は変わってやるぞと思いつながら、大学の門をくぐりました。女の園から行ってみましたら、明治大学はその頃もう90パーセント以上、男子学生でいっぱいでしたので、キャンパスを歩くのも怖いぐらいでしたけれども、若さってすごいなって思うのは1カ月ぐらいで慣れました。そこで橋先生と、神戸大学でも教えたことのある先生なんですけれども、出会いまして、先生が教室のドアから、すって入って来られて学生たちになっこり笑ってご覧になったその姿を見て、私はこの先生に出会うためにこの学校に来たに違いないと思うような衝撃

的な出会いがございました。

言葉をひと言も交わさないでそんなふうに見えるんだって自分でもびっくりしましたけれども、それからずっと彼は私の師匠でございまして、早いうちに亡くなられてしまうので、その後は彼が私の中にたたき込んでくれたものを今でも昇華しているような気がします。大学院までいって研究生生活を続けるには大学の教員になるしかないかなぐらいの気持ちでなったんですけれども、初めて授業したときに私はこれは天職だと思いました。学生と関わっていくことが今でも、学長になっても、学生と関わるのが一番楽しいというぐらいに教育っていうものには非常に親和性を持っている人間だというふうに思っています。

経験値の話でございましてけれども、私が育った時代は大家族の時代でしたけれども、私も3代、曾祖母と祖母と両親と、私たち4世代が一緒に住むような大きな家族で住んでいましたけれども、ちょうど今、私は19年生まれですので年が分かってしまうんですけれども、70を過ぎているんですけれども。ちょうど私の世代が学生運動も華やかな頃でしたし、家族の大家族っていう制度をつぶした世代だというふうに思っております。それから先ほどのような出てきましたベトナム戦争なんかもそうですけれども、そのベトナム戦争なんかも何かしらのある意味負い目が、あのときに、あの戦争を止められなかったとかね。何にもできなかったんではないかという、そういう思いを、痛みをずっと持ち続けている世代でございまして。核家族が良かったか、悪かったかっていうと、やはり人間ってどこかでつながりたいんですね。

ですから、今もこのつながるという教育が行われているようなんですけれども、人間は一人では生きていけないので、つながって生きていきたいのは本能だと思います。それが家族

から、さらに地域コミュニティーへの関心になってきていると思うんですけども、そのことに関しては本当に素晴らしい教育をしてらっしゃると思います。教員として私は先ほど大江先生もおっしゃったように大学で教わった知識っていうのは経験だとか、体験を通して初めて生きる知恵になるんだっていうふうに思っています。ですから、今や大学生を育てるのは学内だけではなくて外の地域の住民の方だったり、企業の方だったり、本当に一般の市民の方たちが学生を育ててくれる時代だと私は思っておりまして、そういう方たちとのつながりの中で学生は育っていくんですね。

ただ、学生を育ててもらっただけではその関係は長くは続きません。その地域にとっても学生が入ることが意味のあるもの、ウィンウィンの関係でないと、この関係は長く続かないというふうに思っています。私は演劇が専門なんです。ですから演劇論なんかを教えているんですが、例えば先ほど阪神の大震災じゃない、東北のほうですね。震災のときに、その後4月の第1回目の授業のときに私は学生たちに何と言葉を掛けていいのか、どういう言葉が今教育の現場で求められているのかってずっと考え続けていました。でも、当日言葉が出ませんでした。

みんな今日は来てくれてありがとうという無事を確認する言葉しか出ませんでした。いろいろ授業、進めていくうちに、こんな大変なときに私たちはこの教室で演劇論の授業やっていいのかという話し合いを、疑問を投げかけたときに学生たちは「そうだよな、僕たちは演劇なんかの話をしているよりも毛布1枚、今、持って駆け付けることのほうが大事じゃないか」と。じゃあ演劇論の授業は要らないのかということになりますと、学生たちはいろいろ考えてくれて、「少し人の気持ちが落ち着いてきたときには、演劇的なそういう心を

癒やすようなことも、とっても必要だと思うよ先生」というようなことを言うてくれまして、学生たちを連れて陸前高田に水を配るといふボランティアに行きました。

そこで学生たちはもう若いですから一生懸命、重い水を配って歩くんですけども、被災されたおばあちゃんたちが自分の経験を語り出すんですね。それを聞いて学生は、もう女子学生は泣いて聞いていられないぐらいなんですけれども、当の話すご本人は話すことによって自分を解放している。これは演劇的な意味もあるんですけども、次の生きるエネルギーにしていらっしゃる。こういうふうに、どちらにとっても意味のある関係がコミュニティーの、今、社会貢献っていう言葉がありますけれども、お互いに学び合うという、それが経験値教育だっていうふうに思っています。

例えば演劇論の中でギリシア演劇の『オイディプス王』の話をしますと、お父さんを知らず知らずのうちに殺してしまうというような話ですけども、この過酷な運命を受け入れられるのかと学生たちに問います。先ほども大江先生のお話の中もありましたけれど、受容する精神、受け入れる心こそ大事だと気づかせます。それと主体的に、市長がおっしゃったように主体的に自分が何ができるか、同じ運命を与えられても主体性があるかないかによって、結果は全然違ってくる。運命っていうのは命を運ぶと書きますね。つまり自分で運ぶわけです。そういう気付きみたいなものを演劇論の中でやるんですけども、ふうんって学生たちは聞いているんですけども。

じゃあそれを実際にどうやって経験値として学ばせるかというのと、そういう被災地に行ったり、あるいは学生同士でチームでプレゼンテーションをさせたりします。そうすると本当に今は発達障害を抱えたり、アスペルガーの学生がいたり、勉強はできるんですけど

ども、そういうコミュニケーションが苦手な学生がたくさんいます。そういう学生を巻き込んで、どういう発表ができるかっていうと、リーダーになった学生が、先生もうやっぺられないとか、いろいろ言うんですけども、そのときに初めてオイディプスの、受け入れる心を学んでいくわけですね。あなたが主体的に引っ張っていかないとどうするのって言ったとき、彼女が引っ張り出すとみんなが動いていくという、そういう経験値が今のアクティブラーニングだとか、PBL だとかっていう教育方法だというふうに思っています。

女性の活躍ということに関しては、私は、女性はもっと欲深くあるべきだというふうに思っているんです。学生さんがちょっと少ないですけども、若い学生さんには私はいつも何だってできるんだから、例えばお嫁さんになったらもう専業主婦じゃなきゃ駄目だとか、そんなことはないわけですね。働きたかったら働けばいいし、子ども産みたかったら産めばいいし、専業主婦になりたかったら専業主婦がいい、それを全力でやりきることが大事です。

三つやりたかったら三つやるべきなんですね。それが今 40 代の、市長も 40 代でいらっしゃいますけれども、40 代の女性の活躍につながっていると思います。もっと欲を持って、学生さんたちも自分のやりたいことをやっていかれたら、それでちょうどいい時代になってきていると思います。私が子どもを産んだ時代は子どもができたなら学校は辞めなさいと、今でしたら大問題ですけども、そういう空気があった時代ですね。なんで子ども産んで辞めないの、みたいなのがありました。私はたまたま子どもが、生まれてきたときに腸が弱かったもんですから、9年間非常勤という形で子育てをしながらほそぼそと研究を続けてまいりました。そのときにそういう若い人たち

を支えるシステムだとか、支えてくれる人がいないと、それはなかなかつながっていかないだろうと思います。

そろそろ時間かもしれません。若い女性が今なぜ強くなりつつあるのかなってことを考えると、長い歴史の中で男性社会だったんですね。全ての国がそうだったと思いますけれども、男性はそして組織の中で生きてきていらっしやいました。その中で女性は割合に組織には属さないで、ある意味、自由に自分のやりたいことをやり続けてきたんだと思います。ですから、組織というものの怖さを女性は知らないというか、無視できるというか、そういうところがあって、私なんかも組織の中にいる人間ですけども、もうヒラの頃から学長だの、理事長に直談判に行くような人間でしたので、お前さんは組織を知らないねってよく言われましたけれども、それが女性の強みだなんていうふうにすごく感じています。

それから、女性がこれから活躍するには女性自身が自分をきちっとチェックできるという自覚を持たなきゃいけないと。これまでは男性が押さえつけていたという時代ですけど、これからは女性がしっかりとお互いに強化し合うといいますか、自分で強く生きていかなければいけないと思うんです。私は演劇の中でもいわゆるフェミニズムとはちょっと一味違うんですが、女性がしっかりと生きていくというようなことをテーマにした女性劇作家をずっと研究しているんです。キャリル・チャーチルというイギリスのちょうど私より一つ、二つ上の、まだ現役の劇作家が研究テーマなんですけれども、彼女が子ども3人生んで、2回ぐらい流産をして、それでも書き続けたいわけですね。その意欲がどうしても収まらないんです。そのときになんで女性だけがこんな思いをしなきゃいけないのか。どうして、ご主人は弁護士なんですけれども、ご主人はず

っと仕事を続けられて、女性は休まなきゃいけないのか。

それをぶつけると彼が素晴らしい人だったんです。じゃあ僕が1年間休むと。子育てを交代してくれて、彼女は一つの大きな作品を書く。それが『トップ・ガールズ』という作品です。いわゆる女性がトップになるとはどういうことか。これはまた後ほど機会があったらお話させていただきますが、女性がこれからもっと活躍する時代になると思いますけれども、女性の活躍をもっと根付かせるには、今、大きな展開点に立っていると思っております。

野呂 原田学長どうもありがとうございます。それでは最初のお話を展開していただく中での最後になりますが、川島学長よろしく願いいたします。

川島 川島でございます。お二人の話をお伺いした後は、非常に話しづらいますが。覚悟を決めて、話をさせていただきます。私が大学に入学した年は昭和44年です。中学までは父の仕事の関係で小、中学校を計5回、転校した経験があります。子どもながらにずいぶん緊張したり、恥ずかしい思いも経験しましたが、転校先の地域地域で多くの友人もできましたので楽しい思い出も多々残っています。その後、大学に入りました。大学に入学してみましたら、突然、休校になりました。いわゆる大学紛争の真っただ中の時代で、東大の入試がなかった年です。ほぼ半年以上、授業がない状態が続きまして、これってモラトリアムと考えていいのかなと漠然と思っていました。授業が再開されました後、その後すんなりといいのかな、いいのかなと思いつつながら、教養、それから専門課程のほうに進級して、卒業いたしました。

でもこの経験からその折、ぼんやりと私は

不安に感じたことを覚えています。「こんな簡単な卒業の仕方をしたら後からひどい目に遭うんじゃないか」と。そのとおりでした。学ぶべき事柄は、その折にしっかり取り組んでいないことは後から必ずやってくる。そして自分が不得意な分野は残していけばいくほど後から追ってくるというのは事実だということを経験しなければならぬ多くのステージをいままでたびたび経験しました。大学卒業後、すぐにご縁があり、九州から兵庫県にあるここ園田学園女子大学に5年間奉職いたしました。その後、出産の為、いったん退職しました。なかなか仕事に復帰する機会がなかったので、12年ほど専業主婦で、子育てを経験し、その後、園田学園のほうに復職し今に至っています。話は飛び飛びになりますが、園田学園に奉職し、2人の人生の恩師との出会いがありました。最初の恩師は大学の先輩でしたが、非常に卒業生の信頼の厚い先生で、社会人としての心得として一生様々な形で働いていても、それから家庭に入っても人間同士はつながり、和による信頼が大切だということを教えていただいたと思っています。復職した時は、すでにもうその先生は退職しておられました。さらに本学の1期生であり、母校の教授として残っておられた先生にも若いときのような変な自己肯定感はもちろん、自信もなく長いブランクのある私は、公私ともども大変お世話になりました。その先生のおかげで何とか今があると思っています。

先生の教えの中で、「お世話になった方にはその人に返さなくてもいいので機会があれば誰かに返しなさい。」この教えは今も私の中に温かい気持ちを思い起させ、しっかりと残っています。そして「教育とは学生を心をこめてしっかり育てると同時にあなたもしっかり育たないとできるものではありませんよ」と常に実践を伴って教えていただき、今も私は一

教育者としての糧としています。現在学長という立場ですが、なすべき事には誠意をもってあたり、学生一人一人を本当に大切に、教職員の方々と協働しても和を取ってやっていかないといけないということを私は信条として仕事続けています。

さて、この5年間で終わりますCOCという取り組みについては、ああもう今年度で5年目になったんだという思いで、感慨深いものがあります。この取り組みは私の前の学長富永学長が機構長、大江先生が副機構長で開始され、私はそのときに学部長の職責にいました。COC事業に採択され、大学全体が歓喜したのをよく覚えています。本学の教職員をはじめ実際にご尽力いただいた関係者の皆様の力で、不十分な部分はありますが、尼崎市と本当の、真の連携ができて、そして地域で学生を育てていけるという体制ができ、園田学園にとって経験値教育の一つの柱がしっかりとできたというふうに確信をしております。稲村市長のありがたい発言がありましたように今後もこの体制を継続していく必要があると強く思っています。

次に、経験値教育についてなんですけれども本学は女子大です。女性にとって経験というのは何にも代えがたいもので、自信の一つの芯になるものだというふうに私は考えています。ですから、この経験値教育の具現化を進めていき、学生は失敗が許される大学時代で、ちょっと大変かもしれないけれども、頑張っ社会とつながって真の意味の経験を積んでいただいて、それを糧として先ほど社会で野呂先生も申し上げましたけれども、生きるというよりもこれからいろんなステージで生き抜いていかないといけないと思いますので、それを糧として行くための経験値教育をしてまいりたいと思います。

次に女性活躍という文言から連想すること

として少し横道にそれるかもしれませんが、個人的に大学時代に非常にショッキングな出来事がありました。共学で、40名中女性は5名の学科を専攻しました。一人の先生に専門課程に進んでの授業の第1回目に、ここに女性が数名いるけれども、国立大学というのは国庫のお金を使って教育をしている。ところで皆さんは卒業後就職しますか。そして社会のために役立ちますかということを詰問されました。今でしたら完全にセクハラでアウトですよ。でも、言われたときに、エツツと思った女性はわずかで、男性はもちろん残りの女性はフーンと聞いていたようですが、この経験は私にはかなりのカルチャーショックでした。

そういう経験は今になって思いますと、してよかったかなと思います。厳しい現実におかれていることの経験を積み、それを糧にして現在があるというふうに考えておりますので。私の中にもやはり学生さんからみると古い世代の因習が残っているというふうに感じています。しかし、それにめげずにそれを糧にして生きていくということが人生にとっては非常に大事な事ですので、女性が真にしっかり自己実現し、活躍できるような教育をこれからもしてまいりたいと思いますので、皆さんどうぞ共に頑張っていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

野呂 3人の先生がた、どうもありがとうございます。司会として、雄弁な先生がたを前にしてどういうふうに進めればいいのかと思っていますところなんです、3人の先生がたのお話の中で共通項というところは女性活躍という、その部分を取り上げていくのではなく、経験値教育っていうものってどういうものなのかと。どういうふうな社会をこれから生きていってほしい、そういう女性を応援していきたいのか、というような大きなメッ

セージ性のもがあったのかなというふうに思います。

最初、稲村市長のほうからは大江先生の「本気の大人と出会う」という話も取り上げていただきながら、こんな人になりたいというような多くの大人との出会いの中から豊富な経験を積んで、それでそこで終わるのではなくって自分の中でできることを増やしていきたい。それってまさしくその後と言われた主体的にやり切るといふところにつながるのかと思うんですけども、そういうふうな部分をこれからの女性活躍というところに特化して言うならば、生き抜いていく中で主体的にやり切るといふのが一つのキーワードになっていたのかなと思います。

それと市長の話の中に出てきたのは、今、本当に多様な人々とともに生きるダイバーシティ構想といわれるようなところっていうのが、少しその辺りのことも出てきたのかなと思うんですが、いろんな人々とともに共存する。そういうふうな辺りの中で私たちがどういう役割を果たすのかといふのができることを増やしていく中で、主体的にやり切るといふところにつながるのかなというふうな辺りだったのかなというふうに思っております。

それから、原田学長のほうからも同じように人と人との出会い、つながるといふのがキーワードとして出てきたのかなと思います。恩師との出会い、学生との出会い、学生と関わることの楽しさということも話していただきました。それから家族構造が、家族の形態が変わってきている中で今、本当に人間関係の軽薄化って地域の中でいわれていて、私の研究の中でもそういうのは随所に入ってくるころなんですけれども、そのコミュニティーへの関心度を高めるっていうのが本学の経験値教育の中には生きていくのかなというところもある評価をいただいたのかなというふう

思います。そういう体験、経験が生きる力を学生それぞれ、それから私たち社会人になってからも得ていく一つのプロセスというお話もいただいたように思います。

もう一つ印象的だったのが、運命ってというのが、命を運ぶってということなんだよっていうところで、そうするとそれを支えるシステムをつくらないといけない。その支えるシステムをつくるということが、女性が一つ自分のやりたいことをやる時代の中で女性の細やかさの中でも出てくるころなのかなって。先生は女性は欲深くあるべきだって言われましたけれども、その部分がその支えるシステムを考える中では大きいのかな、そういう力があるのかなっていうふうなこと、それからもう一つ印象的だったのが男性は組織の中で生きてきている。組織文化をしっかりと知っているというところって、私も生きてきたこの大学時になる前の社会では本当にそのことを思い知ってきたかなというふうに思っているんですが、女性はその組織の中にしっかりと、いたわけではないので怖い物知らずなんだ。その話もすごく興味深く聞かしていただきまして、その強みをやっぱり強みとして持ちながら女性を自分をしっかりとチェックしていける時代というところをご提言いただいたのかなと思います。

本学の川島学長からも同じように和であったりとか、つながりっていうような方面についてお話をいただいたのかなというふうに思います。皆さま、共通なようなところであることをしっかりとやっていく。それが川島学長の言葉にありましたのは誰かに返していくことになる。それが支えるシステムであったりとか、多様な人々とともに生きるというところにつながっているのかなっていうふうに思ったりします。

一応、私が今までのところで感じたところ

なんですけれども、先生がたのところでもう少しそれぞれのご発言のところ深めていただいたり、あとの先生の、残りのお二方の先生のところへの共感なり、ご意見なりというところで深めていただければというふうに思います。司会、あまりしゃべらないでおこうかなと思っているんでどうかよろしく願いいたします。

稲村 ちょっとこれまでのお話を受けてってことじゃないんですけど、先ほど休憩時間に一回、展示をぜひご覧くださいっていうご案内いただいて、みんなで見に行ったんですよ。いろんな取り組みの報告だとか、地域の方からの感想なり、アドバイスなり、そういった声っていうのも少し拝見したんですけども。事前に活動に関して、狙いみたいなのを書くようなシートがあったり、多分やった後に振り返りのパートがあると思うんですけども、やっぱりそこをしっかりとできる学生と、ちょっとそこがねっていう学生では地域の方の受け止めがだいぶ違うのかなっていう印象を受けました。

私、こういう経験値の中で自分が普通に勉強するだけじゃなくって、いろんなことつながっていく中で初めて得られる力として、メタ認知能力っていうんですか。もう少し違う角度から見るとか、少し俯瞰して見るとか、こういう力を付けていくっていうのが非常に大事だなと思ってまして。でもそういう力って実はがむしゃらに経験するだけじゃなくって、例えば自分がいろんな人とトラブルになったとか、傷付くようなことがあったとか、うれしかったとか、何でもいいんですけど、少し掘り下げて振り返ってみるとか、自分で言語化しようと努めてみるとか、誰かとそれを共有するために話してみるとか、そういうところがセットになっていないともった

いないのかなというような感じがしまして。

例えばさっきも女性活躍の話をしていたんですけど、私なんかは世代的には、パイオニアとして切り開いてこられた先輩たちの後で随分と果实をいただいている世代で、もういつも申し訳ないなと思うぐらい。その分、欲張りに頑張りますので、それを持ってお返ししたいというふうに思っているんですけども、そういういろんな経験を糧にするって言っちゃうと簡単ですけども、少し俯瞰して見るような力っていうのが他の人との相互理解にすごく大事だなっていうふうに思うんです。

こういうやりがいがある、役割を持ってやり切っていく中で学ぶことってすごく有意義なんだけど「楽じゃない」わけなんですね。これも大江先生の学生の言葉の中にもありましたけど、基本、面倒くさいことがいっぱいあるわけなんですね。そんなもんやねんっていう、このトレーニングっていうんですか。いいとこ取りなんてなくて、人間そういういろんな面倒くさいことの中から、こうだったんだっていう気付きがあったり、分かり合える喜びがあったり、分かり合えない悲しみも時にはあるかもしれませんけれど。

楽じゃないんだけどそこから私たちの人間らしいいろんな、それこそつながりや学び、そして自分の成長や自分一人ではできないことが何事かやり遂げられるような可能性とか、そういうことがあるんだっていう意味での成功体験っていうんですか。失敗しないという体験ではなくって、そういった面倒くささの中やいろいろなことの中から次につながるんだっていう成功体験ですよ。そういうことがちゃんと積み重なって、それがあつた種の自己肯定感というんですかね。そういう自分にも役割を果たしていくんだっていう意欲的なことにつながって、そういういい循環をつくっていくのに私は大学生の期間って

いうのが非常に重要な意味を持っているなっ
ていうのが自分の人生を振り返っても思うわ
けなんです。

といいますのは学生って冒頭の商工会議所
や社会福祉協議会からのごあいさつにもあっ
たように、若い人は最初は必修やからかもし
れませんが、あんまりやる気ある人ばかりじ
ゃないかもしれないけど、若い人がそこに少
しでも関心を持って来てくれるっていうだけ
で地域の側からしたら、面倒くさいところも
あるけどもうれしいし、可能性を見いだそう
って思うし、学生サイドだってお互いにそう
いう面倒くささとか、いろんなことがある。受
入れる側の地域や組織のほうだって別に常に
正しいことを言っているわけではなければ、
そういった学びのプロセスにお互いが入っ
ていくわけですから、そういうことがさっきメ
タ認知っていうことにつながっていくんです
けれどもね。

そういった中でそういったいい循環に結び
付けるっていうことを意識していかないと。
自己肯定感が低いと他者に寛容になれないじ
ゃないですか。だから、そういったことをやっ
ていく中で他者との相互理解や補完関係って
いうのが促進されるかなっていうふうに思う
ので、これは女性に限ったことではないんで
すけれども、そういった視点で経験値教育っ
ていうことがより進化していくと素晴らしい
し、私たちもそういうふうと一緒に関わりな
がらつくっていったらなというふうに思いま
した。ちょっと雑ばくな話になってすみませ
ん。

原田 いいですか。今の市長の話を受けて、本
物の経験っていうか、体験っていうか。飛び
ぬけた経験値みたいなものを持つことがとて
も大事なことで、私も学生にいつもいい加減
な、例えばアルバイトをしてこういう経験し

ましたとか、いろいろ言うんですけども、誰
でもが普通にできるような経験ではなくて、
あなたにしかできない経験、飛びぬけた経験
をちゃんと語れるようになりなさいというこ
とを言うんですけども、学長に就任した第
一声は私は東洋学園大学を学びのコミュニテ
ィーにしたいという話を差し上げたんですけ
れども、まさに今、市長がおっしゃっていたよ
うな、そういう循環をつくりたいということ
だったんです。

まず手始めに『キャリアのススメ』という授
業を一つ作ったんですけども、キャリアと
いうのは就職という意味だけではなくて人生
設計をするということで、教員と職員と一緒
になってどういう授業にしようか、どうい
うアクティブラーニングをしようか、どうい
うPBLを入れ込むかとか、職員も含めて話し合
いました。それで科目の名前も、ワーキンググ
ループをつくったんですけども、そこでい
っぱい出してもらったら30ぐらい科目名が出
てきたんです、その中で投票制にして、ある職
員がお風呂の中で考え付いたという『キャリ
アのススメ』に決まりました。やはり彼らはま
ず、いろんなワークをしながら自分が18年間
生きてきた、振り返りをするわけですね。高校
時代まで何をしていたんだろう。今おっしゃ
ったような成功体験ってどのぐらいしている
のかなっていうと、結構少ないんですね。だか
ら、自己肯定感が少ないんだろうと思うん
ですね。小さなことでも何か成功してもらっ
て自己肯定感が育つような、そういうサイク
ルをつくりたいという、そういう科目をつくり
ました。

どうにか学校全体がその学びのコミュニテ
ィーの和の中に入ってこれるような循環をつ
くりたいと思ひまして、その授業にファシリ
テーターとして上級生を入れ込んでみました。
きっちりそれなりのファシリテーターとして

の役割を訓練された上級生を入れました。これが最初たった 3 人から始まったんですけれども、今年は 69 名ほどのファシリテーターが育っています。つまり、その循環がうまく回っているんですね。うちの学校はそんなに偏差値が高い学校ではないので、大体不本意な入学なんですけれども、こんな学校辞めてやる、がまず第一声なんです。

それが先輩と出会うことによって変わります。どの学校にいても素晴らしい学生っていうのはいるもんです。素晴らしい先輩と出会うことによって、自分はまだこの東洋学園大学でやり切れてないということに気が付くわけですね。そうすると先輩、ロールモデルがあるわけですから、じゃあこれをやろう、あれをやろう、じゃあファシリテーターもやってみよう、学生スタッフもやってみよう、いろんなことを考えてやっていくうちにその輪の中に入って、皆さん、「この学校でよかった」と言ってくれます。昨日もその会があったんですけれども、本当にこの会に入れてよかったっていうふうに言ってくれるんですね。

私が学びのコミュニティーを思い付いたのは、吉田松陰という人はからなんです。いろんなことで知られていますけれども、法律を破って山奥の牢屋に入れられるんですけれども、彼のアメリカに渡りたいっていう強い思いなんかはすごく私もよく分かります。彼は野山獄という刑務所みたいなところに入って、そこに入っている人たちが、みんな死んだようなかんじだったわけですね。何にもやることもないし、その中で彼が思い付いたのは、どの人にも得意なことがある。「あなたは何が得意ですか」と仲間に聞いて回るんです。何にもねえよって言いながら実は大工さんだったりだとか、あるいは書道は俺は得意だと言ってきました。

女性も 1 人いたんですね。確かお花だった

か、お茶でしたかね、得意なものがあるんです。そういう一つ一つそれぞれ得意なものを出させて、みんなで教え合おうんですね。学びは伝播するっていうのは、彼の本を読んでいて思ったんです。本当に腐っていた一人が、自分が誰かに教えることによって周りが変わっていきっていくという現実を見ることによって、彼は生きる力を持つことになる。教育っていうのはまさしく伝播するものだと思いますので、こういう教育がこれから求められているんじゃないかなと。

ただ知識をどーんと与えるということではなくて、その知識はいつまでも残っているんですけれどもね。やはりふに落ちる経験値とか、成功体験だとか、そういうものがあって初めて生き抜く知恵になっていくんだらうなというふうに思います。若い学生たちは本当に無限の可能性を持っているんですね。その無限の可能性の種をいかに伸ばしていくかが教育です。木々の種は硬い土の中で、太陽と水を受けて、大地を突き破り、双葉を出します。人間も同じで、教育を受けて自らの殻を打ち破り、実をつけ花を咲かせます。大江健三郎さんがアウトグローイングという言葉を使っていたんですけれども、打ち破っていく、これが若さだということですね。植物は太陽だとか、栄養を吸収し、人間は知識経験によってどんどん伸びていく。自分だけの花を咲かせたり、実をつけたりするんです。

本当に教育っていうのは長いスパンで考えなきゃいけないことで、すぐに成果が出るものではないと私は思っています。そういうところでは理事会とずっと戦い続けてきたんですけれども、そんなに簡単に出るものはそんなにいい教育とは私は思えません。私は 70 過ぎても、私の先生の言葉を一つ一つまだ噛み砕いています。大学時代、どんと大きな塊の知識をもらおうなんですけれども、それを一つ一つ

昇華していく経験っていうのが大事なんです。園田学園でやっているような経験値教育、市長がおっしゃった成功体験こそ、自己肯定感を育んでくれるのです。

稲村 ありがとうございます。

川島 私もお話させていただきます。成功経験、それから失敗、辛い経験等の経験値をいろいろためていって、知識を知恵に変えていって、それを自己肯定感に結び付けていくということができたならなど、いやしなればいけないと思っています。本学は実学中心という体制を教育目標の一つとして定めています。当然、資格を取得しなければなりませんので、本学の学生さんは非常に真面目です。こつこつ努力を積み上げていますが、なかなか物事を俯瞰してみるようなというところややや欠けているかなと思います。その部分をどう工夫して学生に自己肯定感を身に付けさせていくかというのが今、大きな本学の課題となっています。

そしてやはり女性がこれから活躍するためには根本のところ謙虚さがあっても自己肯定感、自分は自分でいいんだと認識する感覚っていうことが裏付けとして存在しないと大きく成長し、自信を持って前に進むことができないのではないのでしょうか。別にそれを公に出してひけらかすのではなくて。大学は自己肯定感をしっかり付けていく教育が必要でしょうね。

先生がたに質問ですが、女子大として自己肯定感を付けるためにはどうしたらいいと思われますでしょうか。もし何かご意見があればぜひ参考にしたいと思いますのでお願いいたします。

稲村 女性として、ということにならないか

も知れないんですが、繰り返しになるんですけど、やっぱりしんどいところを超える経験のような気がします。人ともめたら傷付きますし、自分が失敗したら落ち込みもしますし、それは当たり前ですよね。そのときにやっぱり応援してくれる先輩や先生や一緒に活動する友達とか、いろんな関係がないと頑張り切れないので、そういうところは応援してあげたいなというのが一つと、代わりにやってあげる支援じゃなくて、その本人が主体的に頑張り切れるように、頑張れるように応援するという意味での支援をどれだけやれるかっていうところが、これからこういったお互い学び合う立場としては重要なのかなと思います。言うはやすし行うは難しかもしれないんですけど。

原田 適切なアドバイスができるか分かりませんが、本学は初め、東洋女子歯科医専といって、女性の歯医者さんを育てる学校だったんですね。日本でまだ2校しかない時代でございました。卒業すれば歯医者さんになれるという時代でございました。戦争に負けまして、GHQが入ってきまして教育改革がなされました。そのときに本郷の地が爆撃を受けまして、全て機械から何から失ってしましまして、習志野のほうに移って授業をするんですけども、そのときに視察が入るわけですね、GHQの。こんな何にもないところで新制大学としては認めるわけにいかないという決定が出ました。そういう紆余曲折がございました。

閉校が決まるんですけども、まだそのときに3年ぐらい、まだ続けなけきゃいけないんです、在校生の教育を。さらに追い打ちをかけるように国家試験というのが導入されるようになりました。前は卒業すれば歯医者さんになれたんです。ところが国家資格を取らなきゃいけないということで、在校生も本当に

必死に何も無いところで先生たちが育てたんですね。その当時のいろいろな物を読みますと、本当に劣悪な環境で学生たちが勉強していたようで、義歯を作る機械がたった一つしかないの何十人か学生はいるわけです。1時間交代で先生はずっと実習するわけですから、先生は倒れちゃうんですけども、学生たちは1時間たったら、あなたの番よと起こされて。

それで暖房もなく裸電球に手をかざして、そんな経験をして第1回目の日本の歯科の国家試験は、東洋女子歯科医専は、東京医科歯科に嗣いで2位だったそうです。こういう、それこそ先ほど市長もおっしゃったつらい経験をしてやっていくってことが、どれだけ子どもたちを育てるかということで、生き抜く力を彼らが持つようになるわけです。

その後、英文科の短大をつくって、そして短大の私は最後の学長だったんですけども、短大を閉めて四大になってという。私はその経緯の中で、学長に食ってかかったんですけども、なぜ女子大にしないんですかと。これだけの長い女子教育の歴史を持っているのに、なぜ女子大にしないのか。彼は人口の半分は男じゃないかみたいなことを言うんですけどね。ただ私は女子大の付属の教育を受けていますので、女子教育の良さというものはあると思いますね。男と女が平等だといいながら、実は役割とか、いろんな意味で違うわけで、それは当然なわけですね。やはり男の役割、女の役割みたいなものは当然あると思います。そういう中で女性の教育っていうのはとても私は大事なことだと思います。

もちろん女性特有の一つの大きな特徴として、子どもを産むということがあります。これは女性全員が子ども出産をするべきだということは私は全然、思いません。それは自由だと思っています。ただ一番、手っ取り早く女性と

して生きる道を教えてくれるのは出産だったり、子育てだったり、自分の経験でいうとそうなんですね。ただ私はじゃあその中で子育てしている自分と、研究している自分と、教育をしている教壇に立っている自分とどれが一番好きかっていうと、うーんって考えると教壇に立っている自分が一番好きかなというふうな感じがあるんですね。欲張りなんですけれども、もちろん子どもの命が一番大事です。

ですから、大学はできるだけ休まないんですけど、3年に1回ぐらい小さいときに、ママ学校休めるっていうときがある。そのときは休みます、何があっても。女性はいろんなやることがあるのでプライオリティー、何を一番大事にするかっていう、その選択する力を持たなきゃいけないんです。先ほど川島学長が、どういうものを身に付けたらもっと俯瞰で人生を見れるような生き抜く力を持てるかと質問されましたが、私はリベラルアーツだと思っています。専門職の資格はとても大事です。私も歯科医専という歴史を見てきますから、いかにそれが大変で実利があるものだというふうに思いますけども、その歯医者さんが独立して患者さんと向き合うときに実学だけではなくて、リベラルアーツという教養というものをしっかり自分の中にあってこそ本物の歯医者さんになれるんです。それが自分の道を選択するときの栄養素になっているわけですね。ですから、リベラルアーツ、教養教育っていうのはとても、専門教育以上に私は大事だというふうに感じています。

女性が例えば子育てのときに、発達心理学なんかを勉強している先生が一番よく分かると思いますけれども、子どものエネルギーってすごいんですね。子どもの応用力とか、成長とかすごいんです。私は子どもを育てながら学生の教育に、すごく影響を受けたと思います。何も知らない、言葉を知らない赤ん坊が風

呂という言葉を感じたとするじゃないですか。そうするとうちの子はプールに連れていったら、ママ、大きなお風呂ねって言うわけです。もう一生懸命、自分の知っている言葉で何かを表現しようとするわけ。その次に海に連れていったら、ママ、大きなプールだねって言うわけですね。自分の持っているものを、どうにか引き出して人とコミュニケーションを取って、これ持って生まれたもんですね、人間は。

だけど、これを今の社会はあれを言っただけはいけません、これをしてはいけませんという教育に、画一的な教育になっていた時代が、今だんだん変わりつつありますけれども、子どもたちの芽をつぶしてきたような気がいたします。もう持って生まれたものは非常に活発なエネルギーなものだと思いますので、自分の子どもでなくても子どもの成長を見るっていうのは女性にとっても、男性にとってもですけども非常に意義深いものがあるし、学長に対する答えとしては専門教育以上に教養教育っていうのはとても必要だなんていうふうに思いました。

稲村 本当にそう思います。でも実は自分が10代、20代のときは、それは分からなかったですね。年齢を重ねるにつれて、いろんな、それこそ演劇を見たり、美術の作品を見たり、分かんないんですよ。でも分かんないながらも、そういうのが自分の中にちょっとたまっているっていうのはすごく大事だなんて思いますし。本当に関係ない雑談なんですけど、私よりもずっと前に、とある市の市長をしてらした先輩がいらっしゃって、もう辞めてらっしゃる方ですけども、その方は天文学を勉強していた方だったんです。いろいろままならない課題がいっぱい押し寄せてくるわけじゃないですか。押しつぶされそうになるときに空を眺めると、この天体の大きな世界から見る

と今、自分が抱えているこの課題もどんだけ小さなことかって思って、また次の日頑張るんですね。

その話を聞いて以来、結構まねしているんですけど、何かそういうまさに発想の切り替えみたいなのは一つのね。そういう専門以外の自分の他のポケットがいっぱいあるっていうのはすごく大事だなというようなことを思い出しながら、お話を伺いました。あと、ごめんなさい。これが雑談でもう1個何か言おうと思ってたのに忘れてしまった。また思い出し次第。

野呂 今、3人の先生がたから、きょうの本当にテーマの中の経験値教育っていう辺りで、私が今お話を伺いながら、今、COC事業のシンポジウム、5年間のまとめとしてやっているわけなんですけれども。やっぱり5年間のCOCをやってきたという園田学園女子大学として、これからどういうふうにそれを継承して、そして今の時代に則した形の教育の形として持っていくのかっていうところで、いろんなアドバイスをいただいたのかなっていうふうに思っています。また後でその辺りについてはまとめも持っていきたいなっていうふうに思うんですが、この辺りでフロアのほうから今の3人の先生がたのお話の展開を聞いていただきながら何かご意見をいただければと思うんですが、いかがでしょうか。

— お願いします。

A— 貴重な話、社会の第一線で活躍されている先生がたのお話を拝聴させていただき、大変勉強になっております。皆さまがたにお伺いしたいんですけども、女性の活躍を進めていくっていうのは当然にして、当たり前に必要なことだと思っています。他方で、人口

の半分の男。男たちももっと活躍しなきゃいけないと私自身、思っているんですけども、世の中の男に対してもっと活躍するための秘策なりをご教授いただければと思います。どうぞよろしくをお願いします。

野呂 男性活躍についての何かご提言などいただければというような内容だったかと思うんですが、よろしくをお願いします。

稲村 いや、でももう別にあんまり頑張り過ぎなくていいと思いますけどね。といたしますのは、今は女性活躍イコール働き方改革とセットになっているのが現実だと思うんですけども、でも第1段階は女性が男性化する平等っていうんですかね。男性も専業主婦が仕事を辞めて、家にいて、初めて実現する働き方みたいなのに全員が合わせようっていうような形になるとすごくこれは難しくてですね。

だから今ライフスタイルも多様になりましたし、例えば何歳ぐらいで子どもを授かるかも随分と、ディンクスの方もいらっしゃるばっていう感じで、本当に多様になりましたんで、そういう多様な中で、一つのパターンだけではなかなかまとまらないよねっていう前提だと思いますので、男性ももっと多様な生き方を主張してもいいんじゃないかと思うぐらいで。ほら例えば、働く女性についてはすごく社会的理解が進みましたけど、男性はまだまだ非常に単一的な働き方を強制されているような気もいたしますし、お互いがそういう意味では多様な選択があってもいいのかなと思うぐらいです。

原田 まさしくそのとおりでだろうと思いますね。今、これまで女性はある意味、抑圧されていた部分、そこが脚光を浴びているわけです、平等にいこうという。けども、それで男性が

元気なくなったら困るわけですね。やはり男性が仕事もちろん一生懸命しなきゃいけないですけども、やはり今おっしゃったように組織の中で生きてきているので、なかなか柔軟に生きる知恵みたいなものをお持ちじゃない方が多いと思いますね。だから定年になったら、その後地域でどうやって生きていこうか、みたいなことになるわけですけども、自分の仕事だけの人生ではなくて、家族との時間だとか、そういうものがちゃんと若いうちから積み上げられていくべきで。

例えば私の世代ですと、定年になって初めて奥さんに何だかんだいろいろ言うんですけども、奥さんは冗談じゃない、今までどれだけ苦労させられたの、と言う方が多いんですけども、そうではなくて若いうちから家族との時間も大事にしていかなきゃいけないし、それが働く意欲にもつながっていくことだろうと思います。私の後輩で最初に子どもができたときにはご主人が公務員でらしたんですけど、育休を取られて、1年間しっかり子育てをして、子どもがどんなふうにつかっている、その喜びを実感したわけですね。奥さまはそれを知らないわけです。

もう1人産んで自分が今度はそれを経験してみたいと。子どもを育てるとか、そういう経験って家族の中で共有されるべきであって、これまでは男の人は何かいろいろ問題があっても奥さんに任せただけからみたいなことで通用してきたんですけども、それは私自身は主人はとても忙しい仕事をしてた人ですけども、大きな問題があるときには夫婦そろって学校に行くだとか、そういうことをしないと彼にとっても子育てをしたっていう実感が持てないだろうと思いますね。振り返ったときに俺も子育て頑張ったよなっていうふうに言えるっていうのがとても大事なことで、ぜひ男性も仕事にも、それから公務員でらしたり

すると国を動かしているという意識もおありでしょうし、いろいろ大変だろうと思いますけれども、ご自分の家族をきちっと満足させられなかったら、私はもっと大きな国の組織は動かさないんじゃないかというような気がするけど、違いますかね。

川島 私も同じような思いですけども、もう人生、男性も女性も 100 年ライフ時代と言われております。100 年ライフということでもまず小さなときから教育を受けて、そして仕事をし、引退。その後、もうちょっと形を変えて、今までのようなワンサイクルのキャリアでは対応できませんので、これからダブルワークも含め引退した後は何をするかというのを男性も女性も一緒に考えて、これからの人生を生きていけないといけないというふうに考えております。

そして私は子育ての折に、主人のほうの子育てに熱心でした。幼稚園に上の子が入るときに主に育てた人は誰ですかというような調書が来たときに、当然だと思って母親と書いたんですよ。それを見た父親が、なんで、違うんじゃないか、僕じゃないか、といえるぐらい子育てに参画していたことも身近に経験しておりますので、男性もしっかり子育てをしながら仕事をするという方が、現在のイクメンという注目度はなくても、たくさんおられたということは認識しておりますので。ただ退職した後も次のキャリア形成ということを含めて女性も男性も各々の人生をこれまで以上に考えていけないといけないと思っております。

しかし、今、一生懸命、社会で共に働いている特に管理職に男性の方にお願ひがあります。一般的に必要な以上に女性を労わるということは必要ないと思います。それはアンコンシャス・バイアスということで、意識してない偏見

という言葉が今、言われているんですけども、女性はそれだけ優しくしなくてもしっかりと生きていけますのでご心配なく、男性は男性で自分のキャリアをしっかりとつくっていただけたらいいかなというふうに私は思っておりますので、皆さん男女一緒に頑張っていきたいと思っております。以上です。

野呂 ありがとうございます。今、女性活躍というテーマの中で始め、男性活躍についてという話が出てきたと思うんですが、今、お話を聞いてましたらもう随分、前にいわれた男女共同参画っていわれることの意味をもう一度、問われているのかなってということとか、あとワークライフバランスという言葉もどちらかというに使われ始めた頃は女性にかかっていたのかなというふうに思うんですけども。今まさに 3 人の先生がたから言われた話というのは、そのところにはもうジェンダーの問題とか、そんなんではなくって、男性女性問わずに活躍をしていく、社会人として生きていくというふうな中で、そのところが今もう一度、自分たちが問い直しながらワークライフバランスを保っていくというようなところに来ているのかなというふうな、いい質問いただいたのかなというふうに思います。時間もちょっと迫ってはきているんですが、もう一つ、二つ何かご意見いただければありがたいと思うんですが、いかがでしょうか。

出口 非常に有意義な話ありがとうございました。鹿児島大学の出口と申します。今、鹿児島大学の COC をやっております、その中でわれわれ今、考えているのはまさに先ほど経験を俯瞰するといったお話ありましたけれども、経験も単独の経験で置いておくのではなくて、学生さんの中でそれを咀嚼して、一般化していくとか、併用化

していくってところがやはり高等教育ですね。園田学園大学でいうと経験値評価システム、経験を経験値にしていく、あるいは汎用化していくといったところのプロセスっていうのはやっぱり重要だと思うんですが、それについて知見をおうかがいできれば。

それから、最近、例えばよくいわれているのは海外専門の教育を希望する女性が多い。本学ではCOC+で去年から地域キャリアデザインという授業始めたんですけども、去年の受講生40人強ぐらいなんですけど、このうち男子3人だけだったんですよ。本年度は2年目になって150、男女の比率はもう少し接近してきましたけれども。それで、貴学、園田学園大学さんのほうにて、女子教育だからこそできていること。女子教育の特徴みたいなものが、もしあればお話いただければと思いますけども、よろしくをお願いします。

野呂 ありがとうございます。これって川島学長に向けられた質問かと思いますが、いかがでしょうか。

川島 女子教育だからできているということですか。本当は世界中には男性も女性もいるわけですから、共に学ぶことも必要だと思います。しかし、ちょっとお話に出ましたように、実際、共学校っていうのはとてもいい学びができるっていうのは承知しているんですけど。男女が共に行動する場面、特にリーダーシップをとらなければいけない場面で女性は尻込み、遠慮してしまうことがあることが否めません。これは何しょうねって思うんですけど。しかし女子大学では、何か行動するとき、例えば重い物を運んだり、それから試薬瓶の堅い

ふたを開けようとしても男性の同級生はいませんので女性間で誰かがやらないといけない。もうそれに尽きると思います。

女性がリーダーシップを持って、誰かがやらないと済まない。だからやらざるを得ないという立場に置かれるということが女子大の一番大きなメリットですし、学びの中でものごとを俯瞰してみることを特化して教えることも可能だと思います。女性として、女性なりの高等教育をする大学が私は女子大だというふうに思っております。

経験値教育のシステムについては大江のほうから話をしましたように、アセスメント評価、つながり評価というものを作成し、それを経験値の評価というふうに当てておりますので、それはまだちょっと不十分な部分はございますけれども十分、自ら学ぶ力とか、気付く力とか、考え抜く力とか、コミュニケーション能力とか、共同する力を経験値としておりますので、それで測定できるというふうに思っておりますので、今、教育の中には学習の評価というのは非常に難しいと思いますけれども、一つの評価システムとしては構築できたと思っております。

稲村 先ほど思っていたこと思い出したんです。まさに今、言っていらっしゃった女子大ならではのといいますか、いや、私は経験値教育の本当に大事な肝は、主体的にやるということだと思っておりますが、どうしてもさっき学長がおっしゃったように、ちょっと補助的な役割が回ってくるのがどうしても多かったんですよ、女性は。私の世代になるとあんまりなくなりつつあると思いますが、例えば、今、私たち避難所運営マニュアルでも必ず男女1名ずつ共同代表制にしてくださいっていうようなマニユ

アルを作っているんですね。これはそうしないと女性のリーダーが自然に出てくるとは限らない。でも必ず男女1名ずつ出してくださいっていったら誰かならないといけないので、そういうことが最初のきっかけになって、そういう立場を経験する人が増えるっていうのは一つ大事だなと思いますし。

さっきの自己肯定感の話にもつながると思うんですけど、ものすごい高いハードルのことをやりなさいっていうんじゃないかって、自分がやれることがすごく少ないなら、少ないながらも何やったらできるかを考えるっていう発想を持たないと。できないからあきらめるんじゃないかって、じゃあ今の自分でもできることあるんじゃないかって発想する中で、自分のできることを増やしたいなっていう次のステップにつながるっていうのがあるので、そのときに自分が主体的に自分が主語で活動するということが非常に大事だと思うのと、自分ができると、周りもサポートしながらやり切ってみるという経験をやるっていうことを男女問わずですけれどもやってみることが非常に大事だと思うのと。

あと若い人など、そういう補助的な立場になることも当然、多いですよ、経験値が低いときは。でもそのときに言われたことを言われたとおりにこなせばいいと思うんじゃないかって、これがそもそも何のためにやっている仕事なんかなとか、どういうことを意図して今この仕事を私が引き受けているのかなっていう。手段がいくつかあって、もしかしたらよりベターな手法があるかもしれないときに手法をやること自体が目的化してしまうんじゃないかってね。何のために今これをやるんだらうっていうような発想を持つとか。そういったことをどん

どんやっていくっていうのが大事だなというふうに思いました。

— ありがとうございます。

野呂 ありがとうございます。ちょうど時計を見ましたら終わり時間のところに来ておまして、フロアからのとても貴重なご質問いただきましたし、その後の議論も盛り上がったかなというふうに思っています。先ほど言いましたように、このシンポジウムを始めましたときには『経験値教育と女性活躍』っていうところで始めてまいりましたけれども、今、皆さんの意見、それからフロアのご意見からも出たところが先ほどちょっと言いましたけれども、5年たってこの園田学園女子大学がどういうふうにしてつながりプロジェクト、それから経験値教育で得てきたこと、今、取り組んできたことをどういうふうに継承していくのかなというところにあるのかなというふうに、私は聞かせていただきました。

その中には俯瞰して見る力っていうもの、キーワードとしていただきました。俯瞰するっていうところに関しましては自分がどっぷりその中に入っているんだけれども、少し引いて見る。客観的に見るっていう辺りについては自己評価の中でもできることですし、つながりプロジェクトのこの間、発表会がありましたけれども、それも他チームのプロジェクトがどのように動いてきたのかっていうことを評価していく中で、そういう力も付けていくことができるのかなというふうに思いますし。

それから2人の先生からいただきましたように、しっかりと自分の経験、それを言語化していく。つらい体験であろうが、なんであろうが。それから飛びぬけた経験、

あなたにしかできない経験。そういうふうなものの中から自分がどれだけ今、力を持っていて何ができないのか、できるのか。それを言語化する。それを他の人と相互理解し合いながら、できた喜び、分かり合える喜びを感じられるような、そういうプログラムを考えていく必要があるのかなというふうに、私は少し引いたところで見ながら感じたところです。

そして目指すところっていうのは大学で得る知識っていうのはまだ大学生の時代の18歳から22歳の間でのところなので、まだ浅い部分があるんだと思うんですけども、それを社会人になって知恵に変えていく。自分の生きる人生の糧にしていけるような、そういう変換を図れるようなきっかけづくりも、こういうふうな経験値教育の中でのプログラムに求められるところのかなというふうに思います。それは自分自身として認識するというふうなところ、自分の見つめ直し、自分の育ちをどういうふうに高めればいいのかっていうところに最終的にはつながっていくのかなと思います。

それについてはリベラルアーツの話も出てきましたけれども、本当にその辺りっていうのは私も看護学教育の真ただ中において、そこら辺のところは少し弱いのかなというか、弱いというのは、学生はたちは学んでいるんですけども、私たちの認識、意識が弱いのかなというところを感じているところなんですけれども、やはり人としての基盤づくりをしていく中での教養教育の大事さっていうのは、きょうも先生がたのご提案の中から再認識できたところかなというふうに思います。ですので、人として育つ、育っていく、生き抜く知恵を得ていく、生き抜く力を得るといような辺り

をキーワードとしながら、これからのこの5年間を糧としながらというか、基盤としながら本学の教育を考えていく、発展させていければというような形で、このシンポジウムを閉じていきたいというふうに思います。

大変お忙しい中、きょう登壇いただきました、尼崎市市長、稲村和美先生、それから東洋学園大学学長、原田規梭子先生、本当にどうもありがとうございました。

大学COC関連シンポジウム 報告会

年度	開催日	タイトル
H25	3月16日(日)	地(知)の拠点整備事業 大学COCキックオフシンポジウム
		<ul style="list-style-type: none"> ・基調講演「大学COC事業で大学に望む・期待すること」 松坂浩史(文部科学省大学改革推進室前室長) ・事業説明「経験値教育ー経験値評価システムー」 大江篤(地域連携推進機構副機構長) ・パネルディスカッション 船木成記(尼崎市顧問)×小林史人(尼崎商工会議所産業部長)× 大槻真佐子(尼崎市民代表)×大江篤(地域連携推進機構副機構長) ・経験値評価システムのデモンストレーション ・地域志向教育研究9プロジェクト デジタルポスターセッション
H26	2月11日(水)	地域志向教育研究報告会
		<ul style="list-style-type: none"> ・地域志向教育研究10プロジェクト報告 ・大学COC事業 対談「子どもたちの未来に向けてー尼崎の教育の現状と課題ー」 徳田耕造(尼崎市教育長)×大江篤(地域連携推進機構副機構長)
H27	8月30日(日)	地(知)の拠点整備事業 中間報告会「地域創生と経験値教育」
		<ul style="list-style-type: none"> ・基調講演「地域創生と経験値教育」 大江篤(地域連携推進機構副機構長) ・地域志向教育研究10プロジェクトポスターセッション ・経験値教育学生報告「尼崎で学んで」 ・地域志向教育研究フォーラム 山田雄司(三重大学教授)×榎村寛之(斎宮歴史博物館学芸員)×京極夏彦(小説家)× 大江篤(地域連携推進機構副機構長)
H28	2月11日(木)	地域志向教育研究報告会
		<ul style="list-style-type: none"> ・基調講演「北九州市立大学における地域連携・実践型教育の展開ー地域の担い手としての大学生発見ー」 真鍋和博(北九州市立大学教授) ・地域志向教育研究10プロジェクト報告 ・大学COC事業 対談「大学と地域の今後」 真鍋和博(北九州市立大学教授)×船木成記(尼崎市顧問)×大江篤(地域連携推進機構副機構長)
H28	2月11日(土)	つながりプロジェクト2016発表会
		<ul style="list-style-type: none"> ・21のプロジェクトを履修した学生(本学2回生)による成果発表
H28	3月4日(土)	地域志向教育研究報告会
		<ul style="list-style-type: none"> ・講演1「学部横断的な地域志向教育」 中野洋平(島根大学地域未来戦略センターCOC事業部門長) ・講演2「地域志向教育における社会的コンピテンシーの育成」 星野敦子(十文字学園女子大学地域連携推進機構副機構長) ・地域志向教育研究11プロジェクト報告
H29	1月20日(土)	つながりプロジェクト2017発表会
		<ul style="list-style-type: none"> ・21のプロジェクトを履修した学生(本学2回生)による成果発表
	2月10日(土)	地域志向教育研究報告会及び大学COC事業報告会

地域志向教育研究5箇年実績

	研究代表者	研究テーマ	H25	H26	H27	H28	H29	
1	人間健康学部 堀田博史 教授	1人一台のタブレット端末導入の尼崎市モデル小学校、中学校、高校版の作成	←→					
2	人間健康学部人間看護学科 山本恭子 教授	地域に向けた手洗い指導の拠点の構築－継続した取り組み－	←→					
3	人間教育学部児童教育学科 大江篤 教授	地域資源を活用したまちづくりモデル構築のための基礎的研究	←→					
4	人間健康学部人間看護学科 野呂千鶴子 教授	災害伝承を活用した地域防災教育プログラム構築に関する研究	←→					
5	人間健康学部食物栄養学科 餅美知子 教授	健康意識の高い町・尼崎の土台づくりと食育の定着について	←→					
6	人間健康学部総合健康学科 衣笠治子 教授	庄下川の河川環境を利用した児童生徒の為の環境学習プログラムの構築	←→					
7	人間健康学部人間看護学科 林谷啓美 講師	尼崎市に住む高齢者のための運動交流プロジェクト実践と普及－人つむぎ尼つむぎ－	←→					
8	人間健康学部 難波宏司 准教授	学生を主体とした、地域学校への情報教育応援活動				←→		
9	人間健康学部食物栄養学科 深津智恵美 教授	「生活」をテーマに、地域に根差した生涯学習プログラムの開発 生活の知恵再発見(食生活、衣生活編)				←→		
10	人間健康学部総合健康学科 木田京子 助教	尼っ子のスポーツ振興プロジェクト				←→		
11	人間教育学部児童教育学科 影浦紀子 講師(※在籍H28迄)	地域と大学の連携・協働による子ども・子育て支援			←→			
12	人間健康学部 吉永尚 准教授	地域日本語教育への提言－ボランティア育成の実践と課題－		←→				
13	人間健康学部総合健康学科 江寿和子 教授	「地域に求められる養護教諭」養成の在り方－保健室ボランティア「保健室園女(援助)隊」の活動を通して－			←→			
14	人間健康学部人間看護学科 竹元恵子 准教授(※在籍H26迄)	地域と大学の連携・協働による子ども・子育て支援者の課題解決－尼崎市における子ども・子育て支援の実態を踏まえて－	←→					
15	人間健康学部人間看護学科 中村陽子 教授(※在籍H26迄)	高齢者がその人らしく安心して暮らせる尼崎づくり－高齢者がこれまでの経験と生涯学習の成果を地域で生かすための検討－	←→					

まちづくり解剖学一覧

年度		開催日	タイトル
H25	第1回	8月8日(木)	尼崎市立杭瀬小学校と本学の連携事業～杭瀬小学校区センター構想～
	第2回	10月10日(木)	尼崎市を通して学ぶ本学地域看護学教育の特色
	第3回	12月12日(木)	公衆栄養～学生の実践活動～
	第4回	2月13日(木)	児童教育学科の地域連携について
	特別編	3月24日(月)	住み慣れた地域で安心安全に暮らすための生活環境を考える
H26	第1回	4月10日(木)	学生地域連携推進委員会発足発表会
	第2回	6月12日(木)	総合健康学科とスポーツ関連の地域連携
	第3回	8月7日(木)	学生によるプロジェクトプラン発表
	第4回	10月9日(木)	地域資源を生かした安心・安全なまちづくり～中間報告～
	第5回	12月11日(木)	尼崎の課題解決に学生がチャレンジ!
	特別編	3月19日(木)	防災・減災～女子学生からのメッセージ～
H27	第1回	4月30日(木)	尼崎と海外を考える
	第2回	6月12日(木)	平成27年度のつなGirl活動&園田の尼崎市制100周年事業
	第3回	7月23日(木)	学生によるまちづくり発表会「訪れたい街 住みたい街 尼崎」
	第4回	9月24日(木)	みんなのサマーセミナー「大学として関わった意見・提言」
	第5回	11月12日(木)	地域とつながる大学
	第6回	1月7日(木)	若者・いのち守り隊～私たちにできること～
	第7回	3月11日(金)	防災・減災シンポジウム「大学が地域に発信できること、地域が大学に求めること」
H28	第1回	5月26日(木)	住みたい街、訪れたい街「猪名寺」のまちづくり
	第2回	7月14日(木)	「みんなのサマーセミナー」に向けて
	第3回	8月4日(木)	留学生との交流を通じて異文化理解を深める
	第4回	11月10日(木)	「尼いも」と園田学園女子大学
	第5回	1月12日(木)	若者の自殺予防～私たちにできること～
	番外編	2月25日(土)	尼崎城活用ワークショップ
	特別編	3月10日(金)	災害伝承～防災・減災を考える～
H29	第1回	5月25日(木)	「つなげよう尼崎と学生の輪」～あまがさきを私たちのホームへ～
	第2回	7月20日(木)	「わがまちまちづくり」～ここが工夫のしどころ～
	第3回	9月28日(木)	尼崎市の地域・学校 協働活動とまちづくり
	第4回	11月16日(木)	インターンシップのあれこれ
	第5回	1月11日(木)	まちの課題解決に取り組む『大学』
	第6回	3月8日(木)	防災・減災を考える

つなGirl主催／協カイベント一覧

年度	開催日		イベント名（協力団体名）
H26	5月5日(月)	協力	あまテラサカス（尼崎市青年会議所）
	8月6日(水)	主催	「まるまる企画つくり」学内共同勉強会
	10月18日(土)	主催	キッズフェスティバル 「こども×ちいき＝みらい～めっちゃ×2つながるッ!～」
	10月26日(日)	協力	尼芋奉納祭（尼いもクラブ）
	2月28日(土)	協力	子育て親育ちサミット（地域連携推進機構 子育て支援研究チーム）
	2月28日(土)	協力	ヤギと行く森の冒険（あまがさき環境オープンカレッジ）
	3月28日(土)	主催	つながるパラダイス「つなが～る作戦Part1」
H27	5月27・28日(土・日)	協力	カエルキャラバン（尼崎市青年会議所）
	5月30日(土)	協力	ひょうご女性未来会議 （ひょうご女性未来会議inあまがさき実行委員会）
	6月28日(日)	協力	川西市アンケート（兵庫県川西市）
	10月10日(土)	協力	森のピクニック（兵庫県阪神南県民センター、森の会議）
	10月30日(土)	協力	ヤギと一緒に秋を探そう（あまがさき環境オープンカレッジ）
	10月17日(土)	主催	キッズフェスティバル 「知(しる)×尼崎＝つながる つなが～る作戦Part2」
	10月24日(土)	協力	尼芋奉納祭（尼いもクラブ）
	2月13日(土)	協力	あまらぶワークショップ（兵庫県尼崎市）
H28	5月28日(土)	主催	新入生とつながる 尼崎めぐりツアー 2016
	6月4日(日)	協力	エコあまフェスタ2016（あまがさき環境オープンカレッジ）
	7月1日(金) ～10月31日(月)	主催	熊本震災支援募金活動
	10月17日(月) ～12月19日(月)	主催	笑顔発見！シャッターチャンス
	10月22日(土)	主催	キッズフェスティバル 「元気なあまっこ大集合！ つなが～る作戦Part3」
	10月23日(日)	協力	尼芋奉納祭（尼いもクラブ）
	12月17日(土)	主催	つながるパラダイス2「食べて、笑って、つながって、女子力up!!」
	3月15日(水)	主催	チラシ作り講座
H29	5月20日(土)	主催	つなGirlと一緒に出かけよう！尼崎巡り♪ in 2017
	6月3日(土)	協力	エコあまフェスタ2017（あまがさき環境オープンカレッジ）
	10月21日(土)	主催	キッズフェスティバル 「Go!Go! あまっこ隊 ～あまばへいざ出陣!～」
	10月22日(日)	協力	尼芋奉納祭（尼いもクラブ）
	11月6日(月) ～11月20日(月)	主催	ボランティアの木に花を咲かせましょう
	12月以降予定	主催	つながるパラダイス3

地域志向科目



つながりプロジェクト No.21 雪村先生
尼崎戎神社でフィールドワーク



つながりプロジェクト最終発表会 2018.01.20

Projects

Project 01. 幼稚園・小学校・高等学校での効果的なタブレット活用を考えよう！	04
人間健康学部教授 堀田博史	
Project 02. 地域における感染対策のための「手洗い講習会」	05
人間健康学部人間看護学科教授 山本恭子	
Project 03. 地域子育て支援	06
人間教育学部児童教育学科教授 大江篤	
Project 04. 庄下川環境を利用した地域住民の親水性の向上	07
人間健康学部総合健康学科教授 衣笠治子	
Project 05. 地域に住む高齢者との運動交流プログラム～人つむぎつむぎ～	08
人間健康学部人間看護学科講師 林谷啓美	
Project 06. 地域日本語教育への提言 – ボランティア育成の実践と課題 –	09
人間健康学部准教授 吉永尚	
Project 07. 小学校でのプログラミング教育	10
人間健康学部准教授 難波宏司	
Project 08. 子供のための郷土学習教材をつくる	11
人間健康学部総合健康学科教授 山本起世子	
Project 09. 地域の学びプロデュース演習	12
株式会社地域環境計画研究所 若狭健作	
Project 10. まちづくり企画実践演習	13
尼崎南部再生研究室 綱本武雄	
Project 11. 男女共同参画の視点をもった防災・防犯を考える	14
NPO法人男女協同参画ネット尼崎 岩田さやか	
Project 12. おもしろき こともなき世を おもしろく	15
NPO法人あまがさき環境オープンカレッジ 大原一憲	
Project 13. 尼崎の森中央緑地で生き物のつながりを楽しむ環境学習を作ろう	16
尼崎の森中央緑地環境学習森づくりコーディネーター 石丸京子	
Project 14. 図書館探検隊 図書館革命	17
同志社大学 久留島元	
Project 15. 地域の歴史を知り、地域への誇りや愛着を育む	18
あまがさき市民まちづくり研究会 正岡茂明	
Project 16. 「笑育」で21世紀型スキルを磨く	19
松竹芸能株式会社 宮島友香	
Project 17. 地元企業連携による休眠知財活用アイデアの創出	20
国文学研究資料館 上相英之	
Project 18. あまっこキャリア教育プログラムの開発	21
NPO法人 JAE 塩見優子	
Project 19. 防災 Re：デザイン – 若者が参加したくなるような防災を考えよう –	22
龍谷大学 石原凌河	
Project 20. みんなでつくる展覧会	23
イラストレーター/絵本作家 松野和貴	
Project 21. 尼崎の歴史・文化を世界に発信する	24
日本学術振興会特別研究員 (PD) / 東京大学 雪村加世子	

01 Project

幼稚園・小学校・高等学校での 効果的なタブレット活用を考えよう！

- 堀田博史 (人間健康学部)
- 小田桐良一 (人間健康学部)

■ 分野

学校教育

■ 身につく力

- ✔ 主体性
- ✔ 考えぬく力
- ✔ 気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

情報通信技術が急速に進展する社会において、学校教育でもその技術(ICT:Information and Communication Technology)を活用した授業展開が各地ではじまっています。これら教育の情報化は、2020年度を目標にして環境整備が行われています。

このプロジェクトは、ICT環境が整う近い将来を見据え、地域の小学校・中学校をモデル校として協働、ICT環境を整備し、よりわかりやすい授業を展開するために、ICTをどのように授業で活用するのかを考えていきます。

■ 授業計画の概要

この授業では、学校教育におけるICT活用の方法に注目して、授業でのICT活用の方法と技術を習得するために、(1)全国の先進的なICT活用事例を概観、(2)タブレット端末をはじめとしたICT操作技術の習得、(3)教育現場で授業参観することでICTの活用効果を実感、(4)そしてよりわかりやすい授業を実現するために、学生がICT活用した授業の指導案を提案します。

■ 地域に対してできる事

尼崎市には、小学校41校、中学校17校、高等学校が2校あります。全国的に見れば、小学校のICT環境は整備されている方です。しかし、中学校や高等学校は、整備が遅れているため、授業でのICT活用事例が蓄積されていません。

この授業を通して、学生から効果的なタブレット端末の事例をひとつでも多く提案することで、学校現場の教員に役立てると考えます。

また、園田学園幼稚園でも、タブレット端末のカメラやビデオ機能を活用した“遊びのプラン”を提案して、保育の広がりを考えます。

■ 連携先

尼崎市立教育総合センター
尼崎市立園田北小学校
尼崎市立尼崎双星高等学校

02

Project

地域における感染対策のための「手洗い講習会」

- 山本恭子 (人間看護学科)
- 田淵正樹 (食物栄養学科)
- 高橋順美 (地域連携推進機構)

■ 分野

健康づくり
生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトは地域における感染対策を目的とした手洗い指導を目的としている。授業では下記の事柄を習得できる。

1. 手洗いの効果を科学的に理解する
2. 手洗い指導の技術を習得する
3. 講習会の運営について学ぶ
4. 地域における感染対策の必要性について理解する

■ 授業計画の概要

1学期は、手洗いによる手の細菌数の変化について学び、手洗いを科学的見地から見つめ直し、有効な手洗い方法についての理解を深め、手技をマスターする。また、手洗いに関する衛生教育を立案し、学生同士で「手洗い講習会」を開催し、評価しスキルを高める。

2学期は、プロジェクトで立案した「手洗い講習会」を地域で行い、地域住民への保健指導の意義について考察する。

地域と園田学園女子大学の連携により、学生と地域住民がふれあうことにより、地域に「感染予防のための手洗い」を広めたいと考えている。

■ 地域に対してできる事

園田学園女子大学を拠点として感染対策に効果的な手洗いを広めることにより、尼崎市におけるインフルエンザやノロウイルス感染症のアウトブレイクを防ぐことを目的としている。このプロジェクトでは公民館との連携に於いて学生が「手洗い講習会」を開催し、学生と地域住民がふれあうことにより、地域に「感染予防のための手洗い」を広めたいと考えている。

■ 連携先

尼崎市教育委員会社会教育部の全ての公民館
(中央公民館/園田公民館/大庄公民館/小田公民館/武庫公民館/立花公民館)

03

Project

地域子育て支援

- 大江篤 (児童教育学科)
藤重育子 (児童教育学科)

■ 分野

子ども・子育て支援

■ 身につく力

- 主体性
- 考えぬく力
- ✔ 気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

子育て支援という取り組みは、制度的には新しいものですが、地域みんなで子育てを支えあうという行為自体は新しいことではありません。また、子育て支援は、さまざまな場所でさまざまな人がかかわって行われています。支援の内容も多様です。

このプロジェクトでは、まず、子育て家庭の置かれている状況、子育て支援の制度と現状について尼崎市を中心に理解し、地域踏査、フィールドワークを重ねながら地域の子育て支援の課題を明らかにします。そして、乳幼児期の子どもの発達について学び、教材製作、子育て支援プログラムの企画、実践を行います。

これらの経験を通して、子どもの発達を援助する際に、地域全体を視野に入れた在り方について考察していきます。

■ 授業計画の概要

1 学期は、連携先のゲストスピーカーの講義やワークショップによって、地域の子ども・家族を取り巻く実態・状況、子どもを育む地域の取り組み、多様な子育て支援の場・人・活動について理解していきます。7月に、地域のお母さん方へのインタビューを実施し、子育て中の母親理解と求められている支援を明らかにします。そして、それらの成果をふまえて、地域の子育て中の保護者と子どもを対象とした子育て支援プログラムの企画、実践を行います。

■ 地域に対してできる事

地域の子育て中のお母さん方がどのような支援を必要としているかを調査・研究します。そのうえで、学生の力で地域の子育て家族の方々に何ができるか、企画し、実践します。

■ 連携先

尼崎市こども青少年部こども政策課
尼崎市社会福祉協議会
尼崎市立立花公民館
立花「結'S」
NPO法人 やんちゃんこ

04

Project

庄下川環境を利用した地域住民の親水性の向上

●衣笠治子 (総合健康学科)

■ 分野

学校教育

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトは庄下川の親水性を高めるためのさまざまなプログラムを構築実施する。河川の側を歩き、実際に川の中を覗き込んでみると、都市河川でありながら、多様な動植物がみられる。幼児教育、学校教育の現場にプログラムや河川の生き物などの資料を提供することで、本学学生や地域住民にとって庄下川がより身近になり楽しめる場となってほしい。

■ 授業計画の概要

1学期は水環境の基礎的な知識を学ぶと共に、実際に大学周辺の庄下川でフィールド調査(水質の状況、生息している動植物、庄下川の持つ親水機能、立花地域の歴史など)を行う。また地域の児童を対象とした環境や理科分野に関するイベントにボランティアで参加する。夏休み中に小学生を対象とした親水プログラムを実施する。

2学期は、1学期に行った調査の結果を児童生徒の環境学習に役立つようにまとめ、発信するための媒体を作成する。児童生徒が自分の住む地域環境を理解し、楽しみ、誇りに感じ、さらには守っていくという意識を持つための方策を、考案実施する作業をする過程で、本学学生も同様に自らの学んだ大学地域を理解し、楽しみ、誇りに思えるのではないかと考える

■ 地域に対してできる事

庄下川は都市河川でありながら、多くの動植物が生息しており、利用の可能性はとてもおおい。しかし近隣の住民は、高度成長時代に汚れてしまった庄下川の印象が強く残っており、川で遊ぶ、虫や魚をとるといった行動はあまりみられない。我々の活動を通じて、植物や動物の多様さを近隣の児童生徒たちに紹介し、さらに親しみ深い河川とする。

■ 連携先

尼崎市健康福祉局衛生研究所

尼崎市経済環境局環境部環境保全課環境監視センター

05

Project

地域に住む高齢者との運動交流プログラム ～人つむぎ尼つむぎ～

- 林谷啓美 (人間看護学科)
- 藤澤政美 (総合健康学科)

■ 分野

健康づくり

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
- ✔ 気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトは、尼崎市に住む高齢者とともにオリジナル運動に取り組み、交流することにより、学生の地域に関する関心を高め、多世代交流のためのコミュニケーション能力の向上を目指します。さらに高齢者の健康について考えるとともに、自らの健康観についても深め、健康に暮らせるまちづくりについての考察を深める力を養います。

■ 授業計画の概要

このプロジェクトでは、1. 尼崎市・尼崎市に住む高齢者の特徴について学び、2. 高齢者に適した運動についての知識と技術を習得し、3. 尼崎市に住む高齢者とともにオリジナル運動を実施します。さらに、4. 学生と高齢者により効果的な運動を考え、実施します。以上をふまえて、「運動活用からみる健康に暮らせる街づくり」について考え、地域の課題解決のための提言を行います。

■ 地域に対してできる事

自治会等地域の方々、尼崎市立総合老人福祉センター、社会福祉法人尼崎市社会福祉協議会と連携・協働しながらオリジナル運動に取り組み、普及することにより、地域の方々の健康づくりに努めます。さらに、学生の地域に関する関心を高め、多世代交流・地域のコミュニティがさらに活性化することに寄与します。

■ 連携先

猪名寺長生クラブ連合会
あま体操(絆)
中難波はなみずき会
社会福祉法人尼崎市社会福祉協議会
尼崎市立総合老人福祉センター
社会福祉法人きらくえん けま喜楽苑

06

Project

地域日本語教育への提言 ーボランティア育成の実践と課題ー

- 吉永尚 (人間健康学部)
- 磯田宏子 (総合健康学科)
- 藤井雅英 (人間健康学部)

■ 分野

生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトは、日本語ボランティア教室など地域の異文化交流の現場に参加する事を通じて、国際的な経験値を高め、グローバルな人材としての素養を身に着けることを目的としています。

本学の交換留学生や日本語学級の外国人学習者と交流し、異文化について学び、日本語学習のお手伝いをする事によって、基本的な日本語知識や日本語教育法を身に着け、異文化交流のノウハウを学びます。本学の日本語ボランティア養成講座修了のボランティアの先生方とも交流し、具体的な教え方を学びます。学科を横断するメンバーの自主組織としてお祭りやイベントなど地域活動に参加し、異なった文化を持つ人たちと気軽に交流するためのいろいろなスキルを身につけます。

■ 授業計画の概要

1学期は、日本語・日本語教授法について基本的な知識を習得する事を目的とし、簡単な言葉を使って外国人とコミュニケーションが取れ、日常会話を教えることができるようにします。中国や韓国、ベトナムなど諸外国の食生活や若者文化などについても学びます。

2学期は、異文化理解の基本的な技術を学ぶ事を目的とし、異文化間ギャップに落ち着いて対応し、外国人に簡単な日本語や日本文化の紹介ができるようにします。日本の伝統文化についての教養も深め自国文化に関する素養を身に着けます。

■ 地域に対してできる事

尼崎市の在住外国人の方の地域日本語教育に貢献するため、日本語ボランティア教室での学習やイベントに参加させていただき、地域活動のお手伝いをします。また、大学と地域ボランティア、外国人の方達の交流の仲立ちとして、人的交流を広げることで、地域日本語教育の向上に貢献します。

グローバル社会に向けて、地域の異文化共生が課題となっていますが、一般的に異文化と接する機会は比較的少なく、スキルを学ぶ場も少ないのが現状です。本プロジェクトでは、大学、地域教育機関がタイアップすることで、学生が地域に住む外国人に直接対面し日本語教育を通して地域に貢献することができます。

■ 連携先

尼崎市教育委員会社会教育部(中央公民館 / 武庫公民館 / 大庄公民館 / 小田公民館)の各日本語学級

07

Project

小学校でのプログラミング教育

● 難波宏司 (人間健康学部)

■ 分野

学校教育

■ 身につく力

主体性

考えぬく力

気づく力

✔ コミュニケーション力

✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

本プロジェクトは、小学校でのプログラミング教育の推進を援助しようというものである。本学学生が、小学校に出向き、レゴブロックから作ったロボット(レゴマインドストーム)を使って、プログラミング(タブレット操作)を指導しようというものである。小学校での「プログラミング教育」は、次期学習指導要領に記載されており、2020年度から本格実施される予定である。実施内容及び実施科目や方法については、特に規定がなく各学校に委ねられている。これまで、小学校でのプログラミング教育の実践事例は少なく、また高等学校教科情報においても、プログラミングを積極的に取り扱って来なかったことから、現在は、効果的な指導法内容や方法についての模索が行われている。プログラミング教育の意義について緒論があるが、本プロジェクトでは、世界的な流れであるIT人材育成の一環として捉え、小学校段階での以下の内容の育成を目指すプログラミング教育を実施していく。1) コンピュータやプログラミングの概念的しくみ 2) プログラミング的思考力 3) ITやプログラミングに関する興味・関心 4) 主体性・探究性・実験的設計的考え

上記の目標に適する教材として、レゴマインドストームを選択した。レゴマインドストームは標準でセンサー4基、モータ3基を有しフレキシビリティに富んだ構成となっている。またプログラミングは流行しているビジュアル言語で、簡単にプログラミングが出来、プログラミングの成否がすぐに分かる。

これを使って、児童の主体性等を育む指導内容を構築し、小学校に提供していく。

■ 授業計画の概要

前期: レゴマインドストームの調整・プログラミング等の取得、教材作成

後期: 小学校に出向いてのプログラミングの指導、教材の公開の準備、活動のまとめ

■ 地域に対してできる事

小学校に対する、プログラミング教育の普及・援助。教材レゴマインドストームの貸し出し、指導案の提供

■ 連携先

尼崎市教育委員会 / 尼崎市教育センター / 尼崎市小学校校長会

08

Project

子どものための郷土学習教材をつくる

● 山本起世子 (総合健康学科)

■ 分野

学校教育

子ども・子育て支援

■ 身につく力

主体性

✔ 考えぬく力

✔ 気づく力

コミュニケーション力

✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトでは、まず、学生同士がいろいろなアイデアを気軽に活発に出し合えるような雰囲気づくりをする。そして、自らの足で町を歩き、住民の話を聞き、住民の活動を実際に見ることを通して、郷土学習教材の内容を発見していく。これまで注目されてこなかった、地域の文化や地域活性化への住民の努力を発掘し、子どもたちが誇りをもつことができるような教材をつくる。

■ 授業計画の概要

尼崎の子どもたちが、生まれ育った土地を深く知り、愛着と誇りをもつことができるような郷土学習教材をつくる。

1学期には、まず、尼崎の歴史、文化、社会問題について学び、各自の問題関心を絞っていく。それと並行して、大学周辺の、深い歴史をもつ地域(塚口神社を中心とする地域)の町並み、神社祭礼、地藏盆などの地域行事、昔の暮らし、自治組織(町内会、青年会など)の活動などについて、自らが町を歩きながら調査する。

6月以降2学期にかけて、調査をもとに郷土学習教材をつくる。教材の対象年齢、教材をどのような形態にするか(絵本、紙芝居、小冊子など)、どのような施設に教材を寄贈するかについては、メンバー間で話し合っ決めていく。

■ 地域に対してできる事

子どもたちが、生まれ育った地域に対する理解を深め、誇りと愛着をもつことに寄与したい。

■ 連携先

塚口神社

神社周辺地域の町内会・青年会など

09

Project

地域の学びプロデュース演習

● 若狭健作 (株式会社地域環境計画研究所)

■ 分野

生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

学生生活で学ぶ専門的な知識や経験を、地域での学びの機会として提供するために、自らの経験を客観視し、いかに魅力的に発信するかという編集能力やプロデュース能力が必要とされます。演習全体を通して50分授業をまとめあげることで、学生の伝えるチカラの向上につなげます。

■ 授業計画の概要

地域には様々な知識や経験をもった人が多く暮らしています。しかし私たちがそうした「街のプロ」のお話を聞く機会はすくなく、また「街のすごい人」たちは人知れず暮らしているものです。

2017年の夏に開かれる「みんなのサマーセミナー」で、尼崎双星高校の校舎を使い、街の人たちがセンセイになる学校ごっこを開催します。中学生、お坊さん、社長さん、市長さんと様々な地元の人たちとともに教壇に立ち、イベント運営を実践的に学ぶ機会とします。

■ 地域に対してできる事

様々な職業や立場を超えた人々からなる「みんなのサマーセミナー実行委員会」の運営にかかわることで、幅広い年代の学びと出会うことができます。また本事業は尼崎市における提案型協働事業に位置づけられているほか、実行委員会スタッフには高校生や他大学からのボランティアも参加しており、こうした多様な年代との協働で学生ならではの力を発揮することができます。

■ 連携先

みんなのサマーセミナー尼崎実行委員会
尼崎市市民協働局・男女参画課

10

Project

まちづくり企画実践演習

● 綱本武雄 (尼崎南部再生研究室)

■ 分野

生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

尼崎の特産品だったサツマイモ「尼いも」の収穫祭への出展を通して、尼崎南部地域に関わりながら企画立案について学ぶ演習です。単にイベントに出るだけではなく、ニーズを探り、出展に向けて企画案を練り、実行後は検証もおこなうという一連の経験をもって、説得力と実現性の高い企画力を身に着けます。

■ 授業計画の概要

前半は「郷土野菜の情報を集めて発表する」「イベントを見学して、主催者の意図を探る」といった課題に取り組みながら、基礎的な表現力の習得と事例研究をおこない、企画立案に必要な技術を学びます。

後半は、尼芋奉納祭の実行委員会とともにイベントの企画立案をおこないます。会場の下見や委員へのヒアリングを通して、イベントにどのようなニーズや課題があるかを考え、「必要と思われるもの」を企画・実践します。企画立案においては、各人の特技や専門性を生かすことに重きを置いて進めます。

■ 地域に対してできる事

尼崎市内でも屈指の人気を誇る夏祭りや、プロの噺家を呼んで開催されている地域寄席など、意欲的な取り組みが光る神社を舞台に、地域住民の方々とともに新しい「お祭り」をつくります。神社のある尼崎南部地域は、少子化と高齢化が進む、わが国の社会問題の縮図であるといっても過言ではありません。そのような地域で、子どもたちに向けてできること、多世代が交流できることに、真摯に楽しく取り組んでいきます。

■ 連携先

尼いもクラブ

尼崎総氏神貴布禰神社

11 Project

男女共同参画の視点をもった防災・防犯を考える

● 岩田さやか (NPO法人男女協同参画ネット尼崎)

■ 分野

生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
- ✔ 気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

この講義では、尼崎市の女性センターの歴史や役割を知り、女性問題や男女共同参画社会への取り組みを学びます。女性問題や男女共同参画社会を目指すために取り組まなければならない課題は、自分と繋がっているということに気づき、解決策を考えます。

テーマは「男女共同参画の視点をもった防災・防犯を考える」とし、女性の視点を活かした防災対策や、防災への女性の参画、多様性に配慮した避難所づくり等を考えたいと思います。

■ 授業計画の概要

授業は、学生同士のワークを中心に進めます。課題解決に向けて「自分の考えをまとめ、発表し、共有する」プロセスを大切にします。また、女性問題解決のために各分野で活動している女性ゲストスピーカーの講義を予定しています。学生たちには、ミッションと責任を持って活躍する自立した女性たちの生き方を、将来の参考にしてほしいです。

女性センターが開催している男女共同参画週間事業(7月)、あまがさき女性フォーラム(11月)に参画します。

■ 地域に対してできる事

毎年11月に女性センターが開催している「あまがさき女性フォーラム」内ワークショップで、学んだ成果を発表したいと思います。

■ 連携先

尼崎市女性センター・トレピエ

12

Project

おもしろき こともなき世を おもしろく

● 大原一憲 (NPO法人あまがさき環境オープンカレッジ)

■ 分野

生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
- ✔ 気づく力
コミュニケーション力
協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトの前半では、「環境」というキーワードをもとに「あまがさき環境オープンカレッジ事業」に関する事柄を題材に「尼崎市の環境基本計画」に基づいた6つの視点から活動します。

学内での授業での話し合いを基に塚口駅前オープンスペースを利用して新しい人・もの・場と出会い体験を通して楽しく生きるための「環境」について考えます。また、後半では「大庄おもしろ広場」という社会実験の場で起きている「でき事」を通じて楽しく生きるための原理を考えます。

知識ではなく、現場の事実から見つけ出すために科を横断した新しい仲間と仲良く協力しながら、今後の生き方にプラスとなるものを自ら導き出すことができれば幸いです。

■ 授業計画の概要

1学期は、学内での授業において、新しいなかまとの相互理解を深めるために毎回違った観点から仲間を形成し、お互いの共通意識や違いを尊重する心を醸成します。材料としては環境活動を6つの分野①つながり楽②リサイクル楽③しごと楽④いきもの楽⑤くらし楽⑥ちきゅう楽の観点からお互いの思いを出し合い考えや意見を共有し、環境活動に携わる人々との対話を通してボランティアの世界について考えます。

2学期は、夏休み期間中に「おもしろ広場」での現場実習体験を行い、その中で「楽しく生きる」ための素材を収集し、それをもとに学内において「楽しく生きるための原理」について考察を深めます。前後期を通じて考えた内容を自らの行動にどのように活かすかを考え、「その成果をグループでまとめ、1月20日に向けた発表できる姿にまとめていく。

■ 地域に対してできる事

環境活動を行っている団体や人々の活動を理解し、その活動に対して助力し、元気を与えてくれる。

また、「若い、女性」の観点から新しい視点で活動のよさを再評価させてくれたり、「若い市民活動」を行う観点から改善するためのヒントとなる意見を出せる。

■ 連携先

NPO法人あまがさき環境オープンカレッジとその関連団体
大庄西中跡地活用団体「大庄おもしろ広場」とその関連団体

13

Project

尼崎の森中央緑地で生き物のつながりを 楽しむ環境学習を作ろう

● 石丸京子 (尼崎の森中央緑地環境学習森づくりコーディネーター)

■ 分野

学校教育
生涯学習

■ 身につく力

主体性
考えぬく力
✔ 気づく力
✔ コミュニケーション力
✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

尼崎の森中央緑地では、工場跡地の埋め立て地に地域の生物多様性を人の手によって創り出す、新しい森づくりを行っています。タネから生き物いっぱいの森を目指す100年の森づくりは、自然資源の乏しい尼崎にとっては、環境学習の拠点としての機能も期待されています。

このプロジェクトは、実際の森づくりを題材にして、子どもたちが生物多様性を楽しく学び、理解する環境学習プログラムを開発し、実際に自分たちで環境学習イベントを開催して子どもたちへ提供する、実践的な環境学習研究を行います。

■ 授業計画の概要

尼崎の森中央緑地での実習を基本とします。生物多様性を創り出す森づくりの内容を理解し、子どもたちに生き物いっぱいの森の楽しさや大切さを伝えるプログラムを企画作成します。グループごとのテーマに沿って協力し合いながら作成します。また毎月開催されている子供向け環境学習イベントに参加し、活動のサポートをすることで、子どもたちへの接し方を経験します。完成したプログラムを、中央緑地と共催のイベントを開催し、実際に子どもたちへ提供し、その効果を検証します。

■ 地域に対してできる事

尼崎市は市全域が市街化区域となっており、まとまった自然緑地に乏しい環境である。子どもたちへの環境教育では、日々の生活の中で身近な自然と触れ合うことが非常に重要と考えられているが、尼崎ではそのような機会に恵まれない子も多い。中央緑地の自然を利用して、生物多様性を楽しく学べる教材を開発することで、今後環境学習の活発な利用につながることを期待される。また自然活動のボランティア団体は年配者が多く、大学生などの若い世代が森づくりへ関心を持ち、参加につながることで、活動の継続性を高めることができる。

■ 連携先

兵庫県立尼崎の森中央緑地パークセンター
アマフォレストの会

14

Project

図書館探検隊 図書館革命

● 久留島元 (同志社大学嘱託講師)

■ 分野

生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
- ✔ 気づく力
コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

地元の図書館に行ったことはありますか？ 本を借りたことはありますか？ ほかにどんな本があるか知っていますか？ 街の本屋さんに比べて、どんな魅力があると思いますか？ 多くの学生にとっては図書館といえば受験や資格の勉強をするための場所だったかもしれません。しかし、図書館の利用がそれだけではもったいない。活動を通じて図書館の魅力を発見し、地域の資源としての図書館の魅力をアピールできるようなプロジェクトを考えていきたいと思います。本プロジェクトは、学生自身が主体となって図書館の魅力と役割を考え、自ら企画し、発信していくプロジェクトです。

■ 授業計画の概要

1 学期は、まず連携先である「図書館」について学びます。すなわち、市内外の図書館の取り組みを実地で見学し、職員や司書の方からお話をうかがいながら、図書館の役割などを学んでいきます。その後、クラスをA広報、B企画の2班に分け、自分たちの活動に取り組みます。2 学期以降はそれぞれの班に分かれ、学生主体で行動することになります。広報班は図書館をどうしたらアピールできるかを考え、広報媒体を作成します。企画班は図書館の魅力を発信するため、学生主体のイベントを企画、実行します。

■ 地域に対してできる事

尼崎市においては、図書館による種々の取組の結果、近年低下傾向であった貸出冊数が増加に転じるなど、意欲的な事業改革の成果が現れています。これに加え、市の施策方針では地域利用者のニーズにこたえ、関係機関との連携を深めることが目指されています。本プロジェクトでは一年間を通じて、地域と図書館について理解を深め、地域の資源としての図書館の魅力を発信します。

■ 連携先

尼崎市立中央図書館

15

Project

地域の歴史を知り、地域への誇りや愛着を育む

● 正岡茂明 (あまがさき市民まちづくり研究会)

■ 分野

学校教育
生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
- ✔ 考えぬく力
- ✔ 気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトでは、尼崎の若者たちに地域への誇りや愛着を育むため、尼崎の豊かな歴史を実感してもらう。学校における歴史の科目で学んだ知識を地域の歴史に結びつけるため、校外見学を実施する。尼崎にはそうした豊かな歴史を実感できる場所が多い。

来年築城400年に合わせて復元される尼崎城や城下町の風情を残す寺町など阪神尼崎駅周辺の歴史の豊かさを基にして、若者たちが住み続けたいまちづくりプランを若者の目線で考え、作成し、発信する事ができればと願っている。

■ 授業計画の概要

1学期は、江戸時代を中心に尼崎城や尼崎藩の役割などを学ぶ。文化財収蔵庫にも訪れ、尼崎城について学ぶ。城内地区の明城小学校が行っている地域の歴史遺産を全校生が訪ねる「明城なかよしラリー」を参考にして、阪神尼崎駅周辺の歴史遺産を学ぶ。

夏季休業中に、尼崎藩の広さを学ぶための湊川神社周辺への校外学習と前述の「なかよしラリー」のコースを歩く校外学習を計画している。

2学期は、これまでの授業や校外見学などで得られた知識や情報を基にして、まちづくりプランの検討・作成を班に分かれて行い、学年末の発表会へ向けての準備を進める。

■ 地域に対してできる事

来年、復元尼崎城が完成予定である。このような時期に尼崎の若者たちが城や歴史を活かしたまちづくりを考え発表する。このような取組みが、若者が尼崎に誇りや愛着を持ち、尼崎に住み続け、地域社会の中核となって、様々な活動を担っていけるような好循環を生み出す第一歩になればと願っている。

■ 連携先

尼崎市企画財政局ひと咲きまち咲き推進部

尼崎市立文化財収蔵庫

尼崎市立地域研究史料館

尼崎市立明城小学校

16

Project

「笑育」で21世紀型スキルを磨く

● 宮島友香 (松竹芸能株式会社)

■ 分野

学校教育

■ 身につく力

- ✔ 主体性
- ✔ 考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

グローバル化は加速度的に進展し、多様な人と協働する社会へと進む中、変化に対応し未来を切り開く力が大切になっています。このプロジェクトでは、まず笑いの仕組みや、メソッド化したボケの発想法を学習し、漫才づくりを通してゼロから新しいものをつくりあげるプログラム「笑育」*を体験することで、学生が主体的に他者と協力し、課題を解決する力を育成します。その後、地域の子どもたちとの交流や、学校の先生方の協力を得て、児童が「楽しく学び、主体的に、友だちと協力して課題に取り組む」ことができる授業を考えて、実施します。学生は、実践を通して「笑育」で学んだことを地域にどのように活かすことができるのかを考えます。

*「笑育」とは松竹芸能(株)が開発した「笑い」を活用しコミュニケーション力や表現力、思考力を育成するプログラムです。

■ 授業計画の概要

1学期は、松竹芸能が開発した「笑育」を体験し、プロの漫才師やアナウンサーからアイデアの発想法や発声などについて学びます。また、学生同士でコンビを結成し、漫才づくりを通してコミュニケーション力や表現力などを身に付けていきます。

2学期には、地域の小学校で児童が主体的に課題に取り組むことができるプログラムを開発、実施します。その後、活動を通して子どもたちのコミュニケーション力育成や、主体的に課題に取り組むために役立つプログラムをまとめます。

■ 地域に対してできる事

地域の子どもたちに、多様な人と協働し、自ら課題を発見して解決策を見出す思考力や、表現力を楽しく育成するプログラムを実施します。

■ 連携先

尼崎市立園田北小学校

17 Project

地元企業連携による 休眠知財活用アイデアの創出

● 上相英之 (国文学研究資料館)

■ 分野

生涯学習

■ 身につく力

主体性

考えぬく力

気づく力

✔ コミュニケーション力

✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトは富士通株式会社の持つ多くの休眠特許の内、数点の特許を開放してもらい、その特許技術を活用した商品アイデアを、受講生の皆さんのグループワークを通して考えてもらいます。

その後、連携先である尼崎信用金庫の支援の下、尼崎・阪神地域の中小企業をリストアップし、アイデアを実現できる技術をもった企業とのコンタクトを受講生主体で行い、企業からの助言を受けながらアイデアのブラッシュアップを繰り返し、実現可能なアイデアにまで仕上げます。

■ 授業計画の概要

前期前半(4月～5月)は、先ず富士通株式会社からの特許の説明、アイデアを元に起業した人の講演、尼崎市の地域課題など、アイデア創出の為の情報のインプットを中心に行います。前期後半(6月～7月)はインプットした情報を元にしたアイデア創出と選別を行います。グループごとに選ばれたアイデアを元に、夏休みの間に連携企業を選別します。後期は、先ず連携先中小企業訪問を行い、10月以降、企業からの助言を得ながら発表とブラッシュアップを繰り返し、アイデアの実現可能性を高めていき、11月後半にアイデアの完成を目指します。

■ 地域に対してできる事

創出した商品アイデアを用いて地域中小企業の商品化支援を行い、地域経済の活性化を目指します。

■ 連携先

富士通株式会社

尼崎信用金庫・尼崎市中小企業

18

Project

あまっこキャリア教育プログラムの開発

● 塩見優子 (NPO法人JAE)

■ 分野

学校教育
子育て支援

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトでは、小学校の先生方や校区の地域の方々と協力しながら、小学校におけるキャリア教育プログラムを考えていきます。

地域の子どもたちとその育ちを支える方々との出会いの中で、これからの社会や地域を担う子どもたちにつけたい力を考えるとともに、自分たち学生に担える役割を考えます。これは、学生自身のキャリアを振り返ったり見通しを持ったりすることにも生きると考えています。

■ 授業計画の概要

1学期は、キャリア教育の基本的な考え方を学びながら、様々な立場でキャリア教育に携わっている方々などと出会い、そのビジョンや取り組みへの理解を深めます。また、授業づくりや授業実施のトライアルとして、「第3回みんなのサマーセミナー」に出講し、“センセイ”として授業を行います。

2学期は、小学校の先生方や地域の方々の意見を聴きながら、授業の企画、調整及び準備を行い、実際に小学校で授業を実施します。実施後は、関係者からの意見を踏まえて改善案を作成し、キャリア教育プログラムとしてまとめます。

■ 地域に対してできる事

小学校においてもキャリア教育の体系化を進めつつある尼崎市において、地域と協働しながらキャリア教育をすすめる一つのモデルをつくります。また、毎日子どもたちに向き合う学校の先生方と、豊富な地域資源とをつなぎ、調整する役割を学生が担います。

■ 連携先

尼崎市

尼崎市教育委員会

尼崎市立杭瀬小学校

同小学校区地域の皆さん

19

Project

防災 Re:デザイン —若者が参加したくなるような防災を考えよう—

● 石原凌河 (龍谷大学政策学部)

■ 分野

生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
- ✔ 考えぬく力
- ✔ 気づく力
- コミュニケーション力
- 協働する力

■ プロジェクトの特色

既往の防災ゲームやまちづくりの体験と、人と防災未来センターでの体験学習を通じて、災害から命や暮らしを守るための基礎的な知識と実践力を習得することを狙いとします。また、尼崎市築地地区でのフィールドワークや防災イベントの企画を通じて、多様な主体と協働しながら地域の課題発見とイベントの企画実現を通じて、地域防災活動の担い手としての素養や態度を育成することを目標とします。

若者が参加したくなる新しい防災のあり方を地域の方々と一緒に考えてみましょう。

■ 授業計画の概要

未曾有の大災害が全国各地を襲い、自然災害による被害が後をたちません。こうした災害から、かけがえのない命や暮らしを守るためには、一人ひとりが適切な対策や行動を促し、地域全体で災害から守ろうとする姿勢が重要です。そのため、大学生等の若い世代が防災活動に積極的に参加することが不可欠ですが、ほとんどの若者が消極的なのが現状です。まさに、若者が参加したくなるような防災のあり方を再構築(Re:デザイン)することが求められています。1学期は既往の防災ゲームやまちづくり手法を実際に体験しながら、災害から命や暮らしを守るために必要となる最低限の知識や技術を習得します。また、阪神・淡路大震災による被害とその復興や若者への語り継ぎへの方法について、人と防災未来センターでの体験学習や、尼崎市築地地区での調査を通じて考えていきます。夏休みは、尼崎市築地地区を舞台に、地域住民の方々と意見交換を行いながら、阪神・淡路大震災の教訓を基に、若者が参加したくなるような防災イベントを企画・運営します。2学期は、これまでの活動を振り返りながら、活動の成果と課題についてまとめていきます。

■ 地域に対してできる事

防災まちあるきと被害想定に対する意見交換の機会を通して、築地地区の災害時の課題や防災資源を発掘します。また、若者の視点による防災活動を築地地区で提案・実践することにより、新しい防災活動の可能性について地域の方々に考えてもらう機会とします。

■ 連携先

- ① 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター
- ② 尼崎市中央地域振興センター
- ③ 尼崎市築地地区

20 Project

みんなで作る展覧会

● 松野和貴 (イラストレーター・絵本作家)

■ 分野

生涯学習
子育て支援

■ 身につく力

主体性
考えぬく力
✔ 気づく力
✔ コミュニケーション力
✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトは、展覧会を一緒に作り上げていくことが目的です。市営の美術館「あまらぶアトラボ A-Lab」を拠点とし、アーティスト、市の職員、学生で協力し、展覧会の企画、運営を行います。展覧会を通して、何をどのように伝えるのか、どうすれば楽しんで見てもらえるのかということを探し、実践します。個の力を大切に、つながることの重要性、また伝えることの大切さを学びます。

■ 授業計画の概要

アーティスト、市の職員と触れ合うことから始まります。お互いの考えてることを話し、自分にできること、役割を見つけることが目的です。一年を通じて、展覧会の開催という共通のゴールまでどのように進むかを検討し、成功を目指します。

1学期は施設への理解を深めるために現場見学し、アーティストと話し、お互いを知ります。その後アーティスト開催のワークショップを通じて、どのように作品ができていくのかを体験します。2学期は展覧会の広報、展示設営、に対して具体的な行動をしていきます。役割を理解し、自分がどのように行動すればよいかを現場で感じます。

そして、展覧会の開催を迎えます。

■ 地域に対してできる事

あまらぶアトラボ A-Labの目的の一つとしてアートを通じて、市外から人を呼ぶこと、があります。この授業を通して地域にできることは、大学生が企画、運営に加わることによって集客の幅を広げることが大きな目的です。学生目線でのアプローチ方法を模索し、今までに施設に来たことのない客層を呼び込み、地域施設の活性化を目指します。

■ 連携先

あまらぶアトラボ A-Lab
アーティスト 野原万里絵氏

21 Project

尼崎の歴史・文化を世界に発信する

● 雪村加世子 (日本学術振興会特別研究員 (PD) / 東京大学)

■ 分野

学校教育

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

近年、外国人インバウンド観光客の増加を背景として、地域の文化・歴史遺産の魅力を国際発信するチャンスが訪れている。しかしながら多様な習慣・嗜好を持つ外国人の訪問は、案内表示の多言語対応や、宗教上食べられるものを提供する飲食店探しなど、時に思いもかけない問題を地域社会に突きつける。

このプロジェクトは、園田学園女子大学が位置する尼崎をフィールドとして、地域の歴史・文化を外国人に紹介し、街歩きを楽しんでもらうにはどうすればよいかという問題を、地域・長期留学生・日本人学生が協同して考える試みである。

■ 授業計画の概要

授業は長期留学生と日本人学生の合同で行われ、学内外の講師による講義、小グループによるディスカッションとプレゼンテーション、連携先の協力を得ての学外フィールドワークから構成される。最終的には留学生向けの尼崎の歴史文化地区(寺町、尼崎糸びす神社)の観光案内地図を作成することを目標としている。

この授業では学生の主体性を重視しているため、学生の発見や興味関心をもとに、適宜グループ学習と発表を課している。留学生と日本人学生が議論を通じて、異文化のおもしろさに気づき、自国や地域の歴史・文化の魅力を再発見することが狙いである。

■ 地域に対してできる事

長年日本文化の国際発信に取り組んでいる尼崎糸びす神社や、地域の歴史・文化を保存し、伝える活動を担う尼崎市立地域研究史料館と連携して、正確な日本文化・地域の歴史を学んで身に付け、これを国際的に発信できる人材を世に送り出すことができる。

また、3回の街歩きやグループでの調べ学習を通じて、尼崎出身の学生もそうでない学生も、これまで気づけなかった地域の魅力を知り、若い学生の目線で発信してほしいと考えている。

■ 連携先

尼崎糸びす神社

尼崎市立地域研究史料館

経験値教育と経験値評価システム

本学は「実学的な女子教育」を志向し、多くの学生が専門職として激しく多様に変化する社会に出ます。そこでは、「深い教養」や「人間としての深み」が備わった人材が求められます。そのためには、専門的な内容を身につけるだけでなく、主体的、能動的に学ぶ姿勢を養い、多面的、多角的に事象を捉えることが重要となります。そこで、本学が尼崎市とこれまで培ってきた〈つながり〉の基盤にたつたうえで、地域の課題解決を主眼とする地域志向科目として2年次に設定したプロジェクト型演習科目（必修）が「つながりプロジェクト」です。この科目では、学部学科の専門領域を越えた多分野協働の学びのコミュニティのなかで学修します。この科目は「経験値教育プログラム」の一つです。経験値教育で目指す「経験値」は、教室で理論的なことを学んだ上で、地域での実践を通して、理論的なことが証明されたり、理性的に考え、納得できたりすることによって養われます。教室で学んだことが社会でどう活かされるかを実感することで理論と実践が結びつき、さらに次の学びへと発展していきます。つまり、経験値教育は循環型の教育といえます。この経験値教育で修得できる力が「経験値」です。

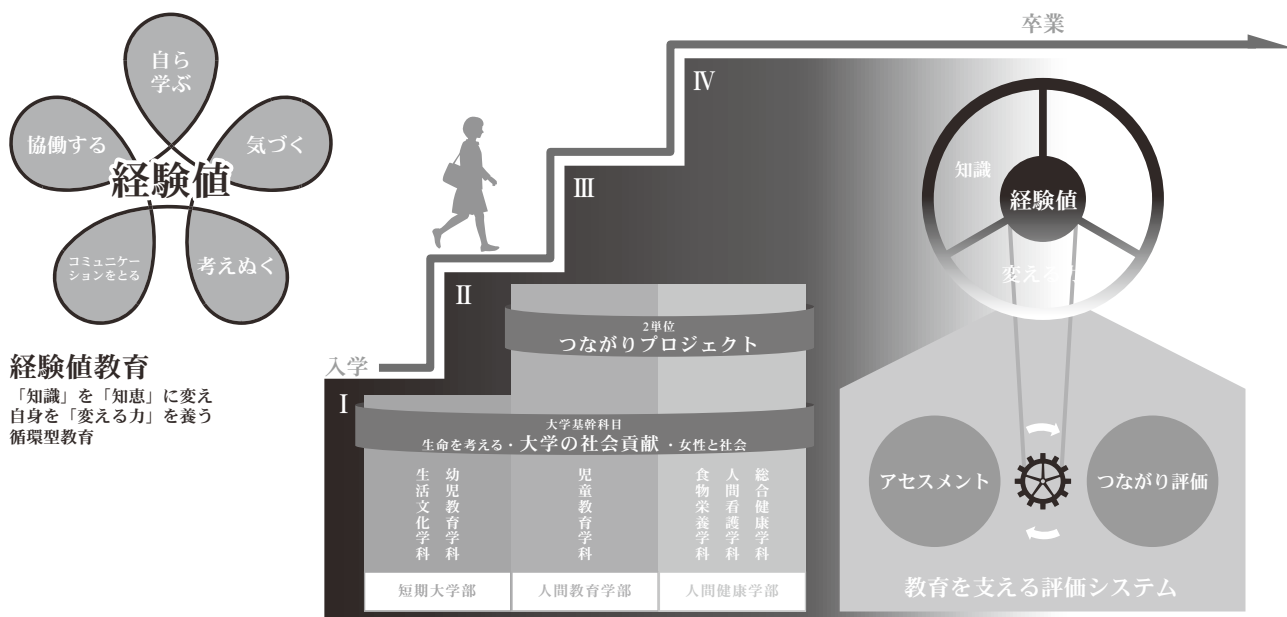
「経験値」は「知識」と「知恵」、そして「知識を知恵に変える力」の3つで構成される値です。そして、学生が「経験値」を高めたことが実感できるよう学修成果を可視化するための新しい評価システムを導入し、学生が実感できる指標を策定しています。経験値評価は、次の三つの評価で成り立っています。

(1) つながり評価

「つながり評価」は、学生の正課、課外（ボランティアやサークル等）の地域活動の報告をデータベース化することを目的としています。学生は地域での活動毎に、活動先の目的、学生自身の目標、活動内容、活動にあたって工夫した点を報告します。また、連携先の地域の方々に学生の活動を5段階で評価していただき、コメントを記入していただきます。この評価では、活動時間、つながりを持つことができた人の数、活動範囲（活動場所 Googleマップにポイントされます）に応じてポイントを集積することができます。活動内容を深めるとともに、地域での活動を定量的に示すことにより、学生の地域活動の活性化をねらいとしています。

(2) アセスメント

「アセスメント」は、地域活動によって得られた経験値を学生の「自己肯定力」から測るシステムです。項目は127の質問からなり、主体性・コミュニケーション力・気づく力・協働する力・考えぬく力の5つの力を測ります。評価指標の策定にあたっては、一般に広く社会で求められるスキル、能力、考え方を網羅しながら、本学が要請する専門性の高い進路先で求められる項目を反映する点に留意しました。在学中に定期的に行うことで、その力の成長を学生自ら確認していきます。



子どもの貧困と孤食に関する研究
～子ども食堂の活動に着目して～

214710116 今村 滯

I. はじめに

近年、子どもの貧困と孤食は社会問題化してきている。貧困とは生活必需品が欠乏したために肉体的、精神的な生活力が減耗した状態であり、孤食とは家族が別々の時間に食事をとること、一人で食事することである。貧困や孤食の支援策の1つとして、子ども食堂という取り組みがある。子ども食堂とは、経済的な事情などにより、家庭で十分な食事がとれなくなった子どもに対して、無料もしくは安価に食事や居場所を提供する活動のことである。民間発の取り組みで、地域のボランティアやJA、フードバンクなどが協力し合いながら活動している。本研究では、子ども食堂のボランティアスタッフへの質問紙調査および子ども食堂の主催者へのインタビュー調査を実施し、貧困や孤食の現状を少しでもよい方向へと変えていける支援策を提案することを目的とする。

II. 方法

調査協力者：兵庫県内の子ども食堂に参加している15名(年齢範囲22歳～66歳、男性2名、女性8名)にアンケート調査を実施した。また、兵庫県内で子ども食堂を主宰するIさん1名(56歳、女性)にインタビュー調査を実施した。
質問内容：年齢、性別、職業と以下の項目について尋ねた。アンケート内容は11項目であり、主な内容は次の通りである。ボランティアを知ったきっかけ、なぜボランティアに参加しようと思ったか、参加する上で心がけていること、孤食が増えている理由、孤食を減らすための意識や心がけ、子どもの貧困の問題を身近に感じるかとその原因、子どもの貧困に最も影響を与

えているものは何か、貧困問題を緩和するための支援策、子どもの貧困を減らすために今最も必要なこと、である。インタビューに関しては10項目について尋ねた。いつ頃から子ども食堂を始めたいと思ったか、きっかけは何か、子ども食堂を運営する上で心がけていること、気を付けていること、この活動をやってみてどう感じるか、今後どうしていきたいか、孤食が増えている理由、孤食を減らすための意識や心がけ、支援について、貧困に最も影響を与えているものは何か、貧困問題を緩和するための支援策などである。

III. 結果と考察

子ども食堂に参加しようと思った動機について、アンケート結果からは、チラシやホームページで子ども食堂について知り興味を持った、子どもは未来だから、楽しく食事ができる場を提供してあげたいなどの回答を得た。また、参加するうえで心がけていることは、声かけや笑顔、安心・安全の配慮などであった。主催者へのインタビューでは、テレビで子ども食堂について知り、活動できるように勉強したり周りに働きかけたこと、継続していくことの大変さと大切さについてなど、現状についてたくさんの想いを語っていただいた。

孤食や貧困に関しては、一人ひとりの意識を高め、他人事だと思わずに現状を知り、少しでも改善できるように考えることが大切だと考える。地域全体で子育てをしていくという思いで手を差し伸べることが重要であるだろう。そして、これらの活動は一時的ではなく、継続させていくことが最大の課題である。そのために、一人ひとりが小さなことでも自分のできることを実行し、子どもの未来を明るくできるように努めていく必要がある。

尼崎市のクリニックと飲食店の連携による
生活習慣病予防について

16 番 栢本美歩 19 番 北井三暖
29 番 酒井未来 38 番 白川真弓
83 番 山崎末稀 85 番 湯浅絢香

【目的】

尼崎市では、1 人暮らし世帯数が多く、居酒屋などの飲食店が全国と比較しても多くみられるため、外食・中食の利用者も多いと推測される。そこで、健康メニューを提供できる飲食店を増やすことで、生活習慣病予防につながるのではないかと考えた。本学では、以前よりつながりプロジェクトで「健康意識の高い町・尼崎の土台づくりと食育の定着について」の題目で尼崎市内の飲食店と学生の 2 者間で栄養に関する働きかけをして具体的な食サポートを行ってきた。またクリニック医師へのアンケートにより、医師だけでは栄養教育が難しいとの結果を得ていたため、飲食店と学生と医師の 3 者間で連携を取り、食サポートを行うことにした。

【方法】

食サポートが展開できていなかった園田・大庄地区を対象とし、その地区のクリニックの医師に、健康的な食事を提供することに協力的な飲食店やよく行く飲食店を聞いた結果から、園田地区では「ポノポノ食堂」「パスタのタント」、大庄地区では「ザめしや」の計 3 店舗に協力を依頼した。各店舗を訪問し、提供しているメニューの栄養価計算を行い、栄養価を把握してそれぞれ改善点を提案し、卓上メモやポスター、パンフレットを作成し、各店舗に設置した。約 1 か月後、媒体に対する反響等を聞いた。これらの活動内容を報告書・ガイド BOOK にまとめ、今回の活動内

容についてのアンケートとともに園田・大庄地区のクリニックの医師に郵送した。

【結果】「ザめしや」では設置した減塩の媒体 60 冊のうち 47 冊が活用され、大学規模で活動を行うとより良くなると思うといった意見があった。「パスタのタント」では卓上メモ設置によりサラダを頼む客が増え、食に対する関心があると分かった。「ポノポノ食堂」では、食物繊維摂取を推奨する活動について、学生が積極的に活動していたことが良かったと意見があった。医師に対するアンケートの結果、作成したガイド BOOK や活動内容については今後も継続してほしいという意見があった。

【考察】

今回の活動を行い、飲食店・医師・市民から食サポートを求められていることが分かった。尼崎市の特性として高齢者や独居が多いため、外食・中食を利用する人も多い。チェーン店は安くて美味しいので利用者が多いと推測される。今回連携をとった飲食店では、健康メニューを提供することに対して前向きに考えているが、味にこだわりが強く栄養改善の介入は難しかった。栄養を考えた食事を提供した場合、コストが高くなり利用客の敬遠に繋がってしまうのではないかと考えられるため、店の特色を活かしつつ低コストで美味しく栄養バランスの良いメニューを提案することが求められる。飲食店側と医師側、そして市民の連携を深め、3 者が納得できる提案ができれば生活習慣病予防に繋がると考えられる。今後は、園田・大庄地区だけではなく尼崎市全体に活動を広め、継続していくことが大切であり、さらに医師と飲食店との連携を深めていくべきと思われる。

兵庫県におけるフィットネスクラブの高齢者への取り組み状況

214410691 園田 夕紀子

目的

兵庫県のフィットネスクラブにおいて高齢者の健康づくりの取り組み状況について調べ、これまで行われた結果との比較と交えながら、運動指導者の役割やフィットネスクラブのあり方について論じることを目的とした。

調査対象

調査対象は兵庫県内のフィットネスクラブ100ヶ所、調査方法は郵便法による質問紙法で回収状況は32ヶ所から有効回答を得た（回収率32%）。

考察

利用形態は「会員制のみ」が74%で、高齢者を対象とした健康づくりに対するフィットネスクラブの果たす役割については「重要である」が91%、「どちらかと言えば重要である」は3ヶ所（9%）と回答していた。高齢者の利用者数は「次第に増加傾向」と回答したのが最も多く、「次第に減少傾向」の回答はなかった。高齢者の受け入れに「非常に積極的である」または「積極的な方である」が91%で、特に留意している点は「安全性が高いこと」が76%と最も多かった。以下「継続させること」が66%、「楽しく行うこと」が59%。その安全対策は79%が立てており「インストラクターによる体調確認」が87%、「運動前後の問診、血圧・脈拍測定」が78%と多かった。高齢者を重点的に指導する指導者41%がいるとしたが、前回に比して高齢者を重点的に指導する指導者は減ってきていることがうかがえる。高齢者向けのプログラムで最も多かったのが「ストレッチ」で91%、次いで「体操」が55%、「水中運動」が45%でストレッチは特に力を入れて取り組ん

でいると考えられ、これまで回答の多かった体操や水中運動はやや少なくなっている。施設側は「楽しくできる」、「長く続けることができる」、「安全である」を重視していた。今後の取り組みとして、「コミュニケーションの促進」「地域住民対象のイベント」「健康セミナー」をあげ、そのために高齢者を含めサービスで必要度が高いとされたのは、これまで同様、「指導者の能力向上」であった。

結論

以上より、今回の結果からフィットネスクラブでは高齢者の利用が増加傾向にあり、概ねその受け入れに対しても積極的であり、地域や社会への貢献を考えていることがうかがえた。施設側は安全対策の重要性を意識しているものの、実際に安全対策を万全におこなっているとははいえない。今後の高齢化社会に向けて安全対策により力を入れて取り組むことが必要である。そのために運動指導者は指導能力やコミュニケーション能力を向上させる必要がある。それには、健康の三要素である栄養・運動・休養に関する知識やメディカルチェックに関する知識を身に付け、体を動かすことの楽しさを伝えていけるようにすべきである。

彙報

出席者名簿

【尼崎市】

尼崎市企画財政局 立石孝裕課長、

尼崎市企画財政局 阿部尚奈子

【尼崎商工会議所】

尼崎商工会議所 産業部 小林史人部長

【尼崎市社会福祉協議会】

尼崎市社会福祉協議会 富奥眞二事務局長

【地域連携推進機構運営委員】

総合健康学科：山本起世子教授、総合健康学科：藤澤政美教授、人間看護学科：野呂千鶴子教授
人間看護学科：山本恭子教授、食物栄養学科：田淵正樹准教授、児童教育学科：衣笠知子准教授、生活文化学科：木原禎希准教授、幼児教育学科：林理恵准教授、児童教育学科：大江篤教授・企画運営部長

【地域連携推進機構事務局】第 1 回目および最終回は出席

教務課：西崎公哉、教務課：雑喉隆宏、企画運営部：谷昌子、学生課：寺田豊、キャリア支援課：西田英一、図書館：榊井かず美、地域連携推進機構：北恭子、以下の者は議事録のため毎回出席
地域連携推進機構：榎本匡晃、総合生涯学習センター：大野明子

第 1 回

メンバー 紹介、地域連携推進機構紹介

- (1) 平成 29 年度大学 COC 及び大学 COC+ について
- (2) 経験値評価システムについて
- (3) まちづくり解剖学について
- (4) 地域志向教育研究応募状況
- (5) 県の地域活動の補助金について

2. 報告・その他

- ・まちの相談室報告、ボランティア情報、
- ・学生の活動報告等（サイネージ掲載）、つな Girl 活動報告、
- ・大学等との連携による地域創生拠点形成支援事業
- ・平成 29 年度「大学生による地域連携推進支援事

業」募集

- ・平成 29 年度大学コンソーシアムひょうご神戸学生交流委員会

第 2 回

(1) 平成 28 年度つながりプロジェクト成績評価について

(2) 地(知)の拠点事業 学生向けアンケート結果について

(3) CBL 研究会について

『経験値教育と地域創生』（仮題）

(4) 地域志向教育研究採択について

(5) 報告・その他

- ・まちの相談室報告、ボランティア情報、
- ・学生の活動報告等（サイネージ掲載）、つな Girl 活動報告、
- ・H29 大学コンソーシアムひょうご神戸学生交流委員会
- ・尼崎市史を読む会講座
- ・まちづくり解剖学
- ・COC+子育て高齢化領域

第 3 回

(1) 平成 30 年度地域志向科目について（資料 1）

(2) 冊子『そのだの地域連携』寄稿について

(3) 地域志向教育研究追加採択について（資料 3）

(4) 報告・その他

- ・まちの相談室報告、ボランティア情報、
- ・学生の活動報告等（サイネージ掲載）、つな Girl 活動報告、
- ・尼崎市史を読む会講座（5/13）
- ・まちづくり解剖学（(5/25)）
- ・『経験値教育と地域創生』（仮題）進捗状況
- ・大学用アセスメント（経験値評価システム）実施
- ・立石課長からの提言

第 4 回

(1) 平成 30 年度以降の地域志向科目について

(2) 冊子『そのだの地域連携』寄稿について

(3) ルーブリック構築について

(4) 報告・その他

- ・まちの相談室報告、ボランティア情報、
- ・学生の活動報告等（サイネージ掲載）、つな Girl 活動報告、
- ・コンソーシアムひょうご神戸学生交流委員会（6/27）
- ・COC+プラットフォーム協議会（7/18）
- ・大学 COC+シンポジウム（7/22 歴史と文化領域）
- ・大学 COC+3 大学合同プラットフォーム（10/14 子育て・高齢化対策領域）
- ・尼崎市史を読む会講座（7/8、7/29）
- ・まちづくり解剖学（7/20）
- ・ニュースレター
- ・政策提言発表会
- ・『経験値教育と地域創生』（仮題）

第5回

- (1)平成 30 年度以降の地域志向教育研究について
- (2)CBL 研究会「経験値教育と笑育」
- (3)大学 COC+3 大学合同プラットフォーム（子育て高齢化対策領域）
- (4)社会人学びなおしのための学修ニーズ調査
- (5)報告・その他
 - ・まちの相談室報告、ボランティア情報、
 - ・学生の活動報告等（サイネージ掲載）、つな Girl 活動報告、
 - ・平成 30 年度地域志向科目「つながりプロジェクト」
 - ・阪神南県民センター会合（8/3）
 - ・みんなのサマーセミナー（8/5、6）
 - ・まちづくり解剖学（9/28）
 - ・まちづくり解剖学 11 月実施案
 - ・ルーブリック構築経過
 - ・大学等との連携による地域創生拠点形成支援事業

第6回

- (1)平成 29 年度地域志向教育研究報告会及び大学 COC 成果報告会
- (2)COC S 評価大学の視察について
- (3)報告・その他
 - ・まちの相談室報告、ボランティア情報、
 - ・つな Girl 活動報告、

- ・CBL 研究会「経験値教育と笑育」（9/1）
- ・地方創生アイデアコンテスト
- ・まちづくり解剖学（9/28、11/16）
- ・コンソーシアムひょうご神戸

第7回

- (1)つながりプロジェクト 2018 担当者案について
- (2)地域志向教育研究（案）について
- (3)報告・その他（資料 3 各資料参照）
 - ・まちの相談室報告、ボランティア情報、
 - ・サイネージ掲載、つな Girl 活動報告、
 - ・つながりプロジェクト 2017 報告会
 - ・アセスメント（大学）
 - ・スポーツのまち尼崎フェスティバル（10/9）
 - ・COC S 評価大学の視察（高知大学、くらしき作陽大学）
 - ・立花「結‘s’子育て支援講演会（10/22）
 - ・まちづくり解剖学（11/16）
 - ・コンソーシアムひょうご神戸
 - ・シンポジウム「子育て・子育てによる地域創生」（11/11）
 - ・（株）ナカムラ 体感型アトラクション玩具へのアドバイス
 - ・みんなの尼崎大学及びソーシャルドリンクス
 - ・「先生が元気になる集い in 尼崎」（3/27 予定）
 - ・H A C C P 推進啓発講演会

第8回

- (1)短大対象アセスメント実施について
- (2)平成 30 年度つながりプロジェクト学生向け説明会（案）について
- (3)COC アンケート実施について
- (4)報告・その他
 - ・まちの相談室報告、ボランティア情報、
 - ・サイネージ掲載、つな Girl 活動報告、
 - ・コンソーシアムひょうご神戸
 - ・ソーシャルドリンクス（12 月）
 - ・「先生が元気になる集い in 尼崎」実施概要（3/26）
 - ・発達特性事例検討会のお知らせ（11/24 共催）
 - ・日経グローバル No. 327 大学の地域貢献度調査

第9回

- (1)平成29年度つながりプロジェクト発表会について
- (2)大学COC事業「〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム」成果報告会について
- (3)地域志向教育研究 平成30年度について
- (4)平成30年度つながりプロジェクト・大学の社会貢献授業について
- (5)報告・その他

- ・まちの相談室報告、ボランティア情報、
- ・サイネージ掲載、つなGirl活動報告、
- ・まちづくり解剖学（1月、3月）
- ・「みとりのまち」主催の講演会協力要請
- ・大庄西社会福祉連絡協議会協力要請
- ・発達特性事例検討会
- ・生活の知恵再発見
- ・政策提言発表会
- ・市の保健福祉センター

第10回

- (1)平成30年度つながりプロジェクトについて
- (2)政策提言発表会について
- (3)報告・その他

- ・まちの相談室報告、ボランティア情報、
- ・サイネージ掲載、つなGirl活動報告、
- ・まちづくり解剖学（3月）
- ・1/20 つながりプロジェクト発表会
- ・1/26 大学の社会貢献発表会
- ・2/10 大学COC事業報告会
- ・平成30年（2018年）度共同研究
- ・1/20 生活の知恵再発見

第11回

- (1)平成30年度統括会議について
- (2)経験値評価システムについて
- (3)報告・その他

- ・まちの相談室報告、ボランティア情報、
- ・サイネージ掲載、つなGirl活動報告、
- ・まちづくり解剖学（3月）
- ・大学コンソーシアムひょうご神戸学生委員会
- ・1/27 神戸市看護大学 COC事業シンポジウム

- ・1/29 あまがさきタイムズ掲載企業訪問取材
- ・2/10 園田学園女子大学COC事業報告会、シンポジウム
- ・2/13 政策提言発表会
- ・2/18 地域再生大作戦（県）
- ・2/18 つながるパラダイス3
- ・2/22 小大連携 清滝小学校（豊岡市）
- ・3/2 外部評価委員会
- ・3/3,4 COC/COC+全国シンポジウム（高知大学）
- ・平成30年度あまらぶチャレンジ事業
- ・阪神南地域ビジョン委員募集
- ・『経験値教育と地域創生』
- ・香美町 小代講演会

第12回

- (1)経験値評価システムについて
- (2)大学COC総括について
- (3)COC+について
- (4)2018年度地域連携事業概要
- (5)報告・その他

- ・まちの相談室報告、ボランティア情報、
- ・つなGirl活動報告、
- ・大学コンソーシアムひょうご神戸学生委員会
- ・1/29 あまがさきタイムズ掲載企業訪問取材報告
- ・2/10 園田学園女子大学COC事業報告会、シンポジウム報告
- ・2/13 政策提言発表会報告
- ・2/18 地域再生大作戦報告（県）
- ・2/22 小大連携 清滝小学校（豊岡市）報告
- ・3/2 外部評価委員会報告
- ・3/2,3 COC/COC+全国シンポジウム（高知大学）報告
- ・3/8 まちづくり解剖学報告
- ・「支え合い」を育む人づくり支援事業
- ・『経験値教育と地域創生』
- ・3/18 香美町 小代報告会
- ・3/20 兵庫県阪神南県民センター
- ・3/26 先生が元気になる集い in あまがさき
- ・3/29,30 在学生対象アンケート
(地域連携推進機構 榎本匡晃)

第一回外部評価委員会

日時：平成 29 年 7 月 27 日（木）10:00～12:30

場所：園田学園女子大学 1 号館 2 階 第二会議室

出席者：

近藤正昭（尼崎工業会専務理事）

高谷浩司（尼崎 PTA 連合会会長）

片寄俊秀（大阪人間科学大学教授）

藤井克祐（尼崎経営者協会専務理事）

濱田英世（特定非営利活動法人「やんちゃんこ」代表）

前原啓二（前原会計事務所）

川島明子（本学学長、地域連携推進機構長）

大江篤（本学教授、地域連携推進機構副機構長）

榎本匡晃（地域連携推進機構）

川島 お暑い中、皆さんお集まりいただきまして感謝いたします。1 年間どうぞよろしくお願ひいたします。平成 29 年の評価委員会、今回開かせていただきますけども、29 年度で一応 COC というのは、締めくくりの年ということになっておりますので、今までのまとめと、これから今まで作り上げたものをどういうふうに補助金なくてもやっていくかということも踏まえながら、しっかりと学生の経験値を積み重ねて教育できるように、本学としてどういう形でやっていくことも含めご相談したいと思ひます。本年度が最終の一番大事な年でございますので、いろんな意見を言っただきたいと思ひます、よろしくお願ひいたします。

大江 それでは始めさせていただきます。きょうは 28 年度の事業報告、年度末にも一度しておりますので、要点だけお話をさせていただいて、今年度 29 年度の事業計画、予算等ということと、4 番目の所で 30 年以降、どういう形で地域連携経験値教育といのを進めていくのかということと、いろいろとご意見いただければと思っております。

2 番の年報による平成 28 年度事業報告ということで発行をしております。これに基づきまして話をしていければと思ひます。教育、研究、社会貢献、三つが大学の柱でございま

すので、経験値教育プログラムも COC 事業も同様にやっております。

まず教育の部分についてですが、冒頭の市長と集合写真で写っているのが、政策提言発表会です。大学の社会貢献という COC の 1 年生の半期選択科目の優秀チーム、前期後期 2 チームが 2 月に市長の前で発表、写真です。例年どおり、兵庫県立大学さんと 2 大学で開きました。その次が地域志向科目「大学の社会貢献」の授業風景で、昨年度は、濱田先生の所のやんちゃんこ「まちの寺子屋 SUN ぷらっと」でお世話になって、その様子です。

掲載の写真が「つながりプロジェクト」の活動風景で、21 のプロジェクトがそれぞれ今年度も進んでおりまして、昨年度、無事に発表会まで終わりました。学生の教育活動については、2 科目を軸にして、食物栄養学科のほうで、今年度から地域栄養学というのが、1、2、3 と三つあるんですが、3 年次、つながりプロジェクトを終えた学生が、さらにブラッシュアップをかけていく学科の科目が置かれたりしています。「つながりプロジェクト」の内容につきましては、一個一個 21 の内容が載っております。発表会の全体講評等もそこに上がっております。地域の方にもたくさん来ていただいて、いろいろと厳しいご意見もいただきました。

次のページからが、各学部の地域をフィールドにした、特に尼崎の地域をフィールドにした優秀卒業論文ということで、卒業論文の要旨、言語学科 2 稿、地域看護学科が 2 稿、それぞれ 2 本ずつ、食物栄養学科、児童教育学科ということで、最終的に大学の 4 学科については、卒業論文の形で結実していく流れで取り組んでいければと考えているところであります。教育については、地域志向科目の大学の社会貢献とつながりプロジェクトを軸にやってきたというところでございます。

次に研究についてなんですが、地域志向教育研究ということで、地域をフィールドにした研究成果をそれぞれ挙げております。昨年度は 11 の研究プロジェクトが立ち上がって、

4年目を終えたものもありますし、新しくというものもあるんですけども、こういった形のもので、これも形を成してきていますので、次年度以降、文科省の補助金が切れた段階でどう研究推進していけるのかということをお踏みまえて考えていきたいなと思っているところです。

まちづくり解剖学については、地域の方、学生の発表を含めて、地域課題を共有していくという、この中から研究のテーマが選ばれたり、教育プログラムが生まれてきたりということになりまして、5回、番外編特別編で7回開催をいたしました。テーマとしては、それぞれ猪名寺のまちづくりであるとか、サマーセミナーとか、留学生の発表があったりとか、芋、それから自殺予防、補助金もらってる分、それから防災をやったというふうなことで開催をいたしました。これが研究になります。

あと、社会貢献ということで学生の活動についてです。つなGirlですね、14名、本当にCOCの2年目から始まってつなGirlの場合は3年目が終わったところになるわけですけども、たくさん学生、活動してくれてまして、お昼休みの短い時間に定例会議を積み重ねていながら、イベントとしましてはつながるパラダイス、キッズフェスティバルということで、前のグラビアにも幾つか挙げてあるかと思えますけど、そういった活動をしていっているところになります。

阪神南県民センターの補助事業になりますけど、つながり交流祭ということで、各大学の補助金をもらって、尼崎で活動した尼崎プロジェクトというのと、高齢者の認知症の対策という2チームの発表が行われました。

フォーラムは、神戸大学と一緒にCOCプラスの歴史と文化の領域で、尼崎百物語をベースにした地域資源、歴史遺産のフォーラムを行いました。67は、一方でCOCプラスの子育て高齢化領域で、神戸大学の保健学科と神戸市看護大学と本学とでプラットフォームでシンポジウム、学生の取り組み発表ということ

で、神戸大学さんのほうは理学療法士とか臨床検査技師の専門分野の学生さんで、市看さんは看護師の養成課程、本学は児童教育とそれぞれ違った専門領域で子育て高齢化の領域を考えるとという取り組み発表が行われました。

先ほどの研究報告会では、市が今進められておる尼崎大学のキックオフのフォーラムに登壇させていただいたり、近松人形浄瑠璃の学生が出たりと加わらせていただいたというところでございます。

かいつまんだ形ですが、中間評価でS評価もいただいたということもあり、4年目で研究も実績成果が出てきているところと、課題も多いところがあるんですけど、科目もようやく2年目で、昨年に比べると、学生も随分動きがスムーズになってきているのかなというところもございまして、そういう形で平成28年度、進めているところです。

お手元の閉じたもの文部科学省に届けました平成28年度実績報告書については榎本から説明をお願いしたいと思います。

榎本 費目別収支決算書、これは神戸大学を通して文部科学省に提出した資料になります。区分の所で補助事業に要した補助対象経費等の欄の合計、そこで1411万5819円。これが事業に要した額でして、交付決定、認められるという金額が1408万8000円という金額になります。その差額2万7819円、これは自己収入で賄いなさいと言われました。会議費と若干の人件費、謝礼金のところ、自己収入という形で話がありまして、何度か再提出して、これに決定になったということになります。最終的には返還額がないと、ゼロという形になります。補助対象経費別内訳対比表が詳細になります。合計がぴたっと合っております。その補助事業に要した補助対象経費の額1411万5819円、これが表として右の一番下になります。それから交付決定にかかる補助対象経費の額が左覧の一番下の合計になります。ざっと見渡して、平成28年度に関しては、若干でこぼこはありながらも何とか予

算内で収められた、若干出たわけですけど大体収められたと考えております。増減率を見ていただいたら分かるんですけど、会議費が全く認められなかったというところはありませんけれども、大体収まることができたと考えてはおります。以上です。

大江 例年、課題にはなるんですけど、教育研究経費と地域志向教育研究、先ほどの研究費なんですけど、50万の10件、500万積んでるものに対して374万8330円ということで、研究を活性化していこうとはしているんですけど、年度末の辺りで消化し切れてないという課題も残っているかと思えます。

最後ですが、COCプラス事業になるんですけど、所定のアンケートの様式です。基本例年どおりにはなっているんですけど、学生も地域を志向した大学であるということに対して、まだ分からないという学生も出てきています。それから教職員の中でも分からない知らないというのが8名、全職員対象の中であつたりということで、周知していくことも必要なかなということと、一番気になります今回のCOCプラス事業の地元県内の入学者数、就職者数ということで、本学の挙げている数値です。連携自治体というのは兵庫県ということになります。COCプラスのほうなので、尼崎ではなくて兵庫県内の入学者数と就職者数になります。別添で後からお配りしたものがCOCプラス4大学の、まず①が事業共同地域就職率で、兵庫県への就職率になります。取り組み全体では27年実績が25.1だったものが24.3パーセントに下がっているというところで、数値的には厳しい状況だということです。

インターンシップの参加数は、ほぼ全員になるんですけど、実習等を含んでいますので、インターンシップの参加数は多いというのは、大阪のほうにも実習病院等がありますので、兵庫県になると若干数値は少なくなるということになります。

雇用創出はもっと難しくて、あまり数字が上がらない。COCプラスのほうは、こちら側が数値

目標としては大きいというところですよ。

以上駆け足にはなりましたが、平成28年度の事業報告と文科省の補助金についての決算のご報告をさせていただきました。いろいろとご意見いただければと思います。どの部分からでも結構ですのでお願いいたします。

藤井 インターンシップの参加数、これは立派な数字だと思いますが、見方が分かんないんですけど、雇用創出人数とか寄付講座数とかって、園田大学さんは、横棒なんですけど、これはなかったということですか。

大江 ゼロです。雇用創出して基本的にベンチャー企業とかNPOの立ち上げを挙げるんですね、ここ。既存の所の就職、新しい就職先の開拓ではなくって、自分自身で大学院生なんか卒業して起業をする、ベンチャーで立ち上げる数字なので、なかなか本学の学部構成から考えると難しくて。

前原 事業共同地域就職率は、兵庫県内という意味ですよ。他はどこが多いんですか。

大江 大阪が多いですね。看護の学生の病院、実習病院なんか枚方のほうの病院に行ったりもしていますので、そういう関係でなかなか県内だけとは限らないというところですね。多分県立大さんの場合は、県の公務員試験とか受ける学生の割合が多いですから、そういう形にはなつてこようかと思うんですけど

前原 県立大36パーセントですもんね。県立大にしては低いですよ。

大江 市立看護大さんはやっぱり神戸市立中央市民病院とか市立病院へ就職が多いですから、この95っていうのほぼ学年の定員単科なのでいっぱいいっぱい、そのうちの6割近くが神戸市内でっていうことですね。

前原 入学者数は50パーセント超えてるわけ

でしょ、現在ね。それがこんだけ。だいぶ流出してるとしか言いようがない数字ですね。

大江 これも細かく県内を見ていきますと、県内出身の半分ぐらいの学生の中で、淡路や但馬から来てる学生は、結局は阪神間で就職をしてしまうケースが多くって、実家には帰らない。だから兵庫県で採ってしまうところ、本当は地方創生なので、都市部ではない所っていう国の政策の狙いはあるんですけど、県内就職って言ってしまったときに、どうしても阪神間で。看護師であっても、やっぱり但馬のほうに行くとか集まらないというケースがありますのでね。COC プラスのほうは26年から始まっていますので、今年がちょうど3年目の中間で、この数字が中間評価の数字になってまいります。一応この4大学でいうと、COCは県立大と本学がS評価をもらって、市看さんがB評価だったので、S二つ抱えてて神戸大残れなくてどうなのかというところですね。最終目標数値がかなり高いので、地域就職率が30パーセント超えるところまでなので、これはかなり。そもそも神大さんは学生がどこに就職したか把握するだけでも把握できない。学部もばらばらですし、人数も多いですから、学生たちが一体2年目3年目働き続けているのか、動向までなかなか把握できないところがあるみたいですよ。

高谷 今年の46.5パーセントって、かなりハードな数字ですね。数値目標。

大江 厳しいですね。かといって兵庫県に就職しなさいって誘い込みできませんので。例えば増やせるとすると、やはり教員採用試験があまり通ってないということがあるので、それは神戸市とか兵庫県とか県レベルで受けられる所なのですが、私のゼミの学生でも、伊丹に住んでいても、兵庫県だと遠い所に行かされるかもしれないから大阪府で受けるって学生がいます。採用試験は大阪で受けてたり、大阪も今、個別になってきているので、北摂

のほう、豊中とか吹田とかあっちのエリアで採用試験を受けてみたりとかいう学生がいますね。

近藤 専門職のほうが難しいんですか、公務員は。看護師さんとかいろいろのありますよね。

榎本 看護師は本当に就職率100パーセント。

近藤 栄養士さんとか。

榎本 栄養士はなかなか難しい。大量給食とか病院とか福祉施設とかそれぞれにもよるんですけど、病院に入りたいと思うんですけども、病院の中に管理栄養士さんの人数が限られているのと、なかなか看護師ほど短いスパンでの回転が少ないこともあります。

大江 保育士の資格を取っても保育士にならない学生も増えていますね。やっぱり待遇面の話がどうしても出てくるので、一般企業で子供服メーカーに行きたいとか、おもちゃの会社に就職したいとか。例年保育士になりたいっていう学生がほとんどだったんですけど、一般職、普通に就活をする学生が一定数出てきている感じですね。

前原 保育士さんの就職活動は後になるんですか。

大江 遅いんです。4年生の夏休みぐらいに園の見学に行って、大体9月ぐらいから面接があります。

近藤 一斉になってほしいよね。

前原 早めたらいいのにね。業界の人に言っときますわ。早めたらいいんでしょう。

大江 保育はどこともそうですね。保育士、私立幼稚園は。逆に求人はいっぱいあるので、公立保育所を受けると結果が出るのが遅いの

で、それまでに友達が決まっていくから公立は受けないという学生も出てきますね。

前原 保育の学科に入って保育士になる率が少ないっていうのは、うちの学校にとっても将来的には致命傷になってくるんで、定員満たなくなってくるでしょう、だんだんと。

大江 そうですね。全国的にいま短大がかなり厳しくなっていますよね。

前原 だからなんとしても保育士さんの魅力を復活させないと。もともと長期間にわたって女性の就職、職業人気ナンバーワンやったんだからね。それはやっぱり維持していかないと、本学の定職率を満たさないと。実際に、社会福祉法人をはじめとして、学校法人だとか、足らん人ばかりだからね。昔に戻さないと、社会的にも共働きも当たり前になってきた世の中で、保育士さんがいないので保育所を運営できないという話になってくるんで。結局社会全体に大きく影響する話なんで。

近藤 本来そうですね。国家的に考えれば、重要な、魅力ある職場ですから。

前原 給与も、いろいろ付いて、今ええはずですよ。マスコミはちょっと前のこと言ってるんちゃうかなと思うんですけど。

大江 短大の幼児教育が今年度入学が少なかったんで、阪神間の全ての短大の保育持ってる所がそうなのでもないんで、対応も考えないといけないのと、四年制大学のほうは4年間来ることで、短大とは違うブラッシュアップの考え方をしていけないといけないところで、大学のほうはもう少しちゃんと公務員試験を受けている、公立にどんどん入って長く勤められるっていう体制を作っていないといけないという課題はありますね。

前原 公的に大きく影響する保育士の問題につ

いては、大学が国から授業料の一部補助金をもらうかなんか。要は授業高いでしょ、私立の場合ね。授業料高いんで、その辺ちょっと優遇してもらおうっていう発想もできないのかなと思いますけどね。

近藤 今の公立と私立は結構、昔は公立は低くて私立が高かったでしょう。今は結構近いですよ。聞いたら結構高いんです。公立も高くなった。

大江 看護学科なんかになると、実習費が学内でも金額が高いですから。経済的にしんどい学生も多くはなっているので、奨学金の制度も考えてはいけないんですけども。

近藤 例えば卒業されて保育士やってる方から来て、現場の話を、そういうのはやってるんですか。

大江 それは1年生の段階で、卒業生の話も、今年も卒業してすぐの各児童福祉施設と幼稚園と保育所、小学校と学生呼んで、土曜日に全大学生集めてやりましたし、1年生の授業では尼崎の保育指導課から現場の先生と幼稚園、小学校の来ていただいて、話をしています。なかなか実習だけではイメージできない職場のいろいろっての聞かないといけないのと、資格を取ることが目的化してしまいがちなので、資格さえ取ればいいのでたくさん免許証取っておけば、取れるだけ取っていっぱい科目を取ればいいっていうふうなことで、そうすると逆に地域連携の授業とかボランティアに出れなくなってしまいうんです。現場の体験もさせながら、取れば済むのではなく、取ってちゃんと働いて、いい保育士さん、いい幼稚園の先生になってもらうってことをやっていかないといけないと考えてるんですよ。看護は国が保健師助産師は三つとも取れる統合カリキュラムがベースにあったんですが、今はそれが看護師で4年間取りなさいと。うちは統合残してるので、選抜をして保健師が取

れる学生、助産が取れる学生というふうにはプラス一個ずつはしてるんですけども、専攻科を上についたり、大学に入らないと助産が取れないとかっていうふうな形に今なってます。

濱田 今は認定こども園とかが増えてるので、幼稚園と保育所は絶対ね。

大江 保育所は両方、短大生でも両方取らないといけないです。大阪府の小学校の採用試験は幼稚園免許を持ってないと受けれないっていうのがあって、幼小連携というので、小学校免許だけでは受けれないと。兵庫県はそうでもないですけども。

濱田 保育所とかの就職支援の先生みたいな方もいらっしゃるの。

大江 一応実習の支援室に2人、保育士幼稚園の経験のある若い女性の契約の職員2人置いて、あとはキャリア支援課、うちの就職の支援課で面接なんかの練習はキャリアカウンセラーがいて。

濱田 大学の先生、一生懸命保育所へ実習取ってください、就職も取ってくださいと。

大江 実習園に行く度にですね。保育所なんかは逆によこしてくださいの話聞くことのほうが多いそうです。

濱田 就職してほしいですね。

大江 卒業生、園長先生もいっぱいいるので。一番うちの課題は、卒業生の就職先のデータベースを持っていないんです。こだけ長年、保育幼稚園全て出していながら、ちゃんとしたデータで取れていないので、それは将来的にもこういった地域連携の授業の、こういうアンケートもそうなんですけども、実際これが出た子たちが5年先、地域で学んでどうだったんだというフィードバックもかけていか

ないといけないので、その体制は学内的にも構築していかないといけない。卒業する時点での就職は分かるんですけども、その子が5年先まで働いてるかどうとか。なかなか女子大なんで、同窓会の名簿なんかにしても、住所が分からなくなってる人が増えてはきてるんですけど。同窓会とは別に、大学として同窓生の動向と名簿の管理っていうのやっていかないといけないですね。

近藤 卒業生の同窓会的なものに当たって、卒業生いろんな皆さんと連絡をとるようなことは。例えば会合というか。

大江 年に1回同窓会、大学も短大もそれぞれあるんですけど、本当に来られる人数っていうのは、50名とか100名弱とか。

近藤 一応文書出してる。

大江 はい。返ってくるのも多いみたいです。同窓会でも。住所が分からなくなってるっていう人が多いようで。

高谷 幼児教育であれば、例えば県内が何パーセント、県外が何パーセントって大体分かります、学生の内訳として。県内から何人くらい入学して。

大江 入学ですか。多分全体の数字とそう変わらないですね。学科ごとに落としても、50パーセントから55の間ぐらいですかね。半分です。短大になると、これが増えます。県内、阪神間の学生は、大体大学のほうは40数パーセントが県内、それから40数パーセントが他府県からって感じですか。あとの残りが九州であるとか四国であるとかという所から来ているのが現状かなと思いますね。短大のほうまでの数字が今回ちょっと。

高谷 例えば半分として、県内の一番の就職率、37.3ですか。高いほうなのか低いほうなのか

っていったらどんなもんなんでしょう。やっぱり県内から来てる子であれば、地元へ帰る可能性が高いですか。

大江 帰ってるほうが多いですね。

高谷 県内にとどまって、県内から来てる子が、37.3とは言えないけれども、比較的高いって評価していいのか、それがちょっと分からないんですけどね。神戸大の場合だと10何パーセント、恐らく。

大江 恐らく全国区ですので。尼崎にあるので、大阪から来ている学生が半分いますので。兵庫の子も川西の子だったら大阪のほうでっていう子のケースが多いですね。食物栄養なんかで一般の企業になると、本社が大阪にあるからってこともありますし。

高谷 まあまああつていう考えもできるのかなと思ったり。

榎本 一概に本当に、国はこのような数字の出し方をしなさいと言うんですけど、これで地方創生で評価できるかっていうと、本当はこれが阪神間では意味がなくて、但馬であったり奥播であったり淡路であったりの学生たちがちゃんと地元で帰るということを考えていかないといけないんでしょう。多分その辺が、同じCOCプラスでも島根大とか信州大とか地方国立大学の場合は、それなりに意味があるんでしょうけども、兵庫県の特性でもあると思います。

高谷 もう一件だけ。保育士の、聞いたところによると、3月になって辞退者が増えるって聞くんですね、いろいろ。それによって欠員が出て、何とか大学から紹介してもらえないかっていうのは聞いたことがあるんですけど。

大江 特に保育士の場合は、4大生よりも短大生のほうが多くって、大学になったと同時に

就職考えないといけないという、2年間もあつていう間で、間に幼稚園の実習と保育士実習があつて、実習は3週間乗り切った形で、いざ実習園でそのまま就職するケースが多いんですけども、3月になると研修に来なさいと言われて、その研修の間にもたなくなってしまう、で辞めてしまう。就職決まってる、3月からアルバイトでもいいから慣らしで来なさいって。その慣らしでの2週間目ぐらいになったらもう、実習はここでゴールがあるから見えるんだけど、そこで。中の年配の保育士さんとの人間関係コミュニケーションでつまづくこともありますし、実際いざ仕事となって4月1日が迎えられないっていうふうなことですね。その時点で大学に求人が来ても、結局残ってる子はそこで就職ができなかった子なので、やっぱり送っても厳しいことがあつて。特に3月で駄目になってるのは短大生が毎年何人かは出てますので。

大江 今の学生は弱いですよ。全体的にね。

濱田 いかない、なかなかね、そういうので。本当に考えられないことがいっぱいあるんですけど。だから、このつながりプロジェクトでいろんな地域と関わったりっていうことで、普段からそういう免疫を作ったり、地域の人とどういふふうに関わったら話したらいいのかみたいなことをされてるから、そういう力は付いてるかなっていう、園大の学生はみたいなイメージあるんですけど。学内だけではなくって。

大江 そこが学生の中で別やと思ってしまうんですね。つながりプロジェクトなんかで地域に出て活動してるのと、自分の専門職に就くための実習で行ってるのと。実習生はやっぱり実習生で見ってもらってるので、その辺りが。つながりプロジェクトもプロジェクトによって、地域の方との関わり方の深い浅いは出てきますのでね。叱られて帰ってきたりっていう経験は何度もしてもらえるといいんですけど

ども。若干教員の側も臆病になってるかもしれない。ご迷惑掛けたいけないという気持ちですね。

藤井 園田大学さんで保育所だとかあるいは幼稚園だとか創設される計画はないんですか。

大江 幼稚園は学が丘と園田幼稚園と、同一法人の中に長年駅前にあるんです。園長も卒業生ですし、今その幼稚園にいる子は、大学を出て3年目で入っています。学が丘のほうも、毎年1人ずつぐらいは入っているんですけども。学内の保育所を作っているのは、お茶の水なんかが女子大で幾つか。それは文科省からも聞かれます。社会人学生を受け入れるに当たって、学内で託児保育ができてお母さんでも学べるっていう、本当に18歳人口だけが大学のターゲットじゃないよってなったときに。実際に看護学科の中には何人か子ども抱えながらっていう学生がいるんです。親御さんに見てもらったりとかっていう形にはなっているんですけども。ようやく「びよびよ」がちょっと広がって預かりではないですけど、場所だけ広場だけができてというのが現状ですね。駅前の園田幼稚園も狭くて。便利なんですけど、そう広い所ではないので。

濱田 でもあの地域では評判いいですよ。人気です、園田幼稚園は。すごく昔ながらの素朴なおしゃれというか。

大江 古い園舎であれなんですけどね。

濱田 びよびよの部屋ができたので、そこももっと有効利用ができたら……。

大江 マンパワーが大学の中に弱いので、本当は一人でも保育士さんとかが常時付いてればもうちょっといろんな使い方もできるのかなと。今ちょっと模索している状態なので、未就学だけに部屋の中を限るのかというところ。この秋には結論を出すことになる

思うんですけども、大型遊具とかが入っているので、大きい子どもかなって、学科の中でちょっと意見が出たりしているんですけどね。

では、よろしいでしょうか。それでは引き続いて、29年度の事業計画と予算のお話をさせていただきます。これも文科省の書式ですが、29年度のもので、これはCOCプラスなので、4大学のものが入っています。事業計画につきましては、少しかいつまんで、こちらが4年間のまとめにはなるんですけど、まだ原稿段階で幾つも抜けている所があって、このページの順番でお話をさせてもらおうかなと思います。

教育、研究、社会貢献ということで、順を追ってお話をさせていただきます。COC関連のシンポジウムですが、一番下平成29年2月10日に最終のシンポジウムを開催いたします。これは1日かけて午前中に研究の報告をした上で、午後このテーマで講演シンポジウムということで、文部科学省のCOC担当に来ていただく予定をしております。シンポジウムのテーマは『経験値教育と女性活躍』ということで、今回は最終年度ですので、学長に登壇をしていただくことになっています。学長と、今調整中なんですけど、連携先の稲村市長と学長と、関東のほうで共学校ですが、東洋学園大学という大学がございまして、その原田先生という女性の学長先生を関東からお呼びして、人間看護学科の野呂先生のファシリテーターで、女性活躍ということで考えているところなんです。それと5年目の今後とこれまでというお話をしたいと思っております。それが最終シンポジウムです。

次の社会貢献についてですが、まちの支援員がなかなか人材育成ができてくるようなできていないような、生涯学習はやってるんですけども、もうちょっと強化していかないといけないのかなと思っています。まちの相談室は件数的には本当に一定数きちんと投げ込んでいただいているということで、ボランティアのマッチングにしても成果が出てきているとこ

ろです。

平成29年のつなGirlの活動なんですけども、例年どおりに幾つかこれから秋のキッズフェスティバルですね、この前のエコあまフェスタに参加をさせてもらって、尼芋奉納祭であるとかつながるパラダイスとして進めていく予定になっています。

この社会貢献の部分については、平成30年度以降なんですけど、まだ地域連携推進機構の組織立て自体は十分決まっていなくてあるんですけど、相談室、マッチングボランティアセンター的な業務、それについては地域連携に残るのか学生課に行くのか別にして、どこかできちんと機能は果たしていかないといけないと考えているところです。

教育の部分です。まず大学の社会貢献ですが、1学期は昨日終わりました。昨日発表で、今回は『地域の悩みに子どもの力を！』という名前なんですけど、周辺の立花地区の公園をフィールドワークをさせました。あんまり人に接することなく、まち歩きと公園を見て、それまでに濱田先生を含め、市役所からもお話しいただいて、地域の課題を講義の中からつかみ取って、まち歩きをして、公園を使った肥満防止であったりとかごみ拾いであったりとか放置自転車のことであったりとかを、子どもを主役に押し立てて、大学生が企画だけではなくて、子どもを学生がサポートして、大人を子どもの目線に変えるっていう視点で作らせました。100人ほどいたんですけど、17発表をして昨日やりまして、1等賞になったのは子どもと一緒に事前にまち歩きをして、子どもがまち歩きで見たことを今度は大人に向かってクイズを作ったりしてくってというふうな案でした。

今回は100人のうちの半数が短期大学部の生活文化学科キャリア生活キャリアっていう、新しくできたコースなんですけど、短大生で、少し戸惑いもあったんですけど、やっぱり同じ1年生でもなかなかこちらの意図が伝わるのが時間がかかったり、ちょっと地域の方に対していろいろあったりとかがあったんです

けど、短大生でもしっかりとプレゼンまで持って行ってきてくれました。

2学期は、4大の学生と、特に児童教育の学生が多くなるんですけども、60人ほどなんですけど、子ども食堂をテーマにさせようかなと考えています。市とも打ち合わせをしているんですけど、多様な形で子ども食堂が今、市内で開かれてまして、子ども食堂という名前ではなくて、コミュニティ食堂という形で、目の前の上ノ島も開かれていますし、園田地区では卒業生がポノポノプレイスさんがされていますし、杭瀬市場さんが杭瀬食堂って、コミュニティ食堂で百何十人集まっておられるという、2回転ぐらいで、中市場の中の食堂されてる所を解放されて、市場の食材で、勉強見たり居場所づくりっていう形でされています。それをテーマにしようかなと思っています。

4年間こういう形でやってきたんですけど、来年30年度からは、一番課題としてはもっと座学で地域について勉強させたほうがいいんじゃないかという意見が多く出てまして、この科目を必修科目にすることを考えています。大学の社会貢献を、大学生は必修、短大生は選択なので、400人ぐらいの学生にしっかりと尼崎はどんな所というところから入って、地域の課題が一体何で、それを考えるのはどうということだっていうふうな座学を中心にとすることで、今進めていこうとしています。

もう片方でボランティア活動理論と方法という授業があって、ボランティア活動の授業は積極的にボランティアをさせようと、3時間以上のボランティアを単位化するっていうことを授業の中で3時間以上体験したものを、100点満点うちの40パーセントを当てるということをやっています。この二つの科目を統合して「大学の社会貢献」の名前で、今年は全員を土曜日に集めて地域の公園に出すことをやりました。前はSUNプラットさんに順番に体験をして活動をしたんですけど、活動するというよりもボランティアにとにかく出す。あとは座学でしっかり学ばせるっていうところを、学生全員にやろうということ

で30年度は考えています。

つながりプロジェクト、29年度ですが、若干教員が変わったりしながら、それぞれお世話になって、今ようやく半年終わったという段階になります。これについてはいろいろ意見が出まして、学生の負担であるとか2年生というのが適当であるかどうかとか意見が出てはいます。今年入った1年生は来年もう一回このスタイルで通年21クラスでやることになります。その次の大学社会貢献を必修にした段階での2年生というのは、2パターン考えていまして、一つは選択科目にする。1年生の大学の社会貢献を必修科目にして、選択と必修を入れ替えるっていうのが一つやり方です。もう一つはこれを半年のプロジェクトに変える。1年間が長いとその間に看護の実習で看護の学生がいないとか、保育の実習で児童教育の学生がいない期間があるので、これを半年で考える。そうするとプロジェクトによっては1年かけてやらないとできないよという先生もいらっしゃいますし、ほぼ半年でもできるんだけど1年やってますっていう、いろんなプロジェクトの組み方内容も違ってくるんですけども、正直モチベーションが高くない学生も含めてPBLでやっていくってことの困難さですね、それから補助金がなくなると大学院がうちありませんので、サポートしてもらえるTAさんの人数をどうしても削らざるを得ないっていうことがありますので、悩みのところではあるんですが、来年度はカリキュラム上1年、もう1年走らせてっていう形になるというところですよ。

もう一つは経験値教育で、五つの力で数字を測るのが経験値です。それをアセスメントっていう形で127質問項目で回答させて学生がどれだけ成長したのかというのをスマホで測れるようにしているんですが、今年度中にシステムを整えると同時に、この経験値を、ルーブリックというのを作るということを考えています。47、48ページをご覧いただきたいんですけども。例えば、経験値というのが、この花びらの五つが大テーマ五つ、大項目五

つになります。大項目五つが経験値の一個一個のベンチマークになります。その中に中テーマ中項目ということで三つ四つずつあるんですが、中テーマ一個ずつについて何ができたという5段階の基準を決めることをやろうと。一番上の主体性の行動する力であると、とにかく就職時に就職先が合格出したいレベルの行動する力を身につけるといって、その行動する力というときに、言われたことだけ行動する人は、到達基準は1までしかいない。計画が立てれない人は、だけでも優先順位がまだ分からないという人は2なんだとか、こういうものを中テーマに全部作って、将来、卒業ゴールのときに、こんな人材像、経験値があなたは今この段階ですよというのを可視化するというふうな基準を作って、卒業時の学生人材像の経験値はこうだということを出した上で、各先生がたの科目とかプロジェクトとかで、私の授業ではコミュニケーション能力の伝える力を高める授業だというたら、これに合わせて自分の授業での到達度を作っていくという細やかな網の目を張っていくというふうな、一番根幹に当たるところを今年度作っていかうと考えています。なかなかまだ4年5年なので、今学生が入ってるデータの人間力の統計分析かけるところまでなかなかいかないの、単に学生がこの力がどう付いたって実感できるっていうときに、こういうことができたなら主体性がある学生です。コミュニケーション力ってこういうことができる学生ですっていうのを、まず一遍作って、実際に地域の活動見ながらブラッシュアップをかけていけるようなものの基礎基準を作ろうというのが、29年度の目標で、30年度からに向けて、それをやっていかうというのが教育の部分になります。

高谷 これ自己評価ですかね。

大江 自己評価です。これの下に127質問項目があって、それを5段階で評価をしていく形です。10分ぐらいでできるんですけど、年に

1回それを大短両方とも実施しています。うちのキャリアカウンセラーでずっと5年ほど学生の面接指導をしていただいた方と一緒に作ったんですけども。ただそれは自己評価で出るんですけども、実際その質問の意図であったりとか、学生にとってどんな行動ができたかっていう指標が見えてないので、このルーブリック評価を作っていくってことをしていこうと。

リアセックっていうリクルートから飛び出した会社があるんですけども、PROGテストっていうテストがあって、外部テストなんですけど、90分テストをやって、コンピテンシー、リテラシーの数値を測るんですけども、30代半ばぐらいまでの社会人が同じテストを受けた平均数値を3万人ぐらいの数値基礎データで持っていて、それとかなりの大学が入れているので、その大学の、例えば同系統の女子大生の同じ学年の全国平均と比べてどうかというのと、社会人に比べてとか、お金も掛かってはいくんですが、積み上げていくと、例えば看護師さんなんかにもさせて、管理職になる看護師さんのレベルはこういう企画力が高いとか調整力が高いとかっていう数値の比較ができて、学生個人カルテがもらえるっていう外部テストがあるんですけども、今年度は1年生全員受けさせて、独自にうちが作っている自己評価のアセスメントとの若干の掛け合わせをして見ていくとかで客観化していこうかなということですね。人間力を測るのはベネッセさんとリアセックさんと2社ぐらいしかないんですけども、大きなデータを持っている所が。こういうもので測っていくというのが、この評価システムを作ったっていうのが5年間のまとめで、そこまで仕上げようかというところです。

最後、研究の部分なんですけど、29年度、11件から10件に減ってしまったんですけど、5年間通してのものが7件です。1年で終わったプロジェクト研究、それから2年間あって、去年11件が今年10件という形になります。500万の研究費積んでるんですけど、先ほど見てい

ただいたとおり、三百数十万という形で使い切れてないところがあるんですけども、研究についてはこれも制度設計をしていかないといけないんですが、本学は学内共同研究という研究費を独自予算で500万持ってるんですけど、実は今年度、エントリーが0件、五百万予算が浮いている形なんです。ちょっと研究が低調化してしまっていて、国の科研費なんかに応募される先生がたは科研費が通っているんで、あえて自己負担のものでなくてもってことがあるんですけど、その500万の現状持っている学内予算を250、250で自由募集と地域思考という形で研究の継続は担保できるような制度設計をしていきたいなと思っています。

まちの解剖学につきましては、それぞれの概要が書かれています。つなGirlの活動方針が5月にありました。7月、つい先日なんですけど、富松神社の善見宮司、貴布禰神社の江田宮司、猪名寺自治会の内田さんに来ていただいて、非常に個性的でまちづくりの上では尼崎と一緒に活発な活動がなされている3者のそれぞれの話で、1時間足りないくらい面白い話、続編もまたやりたいですねっていうことでした。9月28日には、教育委員会にもぜひ来ていただくように依頼をかけているんですけど、地域学校共同活動とまちづくりということで、尼崎北小学校と杭瀬小学校で始まった学校地域共同本部含めてコーディネーターさん置かれて、この春から13校にまで広がってるっていうこと、杭瀬小学校の磯田さん、コーディネーターの大槻さんにプレゼンをしていただいて、小学校区を軸にした地域とのまちづくりを考えているところです。

11月はまだはっきりと決まっていなくて、社協もしくは商工会議所と、若干地元就職、COCプラスの絡みもあるので、インターシップ含めて何か組めないか、まだノープランの状態です。1月も漠としてるんですけど、実は四つテーマを持って、子育て、COCの中では関わってる教員の数も学生の数も少なくて弱いんです。これは今回立花「結's」にお世話になってますので、もしかまた来て

いただいて一回できれば、夜の時間帯なんてなかなか難しいところもあるのかなと思うんですけども、「子育て・子育ち」をテーマに考えたいと思ってます。最後3月は例年どおり東日本のときなので防災をテーマに考えているところです。

29年度の事業の最後ですが、これがなかなか原稿が入らなくて、そろそろネジを巻いていかないといけないんですが、『経験値教育と地域創生』ということで、COCのまとめを兼ねて本を作るということで、神戸新聞総合出版センターから刊行です。外部のところから幾つか原稿も頂きながら中もそろっていないということなので、2月10日の最終シンポジウムのときにお披露目ができるようにと、いろんな方に読んでいただけるというところを考えています。

29年度の事業は以上です。30年度に向けての方向性もお話をさせていただきました。それに対しての補助金の予算については、榎本課長から説明させていただきます。

榎本 一覧表になってます、大学改革推進等補助金の配分状況という表が下にあります。本学の園田学園女子大学のCOCプラス分、これが66万3000円申請しております。COC分は従来からの予算配分ですので、1395万2000円を申請しております。

細かいところとなりますと、1461万5000円という数字は、COCプラスとCOC分合算した分になりますので、COCプラス分が物品費人件費謝金旅費その他というところがCOCプラス分、これが66万3000円になります。COC分の物品費人件費謝金、次の旅費その他が1395万2000円になります。他大学さん、神戸大学さん、兵庫県立大学さん、神戸市立看護大学さん合わせたところが、この全部の表です。

COCプラスは傾斜配分という形になりますので、今後これが半額であるとかになっただろうかと思えます。66万がひよっとしたら30万ほどになります。COC分は今年度でもって終了になります。以上でございます。

大江 COCプラスはあと2年の中で、だんだんと額を半減させていって自前で進めていきなさいということです。COCは満額でずっとくるんですが、今年度で終わりになります。ただ両方ともスタートアップの事業なので、5年間終わったら全部終わりですということではなくて、どういうふうに継続できるのかということで、平成31年にはCOCの最終評価というもの、今回Sで中間評価をもらったんですけど、最終事業報告を作って最終評価になります。今後の継続性はそういうところに影響してくるのかなというところでございます。

若干30年以降のまだ確定できていないものもあるんですけど、お付けしている資料は、今年度のつながりプロジェクトの詳細です。詳細冊子ができてきたということと、COCプラスの今年度のシンポジウム、地域歴史遺産としての営みの記憶ということで、広報がいけなくて人数的には少なかったんですけども、災害復興の現場に入っておられる先生がた3人にお話をいただいて、実は但馬のほうに行くところと少子高齢化で村じまいの話が切実になって古里がなくなるっていう中で、生活の記憶を継承するかというふうな視点で今回はやりました。これは神戸大学との連携の事業の中でやったというところでございます。

それでは平成29年度のCOC、COCプラス事業の事業計画予算等について何かございますでしょうか。

藤原 インターンシップの授業に絡んで、私どもの経営者協会理事長と尼崎とやらしていただいて、園田さんも関わっていただいているんですけど、もし私どもの。

大江 ありがとうございます。まだ何も決まらない状態で、会議所にも全然小林部長との話ができていません。

藤原 多分会議所先より私どものほうがインターンシップね、ちょうど今この時期にやって

いる最中ですので、事前にお話ししたいと思います。もしよければですけど。

大江 多分、特に教員の側は、実学系であることも大きいんですけども、インターンシップがここまで多様化してきているイメージがまだつかめていないんだと思います。1日インターンシップが当たり前になったと新聞報道で出てましたよね。そんなものもあれば、がっつり何カ月間か課題解決型のインターンシップがあったりだとか、多分うちの先生がたのイメージというのは、教育実習とかと同じようなイメージしかインターンシップに対して持っていないので、勝手に自分たちで探してきなさい式で、それこそ近所の薬局でとかいうのもありでやってたんですけども、いよいよその辺はちゃんと考えておかないと専門職型だからといってインターンシップが考えなくていいわけではなくて、教員免許法変わって教員も教職インターンシップというものやりなさいっていうもの、免許法の中に、必修科目ではないけども望ましい科目で教職インターンシップというのも、実習ボランティアとは別に教職インターンシップというのが含まれてくるので、そういう意味ではぜひともお願いできればと思います。

藤井 知事が記者発表されていて、兵庫県っていうのは、流出人口がワースト3と。

大江 ずっとです。

藤井 北海道や熊本に続いて、兵庫県ね。特に若い人が、20代の流出がものすごく多いんですよ。先ほどの神戸大学の話ありましたが、よそから学びに来るわけで、就職はよそのほうに行くということもあるんです。そういう部分で、県、井戸知事自体も随分危機感を持っておられまして、インターンシップ、特に重点的に実施する話をされています。だから結構県も本気でお願いされてるんだなってことでやっています。もしよければ。

榎本 ぜひとも、ありがとうございます。

藤井 地元就職のメリットどうのこうのという話がありましたけども、難しい内容な感じがします。

大江 細やかに考えなあかんのかなと思ってるんですけど、香美町に拠点ができ、こないだも香美町の町長とごあいさつに行ったときに話をしても、看護の領域で町内には高度な手術ができる病院がなくてドクターヘリで全部豊岡病院へ運ばないといけない状況の中で、小さなレベルの病院になかなか看護師さんが来てくれないとか、地域興し協力隊すら定員が充足できないっていう悩みを抱えておられて。地元出た子が帰ってこずに京都や大阪や兵庫でも阪神間で就職をしてしまうっていうのが状態化してきてるんですけどいうところなので、本学にも20数名但馬から来ている学生もいますし、淡路島からも一定数いるんですけども、ゼミで何人かの子は持ったんですが、みんな阪神間の保育所に就職をしてしまったために、帰っても結局老人福祉施設はあっても子どもがいなくて保育所がない就職先がないとかいうふうな形になってしまいます。

藤井 先ほどの話でね、よそから来るっていう話ありましたでしょう。この前も近藤専務と一緒に、高校の先生、進路指導の先生と意見交換をしたときに、尼崎工業高校の生徒が、以前は尼崎市内の子どもたちが入学するのがほとんどだったんですけど、40パーセントぐらいが市内の子どもたちが入学してたけど、去年初めて40パーセントを切ったっちゃうわけですよ。30何パーセント。だからよそからとか他府県から来るっていうケースがどんどん多くなって。尼崎の子どもたちってどこの高校に行くのって言ったら、半数以上が大阪に出ちゃう。大阪の学校に行ってしまうっていう。本当にこの辺りっていうのは、地方と

違う特色っていうか、ミニグローバルですけども、大阪のほうは本当に経済圏に入ってしまったので、やっぱり地元就職はだんだん難しくなってきました。

濱田 ちょっといいですか。評価システムですね、たくさん来てくださってるんですけど、ぜひこれだけの項目を、学生にテーマであったり、大テーマ中テーマのことを、こういうことなんやということをしっかりと学生にまずは定着させてやってほしいですね。意味をちゃんと知って、地域へ出て行ったりいろんな講座があるのに、自分がどんな目標を持っていくかというのもきっちりイメージさせなくちゃいけない。そこでやってみて、まずは自己評価、今日どうやったとか自分が主体的にできなかったとか、これは気付けたとか動けたっていうのをさせてやって、私たちこないだも受け入れる側でしたけど、うちからの評価も聞いて、自分とすり合わせるみたいなことを、その中でなかなか難しいかもしれませんが、それをするとすごくはっきり分かるような気がして、うち毎回、今回10回で60人くらい来ていただきましたけども、終わってからもいつもカンファレンスみたいなことすると、すごく面白かったですって、今日はどうやったって一人ずつ言ってもらったら、学生によってすごく的確に返事するのもあるし、楽しかったですみたいな子もいるし、私たちがその評価表もらったので、あの学生はこうやったねって言うけども、本人が全然思っていない。自分がどうしたらいいかっていうの分かってなくて、せっかく現場へ出て行くんなら、前もって自分はある程度こんなことしたいという、せめて一つでもいいので、きょうは動きたいとか声出したいとかいうので、終わってどうやったかっていうその辺もきちんとさせてやらないと、ただ行け言われたから、変な言い方ですよ、行った、子どもと遊んだ、楽しかったです、みたいな、うちちょっと地域の年配のおじさんもおられるので、机出しっ放しやったとかね、あそこで

走ってたなって、机片付けるの誰も気付かなかったとか。やっぱり保育士さんになるのに、一人すねてカーテンの後ろ行った子、ほったらかしやったないうグループもありゃあ、ちゃんとそういう子に声を掛けている子もいたりとか、いろんな場面ができるので、今日は何をしにここへ来るのか、どうやったかみたいなことをしっかりと意識させて外へ出してやってほしいですね。そうしたら自分の責任というんですかね、できてくると思うし、やっぱり保育士やめたではなくて。その間に自分は子どもに向いてないと思ったら仕方ないかもしれませんけども。きちんと地域へ出すときにそれをすると、地域ももっと協力してやるかみたいなのもあるし、他の所でも、幾分出しっ放しみたいなのがあったりするんで、先生大変やと思いますよ、これだけいろんなことがあるので。

今さっき、ボランティア3時間とか言われたんですけど、いま受け入れてる神戸学院大学は40時間ボランティアしてきなさい。そして1単位やりますっていうので、夏から1月まで40時間、うち今年も人気があって、10人ほど、男の子ばかりなんですけど、女の子1人なんです。今週土曜日なんですけども、祭りがあるからいうたら、何時に来たらいいですか、9時からおいで、10時、11、12、1、2、3、4、6時間もうかるとかいうて、おいでおいで言うてね。そんなことをして、それはただボランティアですから、社会教育かなんかの、そんな子たちなんだけど、保育とか関係ないですよ。なんでここ来たんって言うたら、子ども好きやからとかそんなことしたい、男の子でもそういうふうなことで来るんですよ。来たら来たで、考えさせて、どうしたらええか考えさせて、子どもにどないするのかいうふうなことを考えさせながらうちも毎回するんですけどもね。なので、もっとそんなことさせてやらないと思いますし、3時間っていわず、もっと行ってこいみたいなのもありかなって。

大江 3時間っていうのは、結局一回も行ったことない子たちなので、トライやる・ウィークぐらい知らないの、座学がベースだけでも、3時間の体験はしなさいと。3時間超えていっぱい頑張ったらって、あんまりそこで、神戸学院さんはうちも卒業単位に入らないので1単位はあるんです。それもなかなか制度がなりたっていないので、ボランティアだけで単位ではなくて、座学の地域を学んでる中で3時間だけは自分で体験してきなさいねっていう意識で。面白かったらそこでまた毎週やるとかいう形でやってくれたらなっていうところですね。

藤井 単位は出るんですか。

大江 普通に2単位の講義の単位数の中に、成績100点満点付けるうちに、3時間の体験は何パーセント付けるので必ず聞いて教室に座ってて出席して終わりじゃなしに、外で一回体験はしなさいねっていうのがボランティアの授業なんです今。濱田先生の所に評価いただいているのは、この5つの分について5段階評価で、ボランティアは全部それを地域の方をお願いしてるんですけど、付けていただく方についても主体性って何を基準に分からないので、これを作ってもうちょっとこれを簡単にして、評価していただける地域の方ボランティア側の方にパンフレットでお示しをしたいのと、本学としてはこういうことができる子が主体性のある子だということでそれについて見ていただいて、5段階で付けてくださいっていうふうにしていける。何もなくてお願いしますって、この五つだけでは不親切な状態のままなので。

濱田 一人にこれだけはとても難しい、2時間3時間の中に、うちは3時間から来てくれるけど、それでも一人にこれだけ短時間の間に、この子はこれはいいい3でいいっていうのはね、6人も一気に来ると。

大江 一回一回、お世話になってる地域の方に評価をしてもらってっていうのを、スマートフォンでできる。自分はずっと書き込むところを作って、この中項目っていうのは1年に1回、127っていうのアセスメントなのでそれはもう人間力なんで、それはまた別にアセスメントをかけてるんで、毎回毎回の地域活動は、スマートフォンで学生が書き込みをして、活動内容を報告して、自分の工夫した点を書かせて、地域の方にこの大項目5つを5点満点で付けていただくっていうふうな。

濱田 学生もしっかり目標を持って来てもらわないと。何やったって言うても楽しかっただけやった。今日はこれをしよう、自ら子どもに声を掛けましたとか、ちょっと注意して危なくないか気を付けてましたとか考える力、そういうところが言えたらいいんですけども、なかなか学生も楽しかったです、子どもたちかわいかったです、とかそれだけなので、せっかくならそれも一回で来てくれるなら、もっともっと学生に意識持たせないと質が上がっていかなくなると思ったりします。

藤井 今おっしゃったように体感的に評価できる、民間企業なんだけど、人事評価できる人間おらんもんですよ。だからこういう形でね、評価される人大変やと思うんですよ。そこがスタンダード、境界線がないんですよね。

片寄 つらいですね。何度か評価評価って数字で出さないかんで、教育としておかしいところがあるんですよ。だから基本的にはこういう社会的な所になじめるかどうかっていうことで、あんまり学業の面では力及ばん子が救われるような、そういう評価にしてあげないと、ここにいいところあるなというプラス評価型のがいいんじゃないですかね。これを持ってできないからどういふもんでもないんで。むしろ日頃目立たんけど、こんなすごいなこの子はという、そういう見方をしてあげるほうが、基準でなくて、あったかい見方

を入れてほしいなって気がします。質問あるんですけど、せっかく S 評価いただいて、全国でも突出した評価だと思うんですね。次なるプロジェクトに応募されるのでしょうか。この続きが恐らく何らかの形で出てくると思うんですね。まだ出てない。

大江 文科省関係の補助金事業が、全て平成 31 年で止まってまして、31 年で COC プラスが終わる時点でもう一つ AP っていう事業があったんですけども、それはこういった可視化なんです。学習成果の可視化ってのも、それはエントリーかけて駄目だったんです。何が駄目だったのか文科省に私も聞きに行ったんですけども、園田さんの経験値教育っていうのは文科省の中でも知れわたってよく分かっているんだけど、組織体制の作り込みが AP 事業挙げたときに弱かったことが大きかったのかなという。大学の意思が分かるような組織作りって言われて。

片寄 神戸大学がホストになってるから、事務的に大変だったろうな。

大江 COC プラスは、本当に上から言われて入試の期日をおたくが変えて周りの大学さん変えなさいまで言われて。うちなんかはいいんですけども、埼玉の十文字学園さんなんかは、埼玉大が落ちてしまったので、途中で宇都宮大と、埼玉県にある大学なのに栃木県の COC プラスに入っている、栃木から来ている学生は何人か首都圏なんているんですけども。

片寄 そういうのもあるんですか。

大江 でも本当に、どうこの COC を決着させていって継続するのかっていうのと、もう一つは、当然 COC は尼崎とやっていますから、尼崎市市内だけで動いてるんですけども、昨年から香美町にサテライトスタジオ置いて、但馬大岡山キャンパスもあるので、但馬地域あたりとか近隣含めてもう少し活動範囲が連携範

囲も尼崎限定でないっていうのも考えていけないといけないのかなというのがあったり、本当に 40 年来お世話になってる但馬地域、大学もない所なので、そこも含めてっていうふうなことです。いずれにしても先立つものをちゃんと担保しておかないといけないというのがありますので、そういう補助事業を、県の補助事業なんかも手を挙げて、但馬のも 100 万で 3 年間出でて、活動費はあるんですけど、県の補助金の使い方が非常に使い勝手が悪くて。学生連れて 1 泊 2 日で行くんですけど、宿泊費しか認められない。

近藤 そういうことでは結構厳しいですね。

片寄 いずれにせよ S 評価を武器になんか取れないかなって気がしますけど。先生お疲れでも大変なんですけど。

大江 29 年のは終わる。その次の年ですよ。研究費は実は前からある学内の共同研究予算の 500 万が今年度の募集なしでゼロ失効になるので。

前原 自己資金になるんですね。

大江 自己資金で何とか。先生がたにも科研費をどんどん取っていただく仕掛け作りをしていくっていうのが一つですね。悩ましいところは TA さんの人件費をどこまでっていうのは、法人側とこれから折衝かけてという形ですね。COC プラスの人件費は、TA さん研究員 1 名分のアルバイト雇用だけなので、その二つが大きいのかなと思ってます。あとは広報物の印刷媒体だとかは数を減らしていくなりということと、学内全体の広報も見直さないといけないので、学内予算の組み替え、部署のあり方ですね。最低限残さないといけないのは地域とのコーディネート機能の地域連携推進事業の部署を残すのと、科目は先ほどご説明したような形で残っていて、それは教務課で予算化されてるので運営できるのかなと。積極

的に外に発信していく予算が何らかの形で取っていく必要があるのかなということです。

近藤 5年で終わって、そのあとは。

大江 国の予算が全部を31年で終わりにしてるんです。31年以降に何が出てくるか分からないのと、地域創生も本当に進めれるのかどうか、オリンピックでスポーツ関係のほうに随分、スポーツ庁の予算、シフトもかかっていますので。結局それでどこの大学も今、新学部の設立と新学科等で31年スタート、前倒しの30年スタートで、首都圏は定員を抑えられてるので、それほど一定な場合は取れなくなるので、新しい学部作って何とか。大きな大学はそんなんでどんどん。2018年でがたんよ減りますから、かなり中小には厳しい状況ですね。先日も成城大の先生に聞くと、首都圏は逆にそれでたくさん取れなくなったんで、早稲田や慶應から下にあふれてきてるので、成城大は入試の読みが去年できなくて、取り過ぎて補助金カットに。思わんところで影響が出てるんですっていうのが。

片寄 S評価のことはマスコミには出てるんですか。

大江 市政記者クラブには発表に行ったんですけど、誰も取り上げてくれませんでした。

片寄 もうちょっと有名にしないと。

大江 一応9月ぐらいに、高知大学がCOC全体の主管大学でやってるんですけど、情報発信もやってるんです。高知大学はS評価の大学を順番に視察に来て、なんか媒体を作って売り出すということで、学生の話も聞きたいとかいうので来てます。私学はうちだけです。ただ、その兵庫神戸のコンソーシアムっていう兵庫県全体の大学のコンソーシアムの集まりの中で、地域連携の主管事務されたシイナさんなんですけど、それぞれ自分の所は

やってて、うちあんまり関わられてない部分もあります。

片寄 高知大学からここへ。

大江 3名、高知大地域連携の教師が視察にいられて。

片寄 視察にいられたときに、マスコミに出てもらって。せっかくのこれ、惜しいですね。

近藤 広報せなね。いろんな面で広報戦略やっていますから。これ発信したいですね。

前原 来年で補助金切れちゃうけど、次の補助金のために、最終年度だから、どんとPRしてもらわんと。

近藤 もったいないですね。こんなになったやつを閉めるのは。何らかの形で継続せな。学生も人気あるだろうしね。

大江 今理事長もいろいろと昔から書かれた本とか集めながら語録を作ったりもしてるんですけども、早い時期から、先代のときからそうなんですけど、地域に開かれたとか地域のキーワードとかを続いてきて、インターシップの話なんか平成19年に尼崎クラブで話をされた講義録が残ってて、いろんなこと話されて、なかなかその当時は人文系の学部やったんですけど、産官学の産学がうちの場合難しいけども、逆にそういう経済学部とか違う素人感覚で企業と話ができる大学づくりにしたいということをおっしゃってたり。きちんと引き継いでいかんとあかんと思いつながら、なかなか国の補助金の締め付けと、地域創生が今後どう動いていくのかがもう一つ見えないんですね。今回も最終のシンポジウムに女性活躍を置いたのは、やっぱりあれだけ1億総活躍って言いながら、学長自身もおっしゃるんですけども、女性に働きやすい環境になってるかっていうと、火花が上がっている

だけの状態なので、実質そこは考えていかないとっていう。

片寄 子ども食堂面白そうですね。いい視点だと思いますわ。

大江 今回ちょっと、この9月からの半年で、ものすごく今広がってきてるのと、場所場所で皆さん個性が強いので。実際に運営される方に授業に来ていただいてお話しただけらんやったらお話しただいて。

片寄 この学校に向いてるようないいテーマだなと思って。

濱田 よく言われている子ども食堂って、本当は貧困家庭のっていうのがあるので、それが今は誰でもどうぞみたいなイメージで、居場所の一つとして、コミュニティ食堂みたいなイメージになってるのかなと思うんですね。その辺がどういう地域の特性で、どういう子どもたちの食堂というか居場所になっているかっていうことで、いろいろ取り組んでいただいたらいいと思うんですけども。子ども食堂でも県のほうでも意味が違ってきてるよねって、本当の意味の子ども食堂と違うよなっていうので、あんまりやり過ぎると、この頃子ども食堂みたいのちょっとなりかけてますよね。コミュニティ食堂みたいなイメージで、こんな形の居場所、子どももお年寄りも一緒に食事してますよ、こういう居場所ができていってぐらいのほうがいいかもしれないですね。

榎本 どうしても1年生の授業のときに、市役所から3、4人来ていただけるんですけど、統計データでしていただく話と実際に公園見た現場と今回も、昨日もやんちゃんこのスタッフの方がコメントで言われたのが、なかなか印象で地域課題を言ってしまう。1年生は仕方がない分、エビデンスがなくて、1グループだけ肥満の統計を、保健の健康増進課のデー

タを使って話をしたんですけど、あとはどうしても印象、地域課題を印象じゃなしにもっとちゃんと捕まえるということと、難し過ぎるのかな、現場の話、1年生にとって、行政課題の話とそこの間がというのがあって、その辺も立石課長と一緒に来ていただくときの話のレベルと話のありようと、子ども食堂がテーマであれば、それに合わせた形で、今の孤食の問題だとか、子どもの成人病予防、肥満の問題というのは健康診断等の統計で出てきているので。

前原 もとものの当初の目的というか、最後は地域創生とかいろいろやって、ちょっと違う方向に行ってるのかも分からないですけど、知の拠点の趣旨っていうのは、もし個々の大学がなくなったら、尼崎の地域の方が逆に困るんじゃないかという、そういう話がもともと趣旨の今回にあった記憶があるんですけども。

大江 そうですね。教育改革と地域の知の拠点到、大学の種類分けをするときに、研究グローバルな拠点の大学、特別な専門領域な大学で、地域の拠点の大学というふうな三つの分けたときの地域の拠点作りをしなさいということですね。

藤井 という趣旨やったと思ってる。国が力を入れて補助金出してもらって、5年間やって。補助金はなくなるけど継続しなさいと、そういう趣旨で当初やられたと思うんですけどね。それが各大学、自分所の大学の生き残りかけて、それに絡めてね、事業展開してきたということだと思うんですけども。大学がなくなったら、尼崎の人困りますよという観点からすると、例えば、この事業について、大学側と地域側で相互にメリットがあるということであれば、運営資金については一部、この地域の方から給金もらうとか、そういう発想もありなのかなと思ったりするんですけども。それを考えていくと、それをほんまに出して

くれるほど、支持されてるのかどうかっていうことになってくるし、先ほど兵庫県内の就職率話されましたけど、学校の存続の観点からすると、いかにこの事業をやって、地域からうちの学校に入学してくれた人数が何人増えたかっていう評価のほうが、経営も大事なのかなと思ってらるんですね。それが結果的にどうだったかっていうのをこの辺で報告すべきなのかなと思ってる。

大江 どうしても学生募集の広報上、専門職養成なので、学科が表に出すぎるんです。共通にこういう地域でベースとして外に出て学んでるんだって、COC 自体を、特にうちの入試広報の体制姿勢からいうと、表に出て今まで全く出してなくてここに来たらこの資格が取れて出口を見せていく形になって。でも近隣に同じ学科が看護の中で増えてきた中で何を特徴付けるかっていうときに、この S 評価もらってる COC ってのが、そんなに表に学内から発信ができてないっていうのが一つあるのかなと思います。尼崎市本体は財政難なので。それも文科省から常に聞かれるんです。連携先の行政から経済的人的な援助があるのかなのかいうのゼロって書くしかなくって。場所の提供だとかも評価には関わってくるので、あるんですけども。

藤井 尼崎市の行政自体は、もうちょっと本気を出してもらわんと。

前原 地域の企業さんにとって、前から言うてますけどね、人材の提供っていうのは、ますます厳しくなってるちゃいます。すごい厳しい話なんで、それを供給してもらおうっていうのは、かなり地元企業さんと大学のギブアンドテイクという関係が出てくると思いますよ。人をいかに供給してもらえるかっていうことは、これからの時代、4年ぐらい前かな、すごく大きな問題。今まで資金ショートしたって企業倒産してたんですけど、資金回ってても、今はローン倒産って。人の供給っていう観点は、

すごく大学を支持してもらえると。

前原 2018 年から子どもの数がすごいガンと減るわけでしょう。

榎本 がたんと減りますね。

目腹 日経新聞にも先週やったか載ってましたけど、どっかの研究の方が書いてましたけど、日本全国の募集人数だけは増えてくんですよ。大学入れてね。

榎本 新学部ができて、収容定員はどんどん、文科省も認可していってますので。

前原 人口減って行って、2018 年からは一と減ってくるということで、どう考えても。今までは不祥事起こして学校閉鎖ってあったけど、真面目にこつこつやってる学校でも、必然的に廃校に追い込まれることが、これから出てきますよって記事が載ってました。そういうのももう来てるわけですけど、それを受けて、どのようにうちの大学としてやっていくのか。

大江 そうですね、本当に。国立大学すら。

前原 全ての取り組みについてはそういう観点でみんなやってもらわないと生き残れないという。いかに学生さんに来てもらえるかっていう最大ですよ。そのためにどうするか。

大江 つながりプロジェクトとか経験値教育っていうのが、高校生に届いていない。努力もできていないし分かりにくいかもしれないですね。

前原 社会福祉法人の集まりの会合で言わせてもらったんですけど、保育士になる数が少なくなってるのね。保育士さんの養成する大学の入学者数が減りましたっていう話をお聞きしたので、その話しして、高校生ぐらいから

保育士の仕事はすごくやりがいのある仕事で、日本の全体の生活機能を確保する、すごく重要な仕事ですよというアピールをやってかなあかん。高校生向けのアピールやな、その職業を絡めたね。

大江 キャリア教育の中で。

前原 入学者数に大きく影響させるぐらいのアピールしてかなあかんのかなと思いますね。園田学園のアピール行くだけじゃなくって、そのうちの一つの学部である保育士さんと職業の内容を含め。

藤井 せっかく高等学校持ってらっしゃる、そこからできるような仕組みを。

大江 なかなか今、三つコースがあって、一番上の進学コースは、他大学にどんどん出て行ってるので。そこ大きな課題で、付属高校ではないので、同一法人ではあるんですけども。

近藤 併設校？

大江 併設高校になる。法人の中の高等学校と大学なので。高大連携をやっていかないといけない、そういう場が今まで少なかったのも少なくて。

藤原 高校は高校で、また生き残りを考えないと。

大江 校舎がきれいになって、高校のほうが集うまくいって。ハード面が新しいものできてきれいな状態ですよ。

前原 外部からどんだけ入学数を獲得するかが一番ポイントになります。

大江 阪神間は似た規模の女子大がいっぱいありますので。またこれで看護が、大手前さんが作られて、伊丹キャンパスはなくなります。

すいません、いろいろとありがとうございました。時間随分超過をいたしましたけども、最終年度ということでもう一度引き締めてまとめをということでやってまいりたいと思います。またいろんなイベントシンポジウム等をご案内させていただきますので、お時間ありましたらお出掛けいただけたらと思います。すいません、ちょっと学長そういうことで同席できませんでしたが、よろしく願いたします。それではあと特にないようございまして、これで第1回評価委員会を終わりたいと思います。どうも長時間ありがとうございました。

(了)

第二回外部評価委員会

日時：平成 30 年 3 月 2 日（金）10:00～

場所：園田学園女子大学 5 号館 3 階 特別会議室

出席者：

近藤正昭（尼崎工業会専務理事）

高谷浩司（尼崎 PTA 連合会会長）

片寄俊秀（大阪人間科学大学教授）

濱田英世（特定非営利活動法人「やんちゃんこ」代表）

前原啓二（前原会計事務所）

川島明子（本学学長、地域連携推進機構長）

大江篤（本学教授、地域連携推進機構副機構長）

榎本匡晃（地域連携推進機構）

川島 皆さん、おはようございます。本年度で COC の補助事業は終了ということになります。きょうは、その最後の外部評価を頂くということで、平成 27 年度から私が学長を務めさせていただきまして、地域連携活動は、できる範囲でこの COC に引き続いたものを進めてまいりたいと思いますので、今後ともどうぞ協力お願いいたします。

地域連携推進機構というのが整ってきたんですけど、それを含んで発展した形で、社会連携推進センターというものを 4 月から発足させます。その業務といたしましては、地域連携はもちろんのこと、それと研究支援といたしまして、地域志向研究も、これは地道ですけども進めておりますので、それも進める形で、含めて研究支援事業。それから総合生涯学習センターってのもございますけども、そこも一緒に含んで三つのユニットというか、仕事を含んだ形で、連携推進センターという形で、社会貢献、地域連携を今後も進めてまいりたいと思います。では、きょうはよろしく願いいたします。

大江 それでは平成 29 年度の事業報告ですが、資料の 1 番の冊子を使いながら一応 5 年間の全体のお話をさせていただきます。これが 5 年のまとめですが、年度の途中に作っており

ますので、幾つか追加になります。

まず 1 枚開いていただいて、教育・研究・社会貢献です。平成 30 年 2 月 10 日に、最終報告会とシンポジウムをやりました。稲村市長に来ていただいて、あと東洋学園大学の原田学長、本学の川島学長 3 名で、女性活躍と経験値教育ということでシンポジウムを開催いたしました。また 5 冊目の年報のほうでご報告させていただきますが、平成 25 年の採択からずっとシンポジウムを開いてまいりました。

まちの支援員。いろんな講座で地域の方に大学の資源をお伝えするという。それからまちの相談室というのが、地域の方からボランティアであるとか、そういうような内容を受け止めていくということで、件数についてはお手元のこの冊子の後ろにあります。もともと生涯学習を盛んにやっておりますので、全体で件数も増えてきています。まちの相談室は年によっていろいろ差がありますが、大体 50 件ぐらい。ボランティアの募集であったりとか、イベントを学生と一緒に企画できないだろうかとか、いろいろなご相談ごとが入ってきています。

それから、つな Girl ですね。学生地域連携推進委員会ということで、大学と地域をつないでいく学生の委員会なんです。現在 14 名の学生が参加してくれています。年に 3 回イベントをやっている、直近のイベントのチラシを入れているんですが、これは県政 150 年記念の補助金を頂きまして、子どもたちと兵庫県を知るすごろくゲームを、中央の森緑地の会議室をお借りして行いました。これが、つながるパラダイスで、けやき祭のときにはキッズフェスティバルということで、やんちゃんこの濱田先生にもお世話になって、地域の子どもたち相手のイベントを行いました。

ふだん週 2 日、昼休みに集まってミーティングをやって、先ほどのまちの相談室も、このつな Girl の学生が交代で、地域の方からいろ

いろとご相談ごとを受け止めていくというふうな形で進めてまいりました。

5年の課題としては、このまちの支援員というのが、実はなかなか教養系の講座が多くて、実際に地域のボランティアリーダーを育成するということまではいっていません。この辺りは、先ほど学長が申しましたように、社会連携推進センターの中に、今度は生涯学習の業務とこの社会連携・地域連携の業務が一体化しますので、そういうところでブラッシュアップをかけていければなといけないところです。社会貢献は以上です。

それから次めくっていただきまして、経験値教育の柱になる、このCOC事業で作った二つの科目と、それから経験値という数値化ですね。社会人基礎力の数値化について、年に1回、アセスメントテストを実施しています。資料の3をご覧ください。傾向としては、主体性が弱くて考える力が弱くて、強みは協働する力。コミュニケーション力もちよっと、まだまだという数値が出ております。学年ごとによって伸びたり、解答がうまくいってなかったりということがありますが、今後これも分析していきながら、この学生の育成する人材像として、社会に出すにあたってどんな力が必要かを考えていくということです。

毎回の地域でのボランティア活動についてもこの五つを5段階で評価いただいて、コメントを頂いています。濱田先生の所のスタッフの方には、非常に丁寧に学生を見ていただいています。大体イベント系のボランティアだと、よく頑張ってくれました、5点、5点って並ぶケースが多いんですけども、中にはあいさつもできない学生がいたりとか、厳しいコメントも頂きながら、地域の方にもそうやって学生を育てていただいています。

この資料に、学生名は抜いてるんですが、具体的にこんな書き込みがあったかを記しています。学生の具体例を幾つか挙げています。こう

いうのが、日々こういう書き込みをしながら年に1回、このベンチマークで評価を加えていくというふうな形。これが経験値評価で、これをどう各学科の学習内容にも合わせていくのか、というのが今後の課題です。ようやくシステムが5年間で整って、これからいよいよ稼働させて分析をしていくということになります。冊子に戻っていただきまして、科目としては二つです。「大学の社会貢献」という科目が1年生の半期選択科目で、前期・後期2回。そのつど市と調整して、テーマが学期ごとに決まっていますが、直近の今学期は子ども食堂をテーマに、幾つかの子ども食堂にボランティアに行かせていただいて、学生が子どもの居場所を考えるとというふうな授業をやりました。これについては兵庫県立大学と本学とで、市長・副市長の前で発表する政策提言発表会という機会をいただいていますけれども、その中でも厳しいことを言っています。やはり1年生の半年で、なかなか地域課題に向き合って何か提言するところまで持っていくのは厳しい。やっぱり机上の空論になりがちだということもありまして、次年度、この4月からこの科目を必修科目にして全員受けさせます。講義科目に切り替えて、きちんと地域の課題といいますか、地域を分析する理論をきちんと学ばせた上で、2年生の現場に出ていく「つながりプロジェクト」につなげていこうというふうに切り替えていくことになります。担当者も1名ではなくてあと3名、若い先生を含めて4名で、体制もしっかりさせていきます。この事業の中で3時間のボランティア活動を必須にして、とにかく地域には出さずだけでも、そこから企画を立てるのではなくて、その体験を踏まえて課題に向き合う科目にしていきます。

「つながりプロジェクト」を3年やりました。本当にいろいろと問題が多かったのですが、29年度、今年度の21クラスがここに挙がっています。1年目が28年度、21クラスです。1

年目は専任の教員が10クラス、非常勤の、地域で活動されてる方が11クラスで、21クラスありました。2年目、冊子に載っているところは専任教員が8クラス、残りが非常勤の先生がた。継続いただいている方、テーマは同じで先生が替わったものがございます。30年度、この4月から走るプロジェクトが22です。実はこの30年度からは、COC事業の枠組みが外れますので、尼崎市以外にも少し広げながら考えてます。専任の持つ科目が8というのは変わってないんですが、この中で言いますと、13番の久留島先生の図書館革命というのが、尼崎の中央図書館で今年度やっていただいたんですが、伊丹のこぼ蔵で考えてもらっています。

それから14番の芦田英機先生が、豊中の駅前のまちづくりということで、隣接の豊中市が入っています。また指導顧問の能島先生と、それからブレンヒューマンティーの福井先生にお願いをして。これが活動場所は尼崎と、ブレンヒューマンティーのある西宮が入ってくるということになります。今年度試そうとしているのが、後でお話しますが香美町小代に、県の補助金でサテライトスタジオを開いています。本学は大岡山という、豊岡市日高に山の家、ミニキャンパスがあって。そこを拠点にして中間農山村、過疎化した集落に3泊4日泊まって、1人暮らしのお年寄りのお宅に泊めていただく民泊も含めて十数人の学生でやっていく予定です。但馬キャンパスの活動も広げてまいります。

正直、学生は、なんで尼崎のことを学ばないといけないんだという疑問をまず発します。それから、自分たちが取る看護師や保育士や管理栄養士の勉強に、何の役に立つんだ、意味がないんじゃないかっていうことを面と向かって言うてくる学生が、何人もいますんですけども。なかなか1年で結果は出ないですが、将来的に何が分かるのか、時間がかかるのか

と思うんですけども。やはりS評価をもらっているのが必修科目にしているというところとして、学生のいろんなフォーカスインタビューで聞いていくと、どうやったら学生、地域に出ていくと思う？って聞くと、もうこれを必修にするしかないでしょうっていう、学生が言ってます。必修にして、やってみて良かったと思う学生と、1年たってもやっぱりしんどかったと思う学生と、それは必修だとそれぞれなんですけども。

やはり必修の意味合いがそれなりにあって、モチベーションもさまざまで、先生がたにはものすごくご苦労をお掛けしながらやってるんですけども、2年目になるともう随分、トラブルは少なくなってきたと思っっています。30年度までは1年間の通年科目で必修です。ただ、この春入ってくる1年生は、先ほどの大学の社会貢献の半期の講義を必修に、しますので、さらにつながりも通年だと重たいので、つながりプロジェクトを31年度には必修で半期科目にするというところで、ちょっとコンパクトにまとめながら活動をさせていく予定です。できるだけいろんな先生がたにも参加していただき、これが教育の部分です。経験値評価と、二つの地域志向科目。それは実質、全部継続をしていくという形になるということです。

その次の研究なんですけども、研究につきましては、この延べ15の研究が、50万円×10件ベースで500万円で進めてまいりました。なかなか全額執行できないケースや、継続研究1年だけの先生もあるんですけども、広がりが出たのかなということと、学問領域の違う先生がたのコラボレーションというのもできたかなというふうに思っています。この研究は地域志向教育研究、教育研究なので、この地域で、尼崎で研究してたことを、つながりプロジェクトに反映していただくという条件でやってまいりました。これについて平成30年

度については、大学の自前の予算の中に共同研究費というのが500万円予算化されていて、それを一般の共同研究と地域志向の研究というふうに2部門に分けて。で、一応250万、250万上限で地域志向の研究という部門を設けて、今エントリーしていただいているのが、その番号で言いますと2番の山本恭子先生。それから3番の私の研究、あとは6番の衣笠治子先生、108番の難波先生と4件。5件のうち4件は30年度も継続でということで、上がってきています。5年間である程度研究が到達したよという先生もありますので、これも地域志向研究というのも、大学の自前の予算で担保をして継続していく、という形です。

それから資料の1の1のデータですが、まちづくり解剖学も、地域と学生と教職員とが一緒になっていろんなテーマで学ぶということで。杭瀬小学校の学習センターの構想というのがありました。これも、今年は地域学校協働本部で文部科学大臣の表彰までもらうところまでいって。5年以前からなんですけども、一定の成果で大学も関わらせていただいた連携なのかなと思っています。一番近々なんですけど、3月のテーマは防災ということで、食物栄養学の松葉先生に防災食のワークショップということで、お願いしています。

前回の第5回、1月には榎本課長が、アメリカのポートランド州立大学の地域連携のワークショップに、自費でお休みを取って参加していただいて、その報告をしていただきました。コミュニティー・ベースド・ラーニングという、本当に先進的なところで、日本の大学も注目しています。日本人向けの地域連携教育の1週間のワークショップで、実際に向こうの授業にも入って見てきていただいて、それを自費で行っていただきながら報告までさせているというような海外の先進事例をふまえて、スタッフのほうもブラッシュアップしてきました。そのとき尼崎市ひと咲きまち咲き

担当の立石課長も一緒に発表してもらって、市との今後の連携についても話しています。

補助金の大きなところが次の研究費、それからもう一つには人件費。授業を運営するためにティーチングアシスタントを今8名、アルバイトをお願いをしているんですが、その8名が2名に。自前の予算と、COC+が若干残りますので、2名になります。その辺りは、今度は新しいセンターのほうに専任の職員も1名入ります。引き続き課長もいて、契約の職員もいますので、最初はTAのサポートがないと回らなかった授業も、先生がたもうまく授業回していただけるようになりましてし、主に2名のTAは、尼崎の連携先との調整役に1名、それから但馬の調整役に1名。授業の補助は教務課で別途予算化して、なんとか縮小させていくところです。

追加であともう1点、資料の2、COC+事業のほうはあと2年残ります。来年度は50万ぐらいの予算です。このCOC+のほうの中間評価が出て、A評価を頂いています。五つの領域、それから学生の課題解決ですね。神戸大学の取り組みが中心なので、篠山の農村イノベーションラボとか、拠点の整備が中心です。改善はやはり、起業ですね。事業・雇用創出数を踏まえて、今後、兵庫県への就職率が課題です。就職率が目標値を下がっているところ。それからイノベーション領域が、なかなか関わりが難しいところです。

本学の関わりと成果については、シンポジウムに2回参加をしたことと、1月に発刊されました『地域歴史遺産と現代社会』というテキストで、但馬を中心にした論文を1本載せさせていただきました。出版は神戸新聞出版文化センターです。今月末には『子育て支援と高齢化』、これについては、本学の宮田さおり先生、野呂千鶴子先生に二つご論考を書いていただいています。

COC+の流れとして、全部で5冊こういった形

の本を作って、3冊目以降は関わってない分野なのですが、学生に地域での学びを周知していくという取り組みです。この間で神戸大学の、分野で言うと保健学研究科と人文学研究科になるんですけども、学部単位で、うちの大学と向こうの学部の単位での連携強化を大学間連携で考えていこうというふうに思っています。

あとCOC事業ではないですけども、兵庫県の補助金を頂いて、先ほどの香美町小代のサテライト、そこでの活動をやってまいりました。それについて実は、うちの拠点を他大学が使うというふうな補助金があって、神戸大学の地域連携センターと一緒に小代地区の、歴史文化の分野で一緒に調査、研究活動をさせていただきました。これも、次年度に向けて継続していくというところです。

従って、まず大きな組織変更で、学長を機構長として、学長のリーダーシップで5年間地域連携推進機構の体制が出来上がりました。新しい社会連携推進センターではセンター長が着任して、榎本課長、それから生涯学習のほうの大野課長と、2名の課長の体制で地域連携と生涯学習と研究支援、三つの部門を一つのセンターという、発展的に組織を作ること。そこをベースに社会貢献。まちの相談室も当然なくしませんし、つなGirlの活動もそこが管轄をしていく。

教育の科目は必修とか、半期、通年っていうのは組み替えるんですけども、同様に推進をしていく。研究は自前の予算、最小限のTAで何とか回していこうというのが将来設計で、30年度以降のCOC事業の、経験値教育プログラムの継続というところです。

県内就職率も、県外への若年層の流出人口が全国ワースト2位。先月になると内閣府のほうから、首都圏の大学と地方の大学が手を結んで、国内留学ですね。首都圏の学生を地方で学ばせて、そこに定着させるというような

補助事業が出てきたりとか、そんな動きになっているんですけど。地道にやってきたこの5年間を何とか自前の予算の範囲の中で継続的にやって、より高めていきたいところです。

以上、事業報告と今後の展望と課題です。いろいろご意見を頂ければと思います。

川島 ちょっとお話ありがとうございましたけど、学長と知事と話し合う会というのも、就職率の話題一辺倒ですね。いろんな方面からご意見は結構入っているんですよ。でも、就職先を制限というのは、正直やっぱり地域が魅力的にならない限り少し難しいかなっていう部分ではあるので。お互いに協力してやりましょうね、というところで話は進んでるんですけども。

近藤 特に今は就職先いっぱいありますからね。難しいですよ。

大江 どうしても、隣が大阪ですから、学生も大阪からと兵庫からは半々ぐらいなので。私学の補助金では県内就職の人数で補助が受けられる、受けられないという点数のポイントがあるんですが、年によるとやっぱり大阪が多くて、兵庫が少ないというのがあって。幼稚園、保育所なんかでも同じなんですけども。片寄 絵に描いた餅ですよ、あの話は。大変だ。しかし。よう頑張りましたね。

こういう冊子ものはたくさん出てるんですけど、動画みたいなようなものはないんですか。今後出す？

大江 今回初めて県の補助金で、一つは、但馬でやったのは、その予算の中でプロに行っていて、YouTubeで流せる動画。今編集中で2本、学生が但馬で活動してる分と。もう一つは猪名寺自治会さんと一緒に、猪名寺忍者学校というのがあります。県の改革のふるさとづくり青年隊っていう町の外から入る青年隊にうちの学生を入れてもらって、それが5回分動画になりました。ホームページも県の補助金で作られて。うちはリンクを掛ける形なんですけど、動画も、自前で撮るだけではない

くプロに撮って編集も掛けてもらっています。
地元のエアグラウンドという業者さんです。
片寄 新入生なんかで入ってこられる学生さん
にパッと見せるには、そういうのが。

大江 そうですね。

片寄 それから、社会的にもこんなことやって
るんだよというのを、うまくそういう動画で、
15分ぐらいで見せたいですね。毎年学生さん
って代わりますから、見てすぐ分かるには、
そういうのが残せたら良かったなという気は
するんですけどね。

大江 そうですね。

片寄 それから、地域の人も私が映ってるわ、
というような、そういう喜びも与えてあげて。
こんだけいろんな所、迷惑掛けて、ものすご
いたくさん動員されましたんで。そのお返し
もせないかんですよ。

大江 確かにそうです。

片寄 それが次につながっていく、楽につなが
るような、そこら辺のテクニックは。あとは
締めめ段階、特に短大生なんかは本当に、地
域に出ると言っても無理がありますよね。

大江 そうですね。短大生はやっぱりなかなか
難しくて。この春に子育て支援の「びよびよ」
という施設を作って、そこの中で学内に来て
いただける、地域のお母さんがたと接するこ
とができるようになって。阪神南県民センタ
ーの阪神つながり交流祭で、今回は10分のプ
レゼン全部を短大生では難しかったので、半
分四大生がやって、半分短大生にそこでの取
り組みの発表をさせるというような形で発表
させていただきました。あと動画の問題は、
どうしても個人情報のあるので、子ど
もさんが映すときには保護者に全部、最初
からお断りでご了解いただかないと、画像処
理をしないと見せれないっていう問題があり
ます。

片寄 それは大変だな。マスクせないかな。

大江 一応、決まったイベントで、最初からご

了解の上でのところは、小学校であっても撮
れるんですけども。なかなかカメラ向けるだ
けでも小学校、今厳しいですし。

川島 肖像権難しいですね。

前原 いいですか。いろんなつながりプロジェ
クトある中で、私がいつも気にしてるのは、
新規学生の獲得につながるつもりでやるべき
かなど。今後もますます学生、絶対人数が減
ってきて、どこの大学も取り合いになる状況
で、例えばこの資料1の3の1番なんかで、
高校に直接行くわけでもね。そのときに
高校生が、園田学園女子大学からいろいろ来
てるという、学生も含めて、先生も含めて、
その場で見られるわけですけども。そういう直
接インパクト与えるような活動というのは、
学生獲得という話にも直接結びついてくるの
かなど。他のプロジェクトも当然、親御さん
とか兄弟とかいろいろ関係、影響はあるとは
思いますけども、どこの大学行くかというの
は、一番意思決定強いのは、やっぱり本人か
ないところもあると思いますし。この高等学
校での活動というのはすごく力入れてやる、
全然観点違うんですけど、学校が存続してい
くためにはやっぱり、学生確保していかなあ
かんので。そういうようなことは、ちょっと
思いました。

大江 ありがとうございます。明治維新以来、3
回目の大きな教育改革やって、学習指導要
領が変わって、中学や高校に今は、大学が今
やってきてるアクティブラーニングというの
であったりとか、PBL型の授業が始まってい
ます。他大学でそういうことされてる所があ
るんですけども、この5年間で作ってきたう
ちの地域課題解決のノウハウを、高校の先生
向けの研修会にうちの教員が行ってお話しさ
せてもらうとか、高校生と大学生が一緒にな
ってやる形で、当然共学校に行くと男子の生徒
もいるんですけども、どんどん高校に向けて、
いろんな高校に出向いていく出前の仕掛け

ていうのは、広報課と一緒にやっていかないといけない。

ちょっと今日も、実は日経BPさんにブランドイメージのアンケートを今回初めて取ったんですけども。近畿圏だけの日経の読者さん層と、それから高校生を持つ父母の方のアンケートで、近畿圏で、大学の認知度ですね。園田学園女子大学知ってる人が47パーセント。53パーセントが聞いたこともないという状態です。それが兵庫県と大阪でいくと、大阪だと40パーセントぐらいまで下がってしまって、大学そのものの認知度がなかなか今、上がってない。別の所のネット調査でかけたのは、女子高校生への認知度が26パーセントしかないっていうような、かなり厳しい結果が出るので、そういうものも、ちょっと発信の仕方がもう毎回、ご指摘いただいているように、弱くて。先ほど言っていた動画とか、SNSとか、全学的に仕組み作りをやっていかないといけないなと思ってます。ただ本当に、これだけやってきたことのノウハウは、やっぱり高等学校に向けてきちんと伝えていくというのは大事ななと思っています。ありがとうございます。

濱田 私もいいですか。うちにも、たくさん学生さん来ていただいたんですが、さっき初めに言わはったみたいに、なんで尼崎のことせなあかんねんっていう学生がいる。別に尼崎のことじゃなくていいんやけども、地域のこういうつながり、コミュニケーションとかそういうことを持たせるためにされてるんだと思うんですけどね。やっぱりその辺が、学生にもちゃんと伝わってない。ただ尼崎のことをするんじゃない、別にそれは大阪でも但馬でもどこでもいいわけで。やらされてる感じじゃなくて、いうのが大事ななと思うんですよ。そしたら、これだけの項目を、例えば学生が好きな所行けるとか、自分が研究したいものに行けるとかいうふうにすると、もっと自分

のモチベーションも上がるかもしれへん。難しいことかもしれませんが。

やっぱり教育学科の子なんかは、子どもに興味のある子が来るわけやから、どういうふうに関わったらええかみたいなことをしっかり見てはります。ただ、今、看護学科の学生さん実習に来てくれていて、それは授業として来るんでしょうけども、全然違うんですよ。とても厳しいようで、朝のカンファレンスから始まり、きょうはこんなことしたいと思います、お母さんにアンケート取っていいですか、とか。終わってからも自分らでちゃんとカンファレンスをして、司会も全部自分らがして、ちゃんと学生が、きょう一日これを目標に来るんだっていうのを、自分でやってみて、できたかできなかったかという経験を、すごい持ち帰ってくれる。

なんかうち、寺子屋で張り切ってる地域のおっちゃんなんですけども、もう毎回、最後のカンファレンスにいろいろと。ここで非常口はどこにあったか見たか、とか言って。なんかあったらすぐに子どもを誘導せなあかんの、とか、いろんなことをこんこんとしゃべりはるんですけども。まあ、それもいい経験かなと思いつつ見てたりするんですけど。

せつかくこれだけの授業があったりするので、もっと学生にこのためにこれしたい、何ならそれが就職につながる、みたいな意識をしっかりとつなげてやると、兵庫県でこんなんやってんねや、こんないい所あるんや、みたいなので、ここで就職してくれないかなと、ちょっと思ったりしながら聞いてました。

大江 いえいえ、ありがとうございます。そうですね。本当に、リフレクションの振り返りのところが多分、今つながりの中で一番弱くて。最後にプレゼンやって終わってしまってるんです。今、大学もそうやって丁寧に学生見ていきましょうという流れになってて。一番すごいと思うのは金沢工業大学ですけど

も、1週間リフレクションデーっていうのがあって、専任教員が1時間ずつ学生と1年間の学びを振り返る面談をかけて、やっていくっていうふうな。なかなか、うち、そこまでは取れていないので。せめて自分のゼミの学生であつたりとか、担当してる子たちに対して、そういう時間をある意味大学として設けてる。この日は振り返りの日なのでって言って面談であつたりグループディスカッションであつたり、させる仕組み作りが課題かなと思つてます。ありがとうございます。

前原 兵庫県の就職率は卒業して就職した率を取られてるんですよね？

大江 そう。新卒です。

前原 再就職でカムバックしてる率を取ると、もうちょっと高くなってるかも分かりませんもんね。卒業生の後、追われてるんでしょう？

大江 それがなかなか今できてないので、その仕組み作りもしないといけない。結局、出た子たちが3年後、5年後どうなってるか。それから大学の学びがその子たちの今の生活にとってどうなのかっていうアンケートをきちんと、やっぱり取らないと駄目やなということです。

前原 ちょっと、余談なんですけど。例えば看護師さん。もう今、世の中でも取り合いになって。看護師さんに限らず、他の特定の業務をする方の仕事のあっせんですよ。仲介。人材紹介会社。大学の中ではそういうことできないと思いますけど、大学の関係のそういう人材の仲介会社作るとか。それと、卒業生の後追いというか、状況の把握とかも絡めて、やったらあかんのかなと思つたんです。

前原 自分が卒業した大学っていうのは、若いとき分からへんのですけど、40、50になってきたら、やっぱりすごい感謝と、愛着言うのかな。逆に40、50になって寄付の話してきたら、やらなあかんかなと思つたりとか。

川島 おっしゃるとおりです。うちはその制度

がない。やらなかった事情っていういろいろあるんですけども、一つはやっぱり女子大ということで、なかなか寄付金を募っても難しいやろうという意識があつたんですけども。

前原 女性の社会進出、共働きが普通になってきたし、専業主婦が中心だった女性と大きく変わってますからね。寄付金の件も、昔とは違ってかなりできるようになってきたかな。

大江 同窓会のほうから出してる機関誌はありますが、大学のほうから同窓生に対しての動きがない。その仕組みを作るのと、今度、社会連携推進センターになるから、生涯学習の効果が、どちらかという旧来の学部の教養系の歴史のセミナーから、子育て終わってから再就職する、社会に戻るときに必要なスキルの育成も今、大学に求められてる部分なので。シニア層だけではなくやっていかないといけない。

授業内容について高谷さん、何か。

高谷 そうですね。もし私が学生やったら、本当いろんなプログラムがあつて楽しい内容やな、と思うんですね。何人かの方おっしゃったように、これを経験して行って、いつか社会人になって、伝えてくる時が来るんじゃないかなと思いますので。そういった意味ではいい企画内容だと思つてます。学校だけでなく、地域に出ていろんな方と出会って、考える力も、多分これで付くんでしょうね。

川島 そう思つてます。多分学生は、半分ぐらいはもう、しんどいとか思うんですけど。でも、ちょっと言われましたけど20年、早かったら5年、6年後に、やってて良かったなと思うのが絶対来ると思うんですよ。しんどい記憶っていうのは残るので。

濱田 受け入れ側も、園田の子はええ子やっただっていうのと、逆にかなわん子やっただ、みたいな口コミになる。これもPRの一つやと思わないけませんね。

大江 はい。だからネガティブな評価も出てきてしまうと最後はもう、先生がすいませんって謝りに行って。今までの経験からでも、踏み切れない教員もいっぱいいます。でも、この5年間で大きなお叱りを受けたというの、ないですよ。ものすごく大きなのは。

片寄 この評価、これ面白いんですけど、これ独自で作られたんですか。

大江 そうです。124、自己評価なので、自分で選んで数字にしてきてるという。

片寄 そうですか。すごいな。これは開発をされた。よく教育効果はどうなんですかっていうような、聞かれるけど、これはなかなか上手だなと思って。

大江 今は業者のそういうテストがあったり、それぞれの大学で社会人基礎力という経産省のやつをベースにしながら独自に作ったりとか。

本当に、その冊子の中での、こういう一番右端の、受け入れていただいた方のほうからのコメントも、最初は「ありがとうございます」だけがたくさん並んでたんですけども、だんだん増えてきました。ピックアップはしてありますが、本当にたくさん書き込んでいただく所もありますし。ご面倒を掛けることになるんで。

片寄 この活動で内外のファンも増えたんじゃないでしょうか。それも評価に、何でもこういうグラフにせんといかんのか。

大江 中身はよろしいでしょうか。では、あと事業報告、決算見込み、細かなものになるんですけども。榎本課長、お願いします。

榎本 はい。すいません、まだ途中ですので、決算見込みという形で差引簿を、COC と COC+ の 2 枚を資料として提出させていただいておりますので、ご確認ください。年度末に改めて精算したものを提出させていただきます。

大江 COC のほうはまだ最初のこの報告書の印刷。それから先ほどの経験値評価システムの

開発の業者への支払いが3月にありますので、その辺りが大きいかなというところです。

COC+のほうは、再来年は多分、30 万ぐらいに落ちていく予算配分となってきます。

榎本 これはまた4月の段階で、神戸大学さんを通して文部科学省のほうに対比表であるだとか、細かい数字も全部提出することになっています。

大江 今ちょうど28年度予算の文科省の理由書のコメントが来てまして、例えば、この学会出張はこの研究との関係性は何なのかとか。

榎本 研究と、それから費用の面で、この段階でなぜこういうふうな備品を購入したのか。ただ年度末の予算の帳尻合わせではないか、とか。例えばスポーツ関係だとほとんどが、冬の段階でしか研究だとか、学生指導ができませんので、冬に実施するにあたって、簡単な、ロープを買うとかっていうようなことになります。それからもう一つが、学会もそうなんですけれども、印刷費がやっぱり、年度末に集中されますので、それが、適切なのかというのが問われます。

もう一つ、細かいことを言いますと、正直こちらとしては忸怩たる思いなんですけれども。夏の暑いときに庄下川の研究があるんですけども、子どもさんたちと庄下川探検隊という形での実施をするんですが、脱水症対策でお茶を準備してるんですね。そしたら、なぜお茶を準備するのか、嗜好品は駄目なので理由書を書きなさいと。理由書を今現在、作成中です。

前原 大変ですね。まあ、税金やからね。

大江 そうですね。文科省もそれを作って財務省に説明をしに行かないといけないので。あともう1回、今年度予算のもまた、来年の今頃に出てくる。なかなか、県の補助金のほうは学生の交通費が使えるからいいんですけども、なんでそこに行くのか全部書かないといけない。それから、飲食費は本当に厳しいで

すね。

前原 お金の使い方の指摘は、だんだん厳しくなってくでしようね。だから、去年までは良かったけど今年は急にあかんちゅうのが、徐々に出てくる。確かに、飲食厳しいですね。やっぱり市役所関係の仕事もさせてもらったら、絶対昼ご飯出てこない。昔は出てたんやけどね。出てくる市もあるんですけど。

大江 はい。いかがでしょうか。この全体の予算で言うと、この印刷製本については、来年度は自前になりますんで、縮小して。組織名称も変わりますので、この年報は5号で最後。社会連携推進センターの年報という形で、継続的に。予算がなくなるので、もうちょっと薄めの本になるのかなと思うんですが。それからニュースレターも、発行回数を減らしながら続けていく。先ほど言いましたように、研究費のほうも自前でやっていくことになります。

近藤 このセンターっていうのは地域連携の所にできるんですか。場所は。

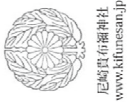
大江 向かい側に。来週引っ越しです。

大江 2月10日は一応、文科省の係官も来てもらって。一応この事業が、これで補助金終わったら終わりではなくて、こういう形で継続しますよというのは、話としては。それ踏まえて、多分そういうこと書かされると思うので。この最初の報告書で。

前原 両方考えていかないとあかんね。直接補助金をとると、やっぱりそれだけではどうしても足らへんから、国からお金を頂けるような工夫もどんどんしていかないと。だから、事務方の腕の見せどころになってきますよ。これ。

大江 ありがとうございます。では、このへんで、どうも長時間ありがとうございます。

(了)



平成二十九年 度

尼芋奉納祭

- とち** 平成29年10月22日(日)
10時より奉納神事
- ところ** 尼崎貴布禰神社
尼崎西本町6の246
国道沿い北側(駐車場あり)
- 主催** 尼いもクラブ
お問い合わせ 06-6338-1852

次第

- 10時 奉納神事
- 10時半 焼き芋茶席、尼いも演奏会
- 11時 いもはん等の販売
- 12時 いも割り体験(小学生以下対象)
- 1時 終了(予定)

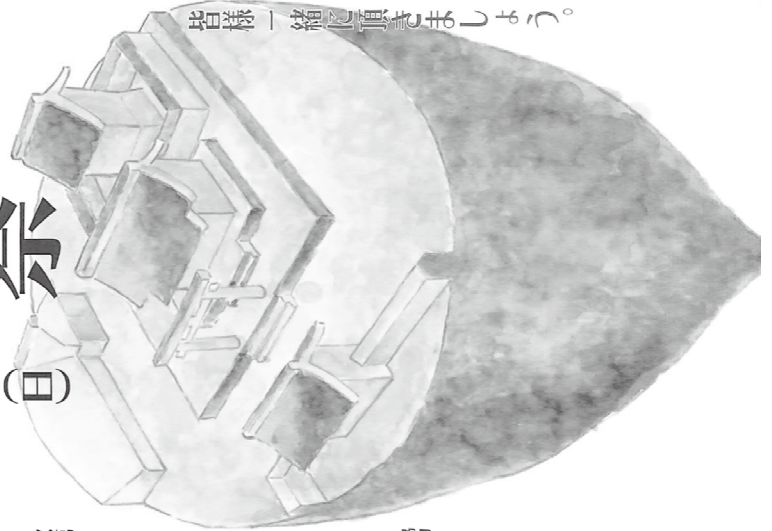
協力

- 貴布禰神社青年会 貴布禰太鼓連保存会
- 木曜会 巻田口 八力之次メスニ崎
- 尼崎中央文化財協賛 色之仲間
- 園田学園女子大学 てやもじおちけん

※この奉納祭は「尼いも」を主としたまつりとして開催され、
抽し当選があります。

このイベント、
ぜんがストゾ。

その昔、京都や大阪で珍重されるも
ジェーン台風で絶滅した
尼崎産のサツマイモ「尼いも」。
奇跡の復活を遂げた幻の味を
氏神様「きかねさん」に奉納し、
皆様一緒に頂きましょう。



やんちゃんこ

- ★てづくりおもちゃコーナー(100円)
- ★ゲームコーナー(100円)
- ★さかなつりコーナー(100円)
- ★おはなしtime
(エプロンシアター・パネルシアター)

園田キャンパス まちの保健室

おやこでたのしめる！
かんごがくせいのおねえさんたちと
いっしょにあそぼう！

平成29年度 ★つなgirl作戦Part5★

キッズフェスティバル

Go!Go!あまっこ隊 ～あまばへいぞ出陣！～

10月21日(土)

うけつけ:10:00～15:00
イベント:10:30～16:00
ばしよ:園田学園女子大学

るるんバルーン

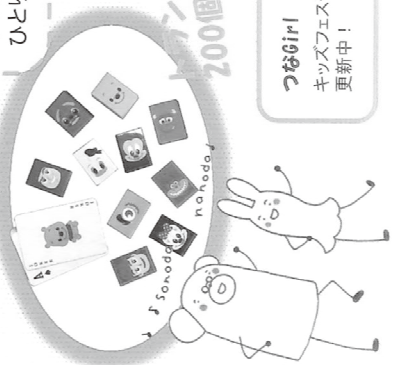
ふうせんでどうぶつや
けん、おはなをつくらう！
(ひとり1コまで)

三和フラモ工房

おやこで
フラモデルを
つくらう！
ひとり300円だよ！

養護実践研究会 スマイルズ

どうして ねるんだらう？
どうぶつすいみんクイズや
かみしばいでまなぼう！



キッズフェスティバル
200個限定！



つなgirl Facebook
キッズフェスティバルに関する情報も
更新中！

園田学園女子大学
SONODA
地(知)の拠点



地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 COC+「子育て高齢化対策領域」
平成29年度 神戸大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学

3大学合同報告会

参加無料 定員120席

日時 平成29年10月14日(土) 開場 13:00 開会 13:30

会場 生田文化会館 大ホール



目的

現在兵庫県は少子高齢化に伴う人口減少が加速しており、地域での子育て支援や高齢化対策は急務です。この報告会では、医療福祉専門職養成課程を有する3大学が、これまで培ってきた地域社会形成のための教育研究の成果・知見を持ち寄り情報共有を図ります。

- 第1部 COC+ 概要説明/知っていますか?兵庫県~地域創生って何だろう~
- 第2部 学生発表/専門職学生として地域活動で学んだこと
- 第3部 ポスター掲示・情報交換会

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 COC+とは?

地方創生に関する文部科学省の公募事業で、兵庫県では「地域創生に込める変革力養成ひょうご神戸プラットフォーム」事業が採択されました。事業協働機関が一体となって地域の課題解決に取り組めます。

【事業協働機関 (ひょうご神戸プラットフォーム協議会)】

神戸大学・兵庫県立大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学・兵庫県・神戸市・神戸商工会議所・兵庫県経営者協会・兵庫県工業会・神戸新聞社

主催/神戸大学大学院保健学研究科地域連携センター・神戸市看護大学・園田学園女子大学 共催/心まようご神戸プラットフォーム協議会

兵庫県政150周年記念事業



つながるパラダイス3

体験型兵庫県すごろく

~見て、聞いて、食べて、転がして、兵庫県発見!!~

2018年

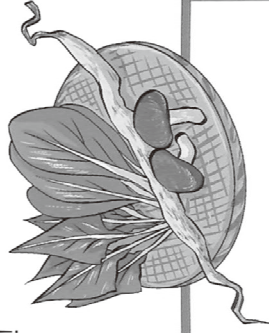
2/18日

時間 14:00~16:00

場所 尼崎の森中央緑地
パークセンター

◎園田学園女子大学から送迎バスあり※
※送迎バスの集合時間: 13:00 (解散18:00)

- ◎参加すると、兵庫県の特産品がもらえます!!
- ◎参加費は無料。
- ◎最大人数: 40人
- ◎雨天決行



2/14(水)まで!!

お申し込みは…
・氏名(ふりがな)

・メールアドレス

・電話番号

・送迎バスの利用希望 (行き/帰り/希望なし)

をご記入の上、つながるGirlのメールアドレス

「sonotunag@gmail.com」に送信してください。

主催

園田学園女子大学
園田学園女子大学短期大学部
学生地域連携推進委員会 つながるGirl



協力

園田学園女子大学
園田学園女子大学短期大学部
学生課 / 地域連携推進機構



園田学園女子大学COC事業 成果報告会

地(知)の拠点

〈地域〉と〈大学〉をつなぐ 経験値教育プログラム

時 平成30年2月10日(土) 10:00~16:30

所 園田学園女子大学
3号館2階AVホール



本学は「〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム」で平成25年度に文部科学省の「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に採択されました。
地域課題の解決の一環を担い、本学の学部・学科を超えた横断的な教育・研究・社会貢献の体制で経験値教育を進めています。

本シンポジウムでは前半に、地域志向教育研究の報告を行います。
後半では、この5年間の成果のご報告と今後の課題についてお話しします。さらに、「経験値教育と女性活躍」と題し、パネリストをお迎えしてお話をお伺いします。

無料

プログラム (3号館2階 AVホール)

第一部 地域志向教育研究報告会

10:00~12:30 地域志向教育研究報告-10研究-

第二部 大学COCシンポジウム

13:30~14:40 基調報告【大江篤 副機関長】

『〈地域〉と〈大学〉をつなぐ 経験値教育と女性活躍』の成果と課題

15:00~16:30

パネリスト

【原田規梭子 東洋学園大学学長】

【稲村和美 尼崎市長】

【川島明子 本学学長】

モデレーター

【野呂千鶴子 本学人間看護学科教授】

主催 * 園田学園女子大学地域連携推進機構
後援 * 尼崎市・尼崎市教育委員会

短大の一体運営「実学」「女性」を基本的命題として捉え、そして何よりも「地域」のニーズを敏感に吸い上げ、課題を克服しながら、今後も当短期大学教育の進むべき方向を模索し、既存のものの上に新しいものを創造して積み重ねながら、短期大学の教育のグランドデザインを継続して行っていく。

追伸、一谷宣宏理事長は七月一三日急逝いたしましたので、これが遺稿となりました。

生前は、関係者の皆様にはご厚誼を賜り、誠に有難う御座いました。

本学のミッションは、「女性、実学、地域」であり、短期大学部は生活文化学科、幼児教育学科の二学科構成で「学ぶ」が「働く」に直結している収容定員四二〇名の学部として、学生と教職員との距離が近くFace to Faceの一人一人を大切にすることを実践してきた。

一方、社会環境は、超少子高齢化、急激なグローバル化、情報化、AIの進化など社会経済構造の大きな変化の波の中にあり、短期大学士として相応しい知識や技能、さらに地域社会が求める課題をいかに解決できる強い人間力の担保等教育の質保証の社会への説明責任が強く求められている。

その要請にこたえうる教育の手法として「経験値教育」を掲げ、女性の社会的活躍が強く期待されている昨今、二年間の学びでの経験値の積み重ねの成果が、社会で主体的に、多面的に課題に向き合える女性の育成となり、地域で真に必要な存在としての「地(知)の拠点」として地域創生の一翼を担う教育を行ってきた。

また、外部資金獲得に向け、文部科学省の私立大学等改革総合支援事業にも積極的に応募し、短期大学部は平成二七年度に私立大学等改革総合支援事業タイプ一「建学の精神を生かした大学教育の質の向上」に採択された。また、平成二八年度はタイプ二「特色を發揮し、地域の発展を重層的に支える大学づくり」と私立大学等教育研究活性化設備整備事業の採択を受け、幼児教育学科の従来の乳児保育室「びよびよ」を二倍に拡大改修し、「そのだ子育てステーションびよびよ」として開設した。現在、学生の教育活動、地域連携活動、子育て支援等の場として利用している。また、平成二六年度より、大学と短期大学の枠を超えて学ぶ学科横断科目「大学の社会貢献」を開設し、多職種の資格を目的とした学生との連携を進め、真に人間力のある人材の養成に学生と教職員、地域の協働による教育改革を一層進めたいところである。さらに幼児教育学科は、『特例制度』を利用した保育士資格取得のための講座の実施や女性活躍の分野で文部科学省「職

業実践力育成プログラム(BP)」認定プログラムも設置し、社会人のリカレント教育も進めている。

平成二八年度的高等教育機関の設置状況は大学七七七校(私立六〇〇校)、短期大学三四一(私立三二四校)校、専門学校二八一七校(私立二六二二校)であり、短期大学の数はここ一〇年以上にわたりに減り続けている。平成二八年度は一八歳人口が前年度より約一万人減少し、短期大学志願率は約八万人、志願率、受験者、合格者、入学者は減少した。さらに定員充足率が九〇%を超えている短期大学は保健系、人文系、教育系のみであるという報告もある。

短期大学は専門学校等の差別化として学位授与機関に相応しい教養教育と実務教育・職業教育を満足させられる仕組みと教育が求められるべきだが、実践的な職業教育を行う専門職大学、専門職短期大学の制度が検討され、平成三一年度から設置が承認された。新たな高等教育機関の設置が決まり、短期大学の存在と専門職短期大学との育成の違いの差別化の不透明性、現存の教育機関の中の職業スキルの脆弱さ、専門職業人育成の既存の大学が専門職大学への移行が強く求められる可能性への混乱そして超少子化の影響もあり、学生募集についてもますます厳しさがまわることが予想される。

当短期大学部は適正人員で、これまで教育の質保証、地域からの強い信頼を持った地域貢献活動を継続し、教育改革の努力を積み重ねてきているが、短期大学が存在価値のある高等教育機関としてそれらを伝えるには難しさがある。しかしながら広く社会に認知されるよう引き続き広報の手段を含めて更に検討を加える必要があると考える。IR部署の設置と専門職員担当者の配置によるエビデンスのある学内外の情報収集及び調査や自短期大学部の強み、弱みを把握したうえで特徴を活かした戦略的學生募集の取り組みを行うことが重要と考える。

以上歴史的変遷・考察を踏まえながら、運営のキーワード「大学・

地域とともに歩む

日本私立短期大学協会 副会長
近畿私立短期大学連合会 会長
園田学園女子大学短期大学部 理事長

一谷 宣宏

「短期大学教育のグランドデザイン」の命題に対しては、ここ数年一般的な議論が進んでいるところであるが、普遍的な考察はなかなか困難であるので、当学園としては我々の短期大学部を事例に考察を進めてみたい。まず、未来を語るには学園の歴史の認識が必要で、設立された趣旨とその後の変遷を整理し、そしてそこから将来の新しい姿の教育のデザインを模索していくということとしたい。なお、当短期大学部は、まず短期大学として設立され三年後に四年制大学が設立され、組織機能は一体として運営されてきた経緯があり、結果として短期大学部が大学の短期（二年）の一教育部門として位置づけられていることを認識する必要がある。

本学の前身は、昭和一三年に設立された園田高等女学校である。当時の園田村（現尼崎市北東部）の村長・中村龍太郎の「地域の女子教育の振興を図りたい」という強い思いにより設立されたものである。

女学校は現在の園田学園中学校・高等学校に引き継がれ、発展的に一九六三年に園田学園女子短期大学家政科を発足し、現在の短期大学部に引き継がれている。その後一九六六年には大学を開設し、学部改編を繰り返した現在の実学中心の教育体制が出来上がった。その間、設立の時に掲げられた建学の精神「捨我精進」に基づき教育が継続されている。そして二〇一六年度には建学の精神をさらに具現化するため「経験値教育により他者と支え合う人間の育成」に大学の理念を再設定した。短期大学設立後、地域住民を対象とした生涯学習講座の実施、地域へのキャンパス開放、女性に限らない情報教育聴講生の受け入れ、近松研究所の附置など、地域社会に本学の持つ教育資源等を提供し、五〇年以上を経た現在もなお「地域に開かれた、地域と共に歩む園田学園女子大学 短期大学部」として社会に多くの有用な女性を輩出するという役割を果たしてきた。

地域連携推進機構年報 第5号

2018年3月発行

園田学園女子大学地域連携推進機構

<http://www.sonoda-u.ac.jp/chiiki/>

〒661-8520 兵庫県尼崎市南塚口町7丁目29-1

Tel 06-6429-9921

Fax 06-6422-8523

M L chiikirenkei@sonoda-u.ac.jp